

平田地区遺跡群

大槻新田遺跡  
手藏田3遺跡  
横代遺跡  
熊野田遺跡

発掘調査報告書

1989

山形県  
山形県教育委員会

平田地区遺跡群  
おお つき しん でん

大槻新田遺跡  
て ぐら だ  
手蔵田 3 遺跡  
よこ だい  
横 代 遺跡  
くま の だ  
熊 野 田 遺跡

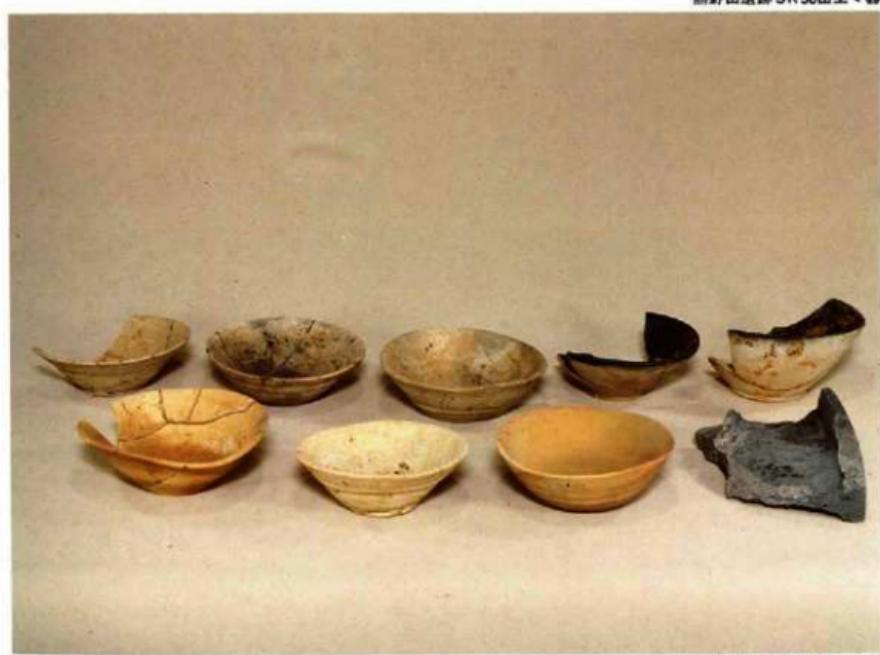
発掘調査報告書

平成元年3月

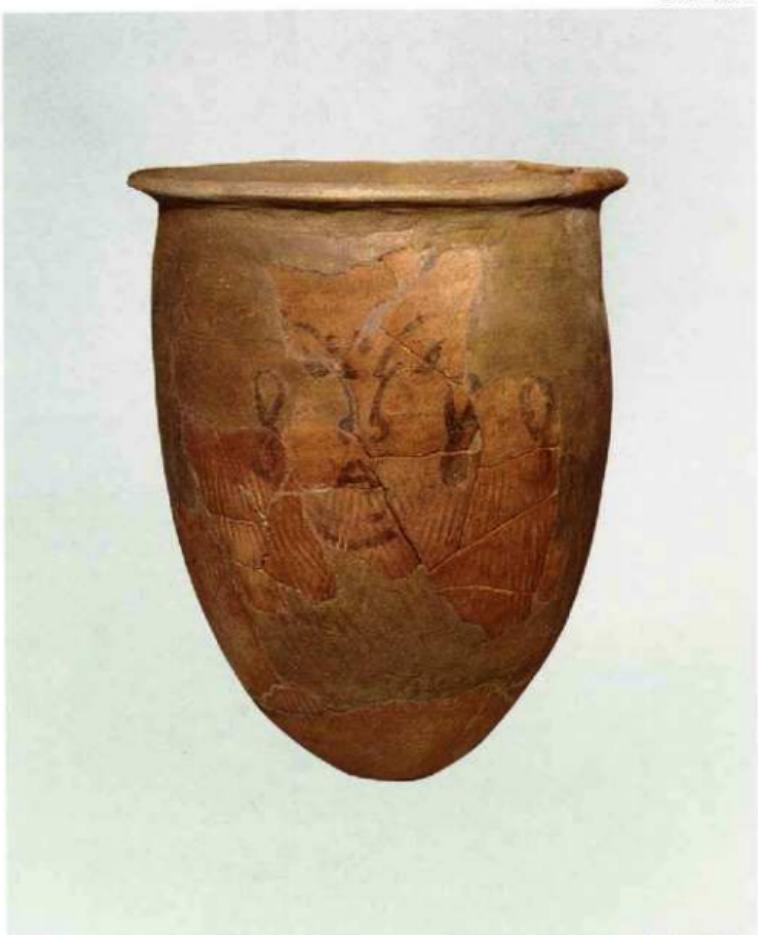
山形県  
山形県教育委員会



熊野田遺跡 SK 38出土々器



熊野田遺跡 SK 70出土々器



橫代遺跡出土人(神)面墨繪土器  
(約1/3大)

## 序

本報告書は、山形県教育委員会が昭和63年度に実施しました県営ほ場整備事業「平田地区」にかかる平田地区遺跡群、大槻新田遺跡・手藏田3遺跡・横代遺跡・熊野田遺跡の発掘調査の成果をまとめたものであります。

これらの調査は数年来引き続いて行われた平田地区関係の最終年次分として実施されたものであり、これまでの調査から当該地域の平安時代の集落を中心とする内容が飛躍的に増大いたしました。本報告もそれらの一端に加えるべき貴重な資料群を追加、提供しております。

近年の急速で広範になされる諸開発事業の進展は、埋蔵文化財の保存や保護とのかかわりにおいても困難な問題を多く生み出す所となっておりますが、「県民福祉の向上」、「こころ広くたくましい県民の育成」とする基本的な立場から調整を行い、今後とも埋蔵文化財の保護とその活用を計ってまいる所存です。

最後になりましたが、本調査に御協力いただいた最上川右岸土地改良事務所・日光川土地改良区・酒田市教育委員会および調査に従事された地元の方々に対してこころより感謝の意を表しますとともに、本書が地域の歴史を解明する上で基礎的な資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

平成元年3月

山形県教育委員会

教育長 木場清耕

## 例　　言

1 本報告書は山形県教育委員会が山形県農林水産部の委託を受けて昭和63年度に実施した「県営ほ場整備事業平田地区」に係る平田地区遺跡群（大槻新田遺跡・手蔵田3遺跡・横代遺跡・熊野田遺跡）の発掘調査報告書である。

2 各遺跡の所在地・調査期間・調査体制等は以下の通りである。

大槻新田遺跡 (ASTOS-II) 遺跡番号2041 (山形県遺跡地図)

所 在 地 山形県酒田市大字大槻新田字槻ノ下ほか

現 地 調 査 昭和63年5月12日～昭和63年7月7日（延べ40日）

手蔵田3遺跡 (ASTTD3) 遺跡番号2031 (山形県遺跡地図)

所 在 地 山形県酒田市大字手蔵田字仁田67番地ほか

現 地 調 査 昭和63年7月4日～昭和63年7月15日（延べ10日）

横代遺跡 (ASTYD) 遺跡番号2044 (山形県遺跡地図)

所 在 地 山形県酒田市大字横代

現 地 調 査 昭和63年7月18日～昭和63年7月29日（延べ10日）

熊野田遺跡 (ASTKNII) 遺跡番号2028 (山形県遺跡番号)

所 在 地 山形県酒田市大字熊野田字村南

現 地 調 査 昭和63年5月23日～昭和63年7月1日（延べ30日）

調査主体 山形県教育委員会 調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 (主任調査員) 佐々木洋治 (同左) 野尻侃

(現場主任) 阿部明彦 (調査員) 吉田洋一

事務局 (事務局長) 後藤茂弥 (事務局長補佐) 土門紹穂

(事務局員) 佐藤大治 長谷部恵子 長谷川浩 高橋春雄

4 本報告書に収録した遺構の縮尺は1/80・1/40・1/30を基本とし、それぞれにスケールを付した。遺物は1/3ないし1/4である。また挿図及び本文中で用いた略記号は、S B:建物跡、S E:井戸跡、S K:土塙、S D:溝跡、E:遺構の構成因子(E D:周溝、E P:柱穴等)、S X:性格不明遺構、R P:登録の土器・土製品、R Q:石器・石製品等を表している。

5 本書中の遺構平面図、遺物実測図の表示基準は概ね以下の通りである。

(1)遺構平面図の方針は真北を示す。(2)遺物実測図の断面白抜きは土師器、黒ベタは須恵器、土師器の内面右側スクリーンは内面黒色処理(内黒)を各表している。

6 本報告書の作成は阿部明彦、吉田洋一の2名が担当し、漆山順子、小林延子、沢田恵美子、渡部由美子、石坂征子、秋山智子、三沢友子が補佐した。

7 本文の執筆はII章・V章1～4・VI章1～4を吉田が、その他を阿部が各分担した。

編集は阿部がその任に当たり、全体を佐々木洋治が総括している。

# 目 次

|             |            |    |
|-------------|------------|----|
| I 調査の経緯     | 4 遺物       | 28 |
| 1 調査に至る経過   | 5 まとめ      | 29 |
| 2 調査の経過     | V 横代遺跡     |    |
| II 遺跡の立地と環境 | 1 調査の概要    | 30 |
| 1 地理的環境     | 2 遺跡の層序    | 31 |
| 2 歴史的環境     | 3 遺構と遺物の分布 | 31 |
| III 大規新田遺跡  | 4 遺構       | 32 |
| 1 調査の概要     | 5 遺物       | 37 |
| 2 遺跡の層序     | 6 まとめ      | 44 |
| 3 遺構と遺物の分布  | VI 熊野田遺跡   |    |
| 4 遺溝        | 1 調査の概要    | 45 |
| 5 遺物        | 2 遺跡の層序    | 47 |
| 6 まとめ       | 3 遺構と遺物の分布 | 47 |
| IV 手藏田 3 遺跡 | 4 遺構       | 48 |
| 1 調査の概要     | 5 遺物       | 55 |
| 2 遺跡の層序     | 6 まとめ      | 63 |
| 3 遺構        | VII 総 括    | 64 |

## 挿図目次

|                 |                     |
|-----------------|---------------------|
| 第1図 遺跡位置図       | 第11図 土壙跡 (2)        |
| 第2図 遺跡概要図       | 第12図 土壙跡 (3)        |
| 第3図 大規新田遺跡調査概要図 | 第13図 出土遺物 (1)       |
| 第4図 土層柱状図       | 第14図 出土遺物 (2)       |
| 第5図 A区遺構全体図     | 第15図 出土遺物 (3)       |
| 第6図 B区遺構全体図     | 第16図 出土遺物 (4)       |
| 第7図 掘立柱建物跡 (1)  | 第17図 手藏田 3 遺跡調査区全体図 |
| 第8図 掘立柱建物跡 (2)  | 第18図 土層柱状図          |
| 第9図 井戸跡         | 第19図 S K 2 土壙跡      |
| 第10図 土壙跡 (1)    | 第20図 出土遺物           |

|      |                   |      |               |
|------|-------------------|------|---------------|
| 第21図 | 調査区全体図            | 第33図 | A トレンチ概要図     |
| 第22図 | 土層柱状図             | 第34図 | S B101建物跡     |
| 第23図 | S K 土壙跡・S E 3 井戸跡 | 第35図 | S K70土壙跡      |
| 第24図 | S G 7 河跡          | 第36図 | B・C トレンチ概要図   |
| 第25図 | S G 7 河跡遺物出土状況    | 第37図 | S K38土壙跡      |
| 第26図 | S G 8 河跡          | 第38図 | E・F トレンチ概要図   |
| 第27図 | 出土遺物 (1)          | 第39図 | E・F トレンチ検出土壙跡 |
| 第28図 | 出土遺物 (2)          | 第40図 | 出土遺物 (1)      |
| 第29図 | 出土遺物 (3)          | 第41図 | 出土遺物 (2)      |
| 第30図 | 出土遺物 (4)          | 第42図 | 出土遺物 (3)      |
| 第31図 | 遺跡概要図             | 第43図 | 出土遺物 (4)      |
| 第32図 | 土層柱状図             |      |               |

## 図版目次

|      |               |      |                |
|------|---------------|------|----------------|
| 図版 1 | 遺跡周辺の空中写真     | 図版19 | S K 2 土壙跡他     |
| 図版 2 | 遺跡遠景          | 図版20 | S G 7 河跡 (1)   |
| 図版 3 | 大規新田遺跡近景      | 図版21 | S G 7 河跡 (2)   |
| 図版 4 | S B 1 掘立柱建物跡  | 図版22 | S G 8 河跡       |
| 図版 5 | S B 4 掘立柱建物跡  | 図版23 | 出土遺物 (1)       |
| 図版 6 | S E34 井戸跡     | 図版24 | 出土遺物 (2)       |
| 図版 7 | S E44 井戸跡     | 図版25 | 出土遺物 (3)       |
| 図版 8 | S E47 井戸跡     | 図版26 | 熊野田遺跡第2次調査区近景他 |
| 図版 9 | S E60 井戸跡     | 図版27 | 調査風景           |
| 図版10 | S K40 土壙跡他    | 図版28 | A トレンチ他        |
| 図版11 | S K78 土壙跡他    | 図版29 | S B101建物跡      |
| 図版12 | 出土遺物 (1)      | 図版30 | C トレンチ他        |
| 図版13 | 出土遺物 (2)      | 図版31 | E トレンチ他        |
| 図版14 | 出土遺物 (3)      | 図版32 | 学校前調査区近景       |
| 図版15 | 出土遺物 (4)      | 図版33 | S K38 土壙跡他 (1) |
| 図版16 | 手藏田3遺跡調査トレンチ他 | 図版34 | 出土遺物 (1)       |
| 図版17 | 出土遺物          | 図版35 | 出土遺物 (2)       |
| 図版18 | 横代遺跡A トレンチ他   | 図版36 | 出土遺物 (3)       |

# I 調査の経緯

## 1 調査に至る経過

酒田市の東部に位置する平田・中平田東地区は、地元の故伊藤安記氏による地道な調査により早くから土器や柱痕の多く出土する所として知られていた。一方、近年の継続的大規模なほ場整備事業の進展を契機とした緊急発掘調査は当該地区に所在する20余りの奈良～平安時代にかかる遺跡群の内容を明らかにし、古代出羽國の中枢部を知る上では欠くことのできない幾多の資料を提供している。そこでは、各遺跡の年代と性格および相互の関連、ひいては9世紀以降の出羽国府跡と目される史跡「城輪櫛跡」との関連等、より掘り下げられた形での政治観・集落観の追及が今日的課題として要求される。

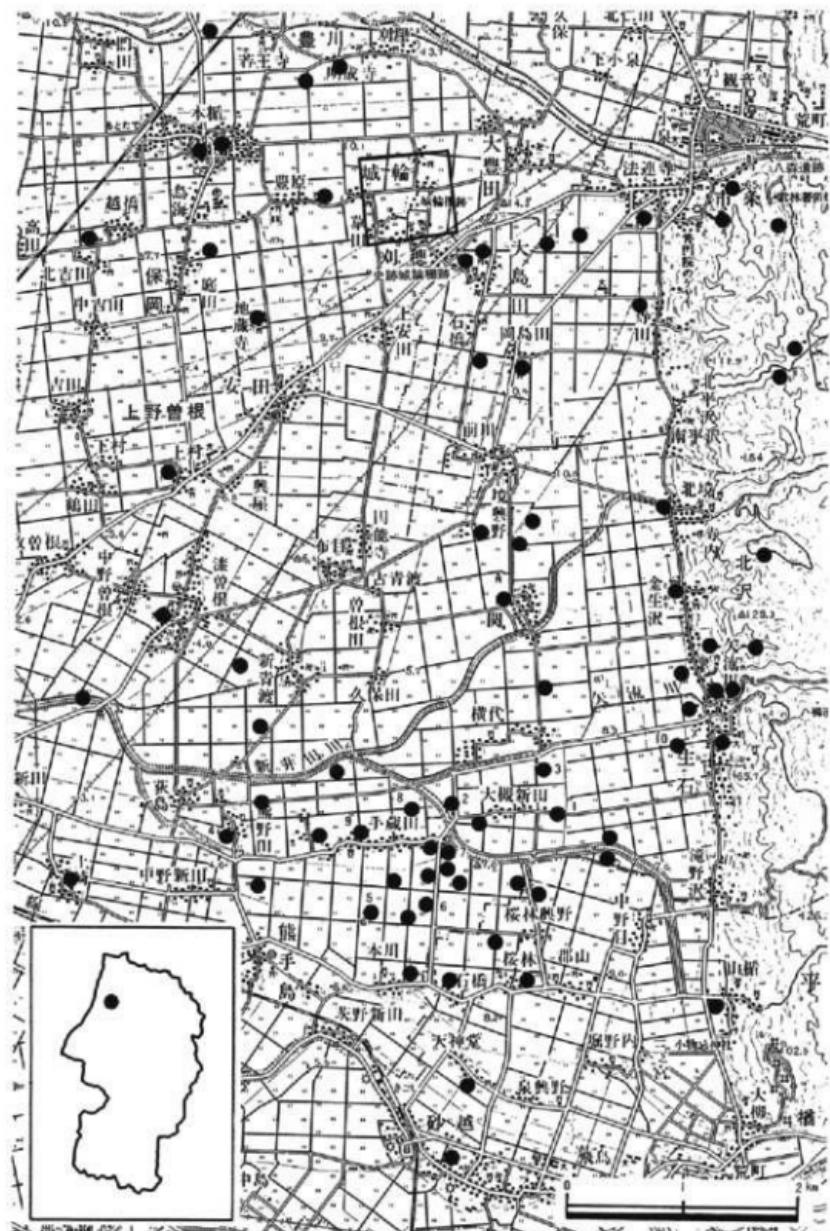
今時調査の対象となった大槻新田遺跡・手藏田3遺跡・横代遺跡・熊野田遺跡の4遺跡は昨年に引き続く昭和63年度県営ほ場整備事業(平田地区)に係ることから実施した緊急発掘調査であり、着手までに昨年度行った分布調査の結果を下とした関係者間での現状保存を前提とした協議が重ねられた。しかし、止む得ず破壊される部分(用排水路等)や面的に掘削が深くなると予想される部分については緊急に発掘調査を実施して記録保存に資すると決したものである。

## 2 調査の経過

平田地区に関連する大槻新田遺跡・手藏田3遺跡・横代遺跡・熊野田遺跡の4遺跡は、各遺跡の遺存状況とほ場整備事業の施工方法等に照らして、面的対応が必要な大槻新田遺跡と、大方は面の保存が図れる手藏田3遺跡他の二遺跡に区分でき、後者で用排水路部分に限った調査を実施して記録保存に資する方法を取った。従って、調査区は用水のパイプレイント設置部分で幅2m、排水路部分で幅3mを各基準としたトレンチとし、その延長は遺跡範囲に係る部分までとした基準で設定している。

また、面的対応を要した大槻新田遺跡と調査開始時期が転作作物(大麦)の刈り入れ以前であった熊野田遺跡では事前の四月段階に調査区を設定し、その部分に付いて転作確認後に青刈りを行う等の措置が取られた。このことは、調査計画の遂行と周辺部分での農作業との調整上避けて通れない方法であったが、調査関連の重機搬入路や土置き場他が最小限に限られるといった致し方ない制約を受ける事となり、必ずしも効率的で無い状況を時折招く所があった。

調査の成果は各遺跡の項に述べる通り平安時代中期を中心とする時期のものであるが、当然の帰結としてトレンチ調査での検出遺構が地点的・部分的となり、面的調査で関連遺構の広がりを見る結果となっている。



1. 大根新田道跡 2. 手藏田3道跡 3. 横代道跡 4. 猪野田道跡 5. 手藏田5道跡 6. 手藏田6道跡  
7. 手藏田10・11道跡 8. 手藏田12道跡 9. 手藏田2道跡 10. 生石2道跡

第1図 遺跡位置図

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境

庄内平野は山形県北西部に位置し、東側を出羽丘陵、西側を庄内砂丘とに挟まれた県内唯一の海岸平野である。南方に広く南北に長い三角形を呈し、南北55km、東西幅は北端部で3km、南部で最大25kmを測る。平野の中央部には、平野を南北に二分する形で最上川が貫流している。最上川は単なる地形的な意味のみならず、庄内地方においては歴史的、政治・経済的分野においても非常に重要な役割を担ってきた。

今回の調査の対象となった平田地区遺跡群は、最上川右岸、庄内平野の北半部に位置し、行政的には酒田市大規新田・横代・熊野田の各地区に相当する。遺跡は集落に隣接する水田中に存在し、標高は熊野田遺跡で4m前後、最も高い横代遺跡でも8mに満たない。

庄内平野の北半部は南部に比してより高低差が小さく、かつまた遺跡の立地する地域は広義の河間低地に相当する為、巨視的には極めて平坦な印象を受ける。しかしながら遺跡及びその周囲には、新井田川や旧平田川によって形成されたと考えられる微高地や低湿地が複雑に展開し、集落形成の面で多々の制約を加えていたと理解できる。これらの状況は実際の発掘調査によって確認でき、遺構・遺物の分布密度と良く対応しているが、集落即ち人間の生活するフィールドとして捉えていく為には、微高地のみならず、周囲の低湿地や河川に迄視野を広げた検討がなされていく必要があると考えられる。

### 2 歴史的環境

庄内平野北半に分布する奈良・平安時代の遺跡については、総合パイロット事業や場整備事業との関連などから多数の調査が行われ、その存在が確認してきた。中でも城輪柵とその周辺地域は、堂の前遺跡や現在も継続調査中の八森遺跡をはじめ、格式の高い遺跡が数多く存在し、性格・内容共に同時期の中核的地域であったことは疑いない。

一方、比度調査の行われた平田地区とその近隣の地域も、生石・手藏田・熊野田地区を中心に、内容の充実した遺跡の集中地帯となっている。大規新田遺跡には「公司屋敷」という極めて興味深い地名が伝えられており、その性格が大いに注目される。

最上川沿辺には、8世紀末の創社とされる飛鳥神社を擁し、飛鳥・郡山といった古代縁りの地名を残す集落群が存在する。遺跡については未調査ながら、地域性や周囲の遺跡の状況等を加味すれば、古代出羽国における重要な位置を占めている可能性は非常に高い。

古代出羽国以前の庄内を考える上では、弥生時代の遺物が多数出土した生石2遺跡が特筆されるが、断片的ながら、最上川以北の沖積地では此迄に例のなかった古墳時代の遺物が出土している関B・南興野の両遺跡についても非常に关心が持たれるところである。

第2図 造営概要図



### III 大槻新田遺跡

## 1 調査の概要

調査は昨秋実施した分布調査の内容およびほ場整備の実施計画・工法に照らして特に破壊される恐れの強い部分を限定的に対象として実施した。従って調査の事前に地盤高と掘削深度等の検討を行い、止むを得ず破壊が予想される部分を線引きして調査区の選定を行っている。すなわち、特に掘削の深くなる用排水路設置ラインと地盤が高いために切り土となる部分、ないし重機による面整地が地下の造構に重大な影響を及ぼすと判断される部分等である。本遺跡では面的に拡張したA・B地区が先に述べた後者に、排水路予定のAトレーンチとパイプライン予定のBトレーンチが前者に各該当するものである(第3図)。

調査はこうして設定した各調査区に2m(パイプ)、3m(排水路)、5m(A・B拡張区)をそれぞれ単位とするグリッドの設定から始め、重機による表土の除去、手作業の面整理、面精査と進めている。その結果、A・Bトレーナーでは殆ど遺構が見られず、僅かにBトレーナー東端で土壤1基と溝跡1条が検出された程度であったが、面的に拡張したA・B区では掘立柱建物跡や井戸跡、加えて多くの土壤跡他が検出された。これらは伴出の遺物から見て、主として平安時代に帰属する集落跡の一端と理解される。



### 第3図 大槻新田遺跡調査概要図

## 2 遺跡の層序

遺跡の立地する区域での基本的な層序は概ね右の第4図に示す通りで、上層は暗褐色の粘質土が主体となり、下層の基盤が砂質シルトないし一部粘質土となっていた。

遺物は主に暗褐色粘質土(遺物包含層)のII層中から検出されたが、長年の耕作等擾乱からかI層中にも多くの細片を認めていた。また、遺構の検出はIII層上面であったが、拡張区の地盤が元々高かったと見え、上面が大分割平を受けた様子が所々に窺えた。例えば、建物跡の柱を支える基礎板が検出面にからうじて張付く例や、既に擾乱されて飛んでしまったと判断できる箇所が幾つか認められた等である。

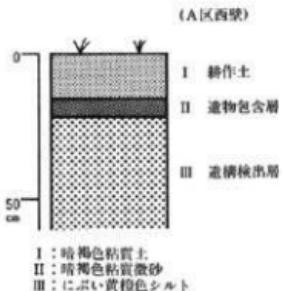
以上、面的に広げた区域での概略を述べたが、用排水路に係るA・Bトレンチでは調査区が遺跡範囲の西縁に係った等の理由からか、西側に向かう程II層の層厚が増し、かつ基盤となるIII層の相対的低下とグライ化・粘質化の傾向が顕著であった。

## 3 遺構と遺物の分布

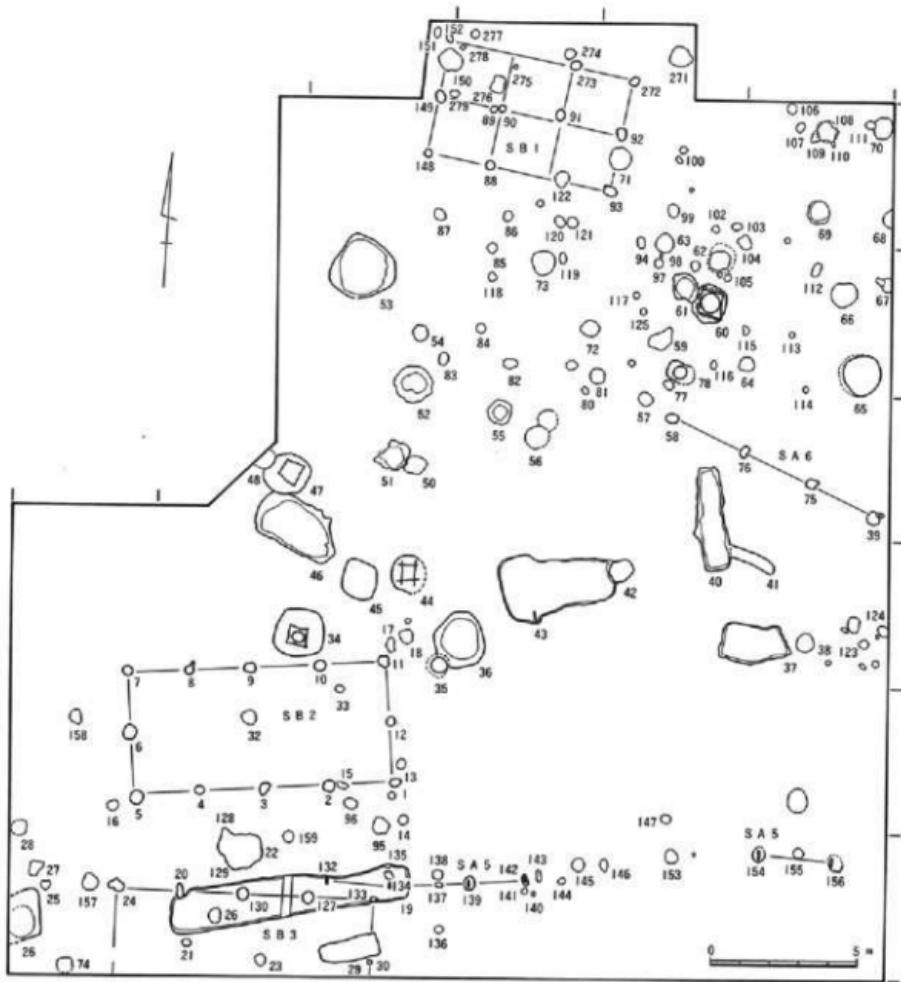
検出された遺構はBトレンチ東端部の土壤他若干を除けばいずれもA・Bの拡張区に認められ、掘立柱建物跡を中心とした屋敷地跡と捉えられる内容を持つ。

A区では母屋的な建物跡3棟以上、柱列2基、井戸跡4基および大小の土壤多数が検出され、その配置は調査区を北東から南西にかけて横切る形となる。こうした遺構の配置とその意味は遺跡全体の広がりや在り方(範囲・規範・規制)、ひいては自然地形とのかかわり(立地)の中で理解されるべき事柄で、今次調査の限定的資料だけでは論ずるに充分でない。ただし、自然地形との相関は少なからず窺えると推測でき、そのことは遺跡範囲との関連でも補足されよう。遺構の種類は建物跡、井戸跡、幾つかの用途が想定出来る土壤群、何らかの区画を意味する柱列等からなり、各々が基本的な単位となって組み合わさり機能していたと考えられる。概略を言えば、同一地域での基本単位が(二~三単位程度?)ある一定期間中に継続した結果を反映していると考えられ、遺物の面でも基本的にこれらの遺構と密接にかかわる在り方が散布状況、帰属時期等で窺えた。

一方、B区では掘立柱建物跡1棟、小柱穴多数、土壤数基、溝跡5条他が検出され、その位置と配列から北東方向への広がりを持つことが推測された。しかし、それらの大半は調査区外に係っており、遺構群の範囲等広がりと内容は明らかにできなかった。なお、A



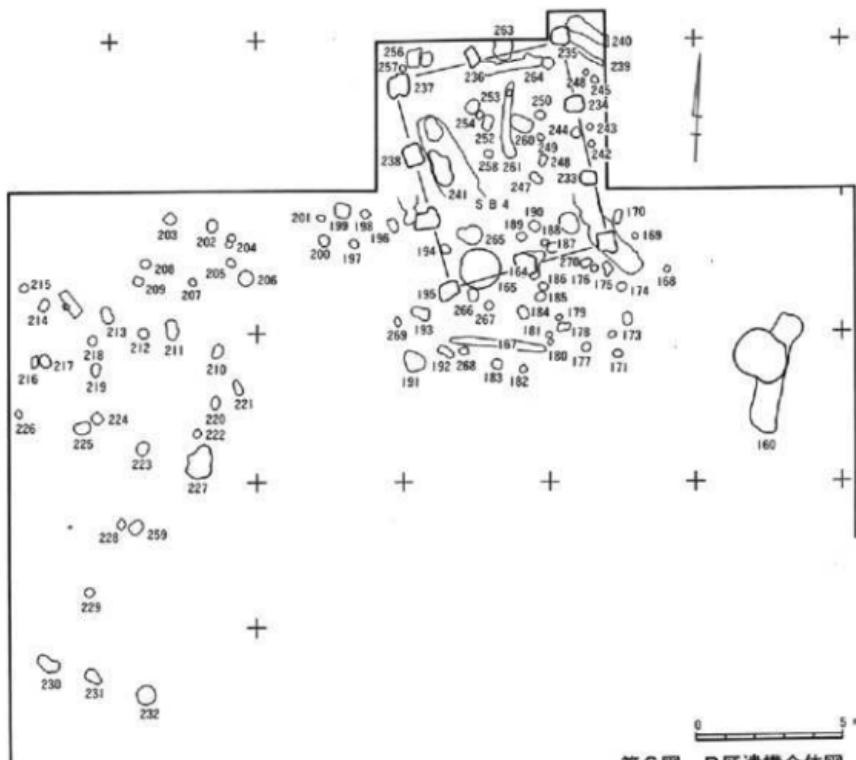
第4図 土層柱状図



第5図 A区遺構全体図

区に近い南半部分は昭和30年代に行われた水田の盤下げによりほぼ破壊され、遺構の確認と検出が不可能であった。

この地区での遺物は主として建物跡東南部の土壙SK188周辺と土壙SK160等から出土した物がややまとまりを持つもので、他の大半は原位置を止めない二次的な破片であった。また、これら遺物の時期的様相ではA区に異なる大分先行する一群と、ほぼ同時期と見なせるものとが認められ、どちらかと言えば前者が主体であった。

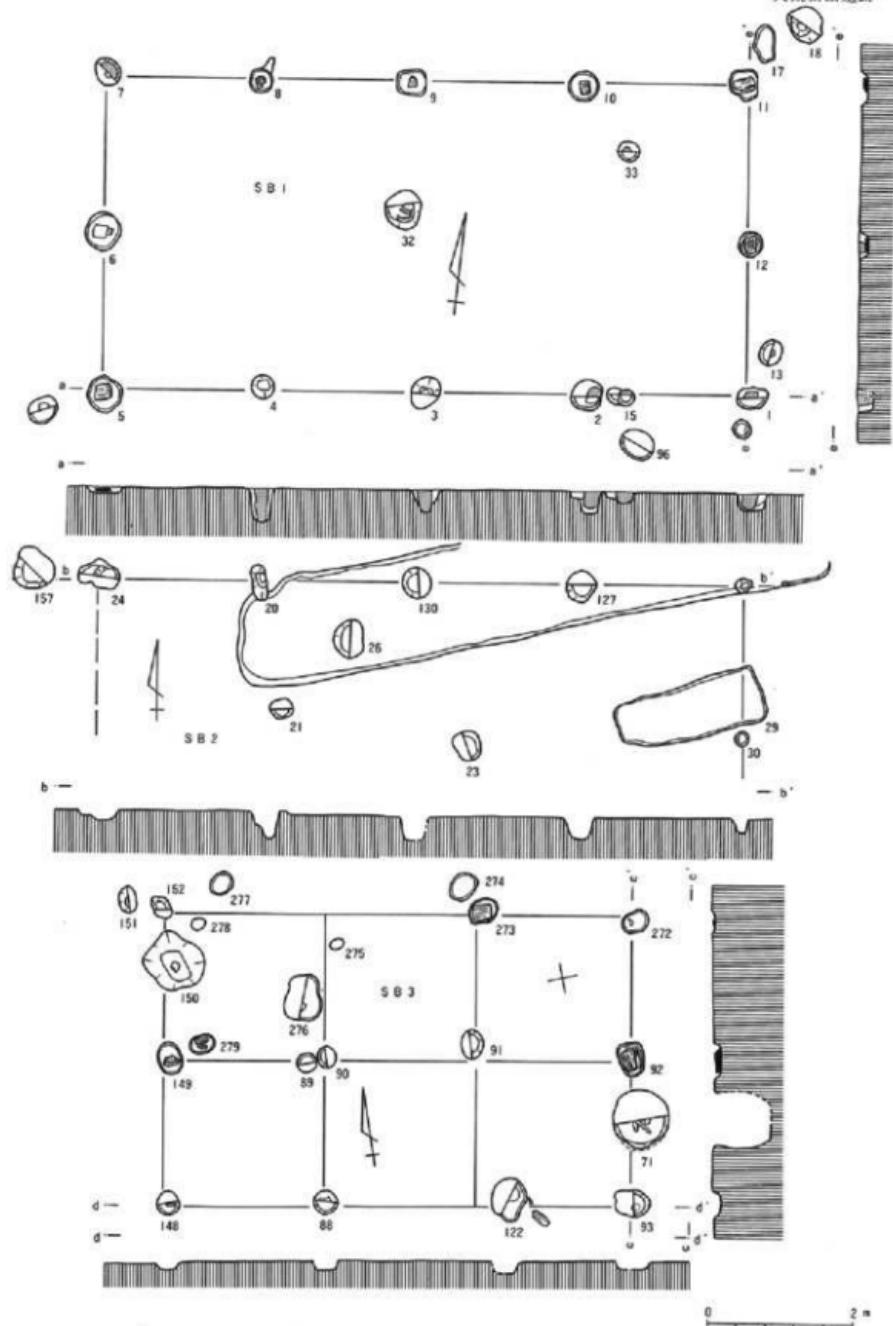


第6図 B区造構全体図

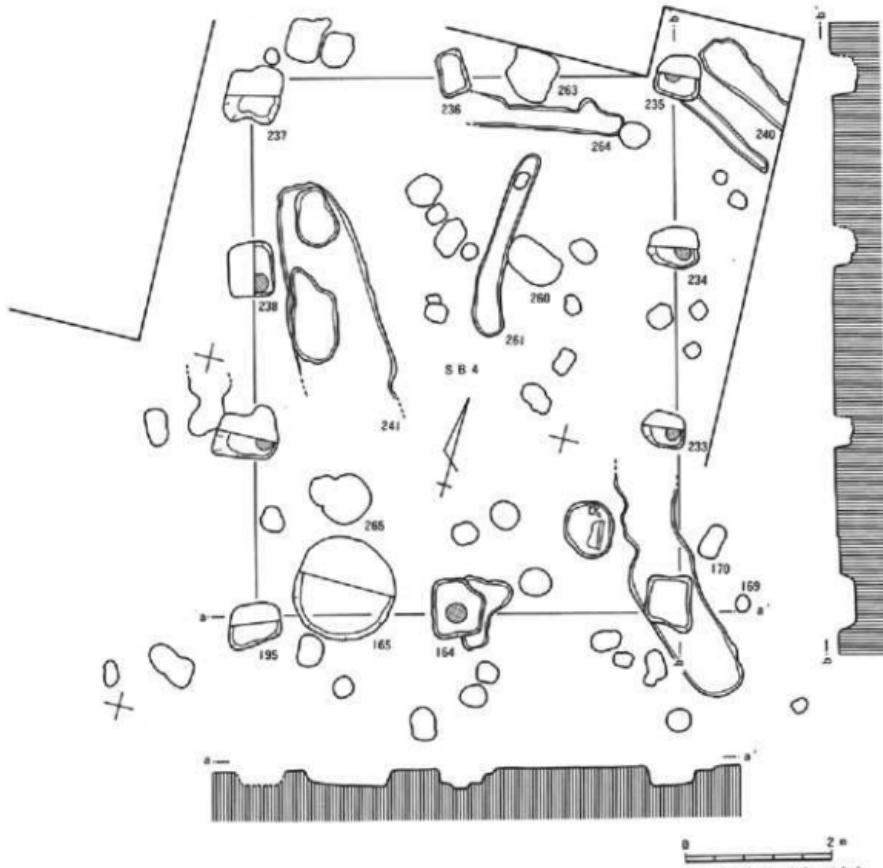
#### 4 遺構

##### 1) 据立柱建物跡(第7・8図)

S B 1 本建物はA区の10-12G～12-12Gに位置する梁行二間、桁行三間規模の東西棟で、南北軸方向はN-5°40'-Wを測る。柱間距離は梁・桁行共に多少のばらつきがあるもののほぼ七尺等間と見て取れる。掘り方プランはいずれも略円形を基調とし、検出径の最大で44cm、最小で24cmを各測る。また、確認面から掘り方底面ないし柱痕下面までの深さは4～20cmと大きなひらきが見られるが、このことは各柱穴での礎板の有無に關係がある。すなわち、礎板の検出されたE P 5・6、8～12の柱穴では、縦じて掘り方が浅く、その他のもので、掘り方内に柱痕が認められて深いと言った状況である。礎板は厚さ3cm内外、短辺15cm、長辺20cm程の長方形を呈し、針葉樹の割材を素材としていた。これらの据え方は掘り方底面中央部に一枚を平らに置くものが大半ながらE P 11では二枚重ねで用いる仕様が認められた。これら柱穴からは須恵器壊他、土師器(内黒・両黒壊)、あかやき土器壊・壊等の小破片若干が出土している。



第7図 挖立柱建物跡(1)



第8図 挖立柱建物跡(2)

**SB 2** 本建物跡はA区の南西コーナー付近に位置し、SB 1建物跡に南接して検出された。規模はSB 1にはほぼ同等の二間、四間程度と推測できるが、西辺の柱列が調査区外に係るため明らかでない。主軸方位はSB 1より幾らか北に偏して略正東西を向く。

柱穴は北辺の桁行を現すEP 24・20・130・127他の5本と、梁行を示すと考えられるEP 30等からなり、各柱間距離は約210cm前後(7尺等間)で殆どばらつきがない。

掘り方はプランが円形基調で径20~40cm、深さ6~20cmを各測り、北東隅の柱穴内に礎板と思われる残片が認められた。

**SB 3** 本建物跡はA区北辺の中央部分に検出された総柱の東西棟で、南北二間、東西三間の規模を持つ。柱間は桁行210cm(7尺等間)、梁行約200cm等間で、規模的に上記二者より小振りとなる。柱穴の掘り方プランは円形ないし梢円形で、径30~45cmを各測り、確認

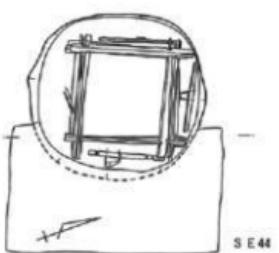
面からの深さ3～8cmと極めて浅い。比較的遺存状況の良いE P 273・92・149等の柱穴では底面にSB 1同様の礎板が認められたが、その他の柱穴では構築深度が本来的に浅い等の理由からか擾乱されて飛んでしまった様子が見受けられた。例えば、礎板が掘り方プランの南東にずれるE P 122や、掘り方・礎板共に痕跡的状態のE P 272のそれである。なお、柱穴からの出土遺物は無く帰属時期は明確でない。また、内部に位置するE P 90・91の在り方は外周のそれとは異なることが明らかで、組成されない可能性も考えられる。

**S B 4** 本建物跡はB区の北辺中央に検出された桁行き三間、梁行き二間規模の南北棟である。柱間距離は桁行のE P 236～237・E P 164～195間で270cm(9尺)、E P 236～235・E P 164～170で300cm(10尺)を各測り、梁行の東西で間合を異にしている。一方、桁行は東辺・西辺共に240cm(8尺)等間で殆どばらつきが見られなかった。建物の主軸方向はN-16°-Eを測り、これまで見たB区の建物跡とは約80°近い違いを認める。また、掘り方プランは隅丸方形を基調とし、規則的にも一辺が60～70cmを測る等大形の傾向が看取される。また、覆土や出土遺物の面でもA区のそれとは異なることが指摘でき、覆土で褐色系の粘質シルト、遺物でヘラ切り無調整の坏を主体とした在り方が大きな特徴として上げられる。結論的には、両者の時期的な隔たりが大きく、かつA区にB区の建物が先行する事等に起因すると捉えられよう。

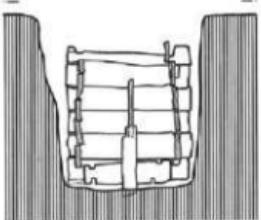
## 2) 井戸跡(第9図)

**S E 34** A区西南部の建物跡SB 1に北接して検出された井戸跡で、二重ないし三重の矢板(縦板)と横桟、および曲物を転用した井戸眼より成る構造を持つ。掘り方は、一辺約160cm前後の隅丸方形で、深さは井戸眼の基底位置等から最深で約140cm程と推定される。井戸となる矢板は幅15cm、厚さ1cm内外の板材で、先端を剣先状に加工している。長さは、残りの良い内側のもので残存長100～120cmを測るが、最も外側の材は添え・押え的な在り方で遺存も悪い。横桟は4×3×55cm程の角材を井形に組むもので、先端を凹状と凸状とにしたほど組みである。設置位置は井戸眼にほぼ接する下端部と覆土1層レベルの上部の二箇所と看取できたが、上部のそれは痕跡的で不明確である。井戸眼は口径37cm、深さ25cm程の中型曲物を転用して据えたもので、下半に木炭を充填していた。遺物は須恵器、あかやき土器、土師器の各器種が主に掘り方埋め土や井戸内の覆土2層から出土している。しかし、いずれも二次的な破片資料で、年代を特定するには充分でない(第15図)。

**S E 44** A区中央部の西側寄り、SB 1建物跡の北東に位置する。掘り方は径120cm前後の略円形プランを呈し、検出面からの深さ120cmを測る。井戸枠は基底部から組み上げられた6段の井桁組みでなり、それを防ぐ各辺中央の押え杭と横桟の他施設は無い。井桁は厚さ3～4cm、幅16cm内外、長さ85cm程に調整された板材が用いられ、材の表面は手斧により

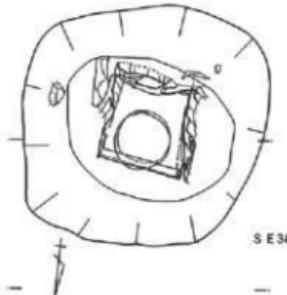


S E 44

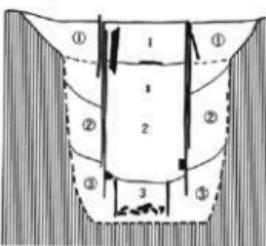


S E 44

- 1 : 暗黄橙色シルト  
2 : 灰青色粘質土  
3 : 暗灰青色粘質土



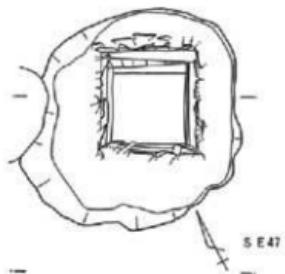
S E 34



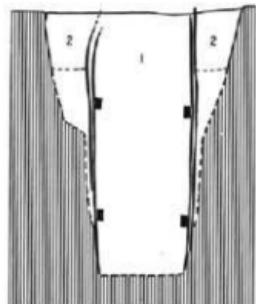
S E 34

- 1 : 暗褐色砂質土(炭化物・遺物含む)  
2 : 暗綠青色砂質土  
3 : 青灰色砂質シルト(下端に本岸)  
(削り方)

- ① : 黑色粘質土  
② : 暗綠青色砂質土  
③ : 青灰青色粘質シルト

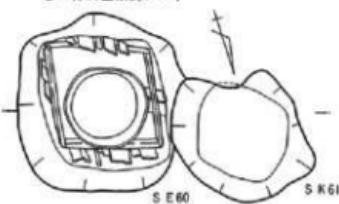


S E 47

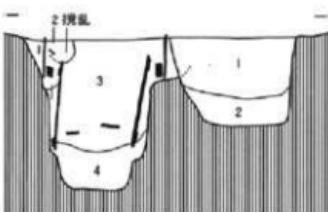


S E 60

- 1 : 暗色シルト(上半部分)  
2 : 暗綠灰色砂質土(掘り方埋土)



S K 61



S E 60

(内部)  
1 : 黑色粘質土

2 : 暗綠灰色粘質土

(削り方)

- ① : 暗褐色砂質土  
② : 黄褐色シルト  
③ : 黑色粘質土ブロック

- 1 : 暗色粘質土  
2 : 黑色シルト



第9図 井戸跡

丁寧に仕上げられる。なお組込まれた井組の内法はほぼ60cm方形であり、間口二尺の内寸が意図されたものと推測できる。

遺物は井戸内の覆土中層レベルから須恵器坏・蓋の破片若干とあかやき土器の坏・壺の破片11点が出土したに止まり、須恵器蓋(第9図71)を除いて形状他の窺えるものがない。

**S E 47** A区中央西側寄りに位置し、既に述べたS E 34・44井戸跡等に近接している。掘り方は長径150cm、短径130cmの略円形を呈し、深さは井戸枠の中位レベルまでの約80cm程と考えられる。井戸枠は二重の矢板と上下二段の横棟で構成され、井桁組や井戸眼等を伴わない。井戸眼を別とすれば構造的にはほぼS E 34に等しく、井戸内寸もS E 44同様60cm(二尺)四方を基本としている。ただし、矢板の遺存が良く大方170cm前後の残存長を測る点は本井戸の特徴となる。検出四基の井戸跡中ではその構築深度が最も深い。

遺物は掘り方、覆土の全体で214点が出土し、量的にあかやき土器の坏類や土師器の内黒・両黒の坏、および糸切り無調整の須恵器坏等が主体を占めた(第15図)。

**S E 60** A区の北東寄り、S B 3建物跡の南東近くに位置し、S K61と僅かに重複している。掘り方は径120cm前後の隅丸方形で、確認面からの深さは約100cmを測る。

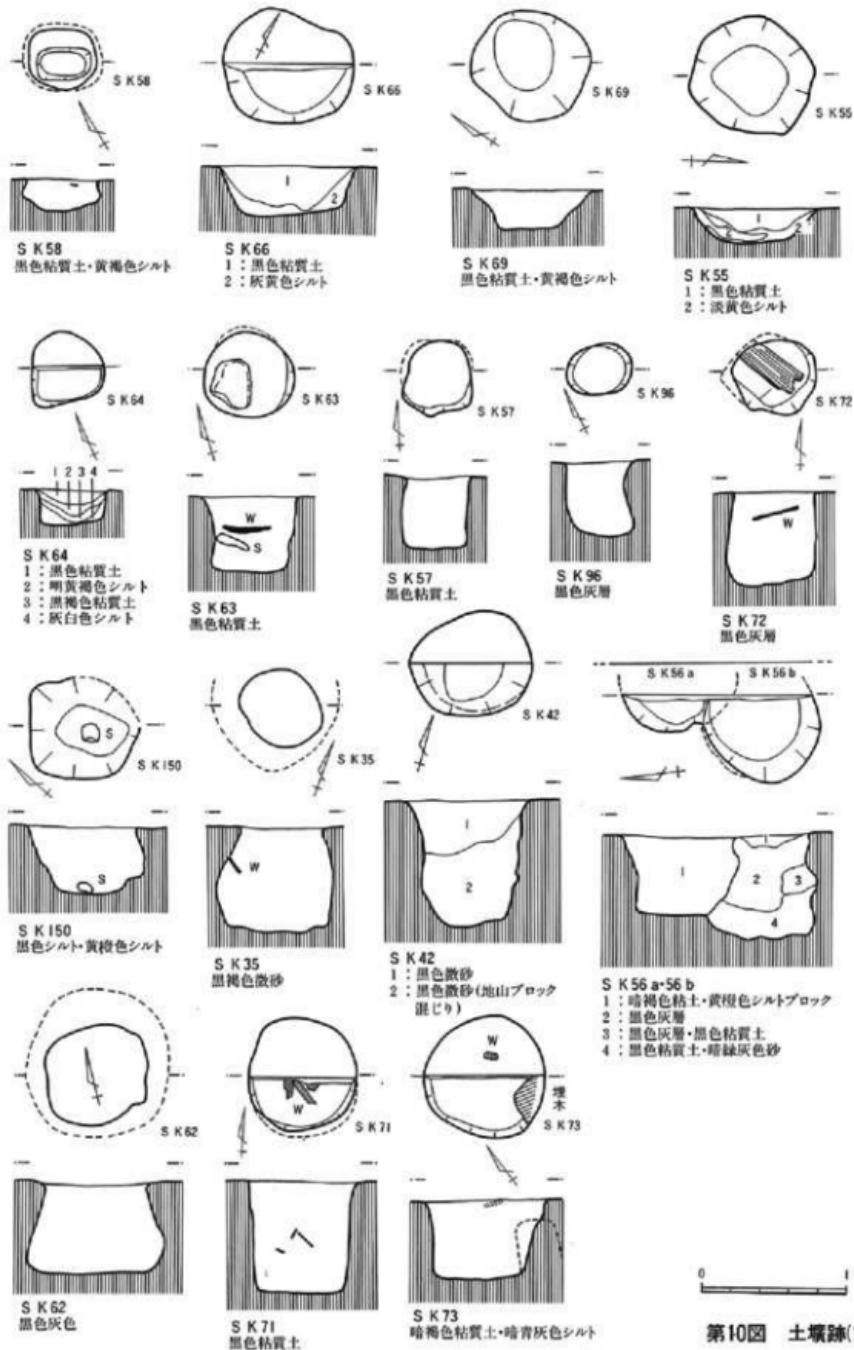
井戸枠は矢板・横棟の上部構造と、大型の曲物を据える下部構造とから成るが、上半部は大分割されたと見え残りが悪い。矢板は幅7~15cm、厚さ1~1.5cm、残存長約30cmを各測り、先端を平なまとしたものが大半である。横棟はやや厚めの角材(4×8×70cm)を二尺四方の井形に組み合わせるもので、その仕様はこれまでのS B 34・47とほぼ同様であった。一方、下半部の曲物は口径60cm、高さ60cmを各測る大型品で、井戸枠としての機能が考えられる。なお、掘り方底面近くに埋もれ木が横たわり、構築時に掘り抜いた様子が窺えた。遺物は須恵器・土師器・あかやき土器・磁他約56点が出土したが、この中に龍泉窯産青磁碗破片1点を認めている。

### 3) 土 壤(第10~12図)

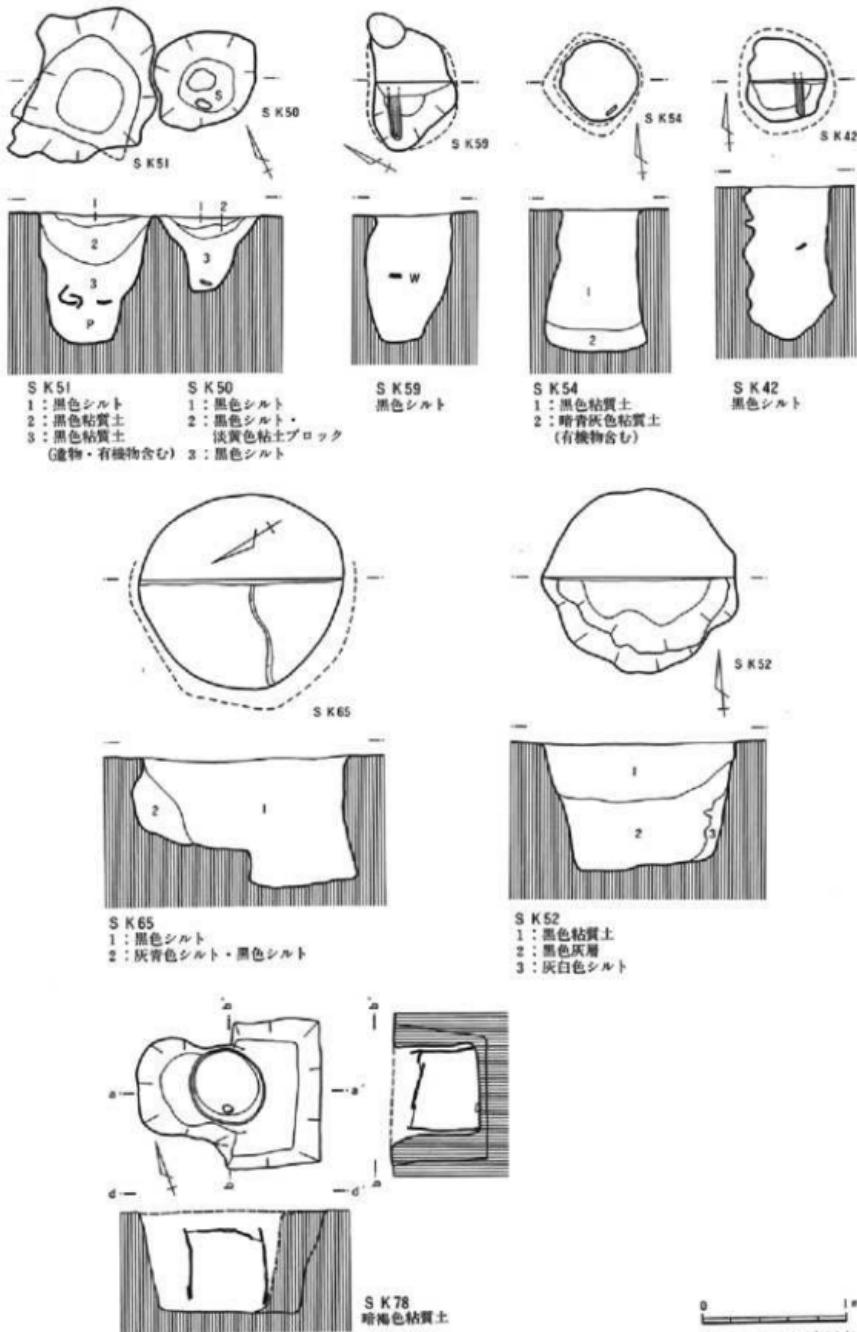
土壤はA区の南西域と北東域を中心とする二群の主体的分布状況が認められ、これらの形態や規模等の特徴から以下に述べるA~Fの類型にまとめることが可能である。

**A類:**径50~90cm、深さ30cm以下の本遺跡では最も小さく浅い小型の一群で、S K55・58・64・66・69等が該当する。側壁の状態はなだらかな傾斜を呈すものが多いが、S K58では袋状の膨らみを認めた。覆土はS K64を除けば黒色粘質土の単純層が主体的で、人為的な堆積状況と考えられる。遺物は総じて少なく、S K55・64・66・69の覆土中からあかやき土器を中心に内黒土師器や須恵器坏などの破片若干が出土したに止まっている。なお、一次的遺存を示す完形品等のまとまった出土は見られなかった。

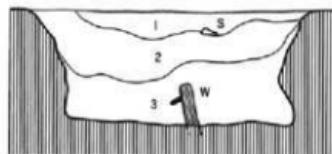
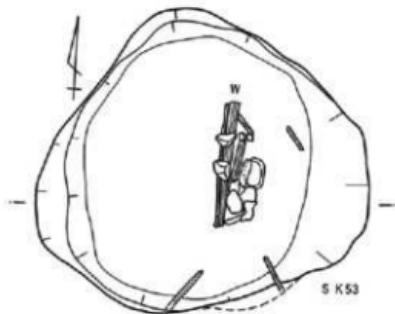
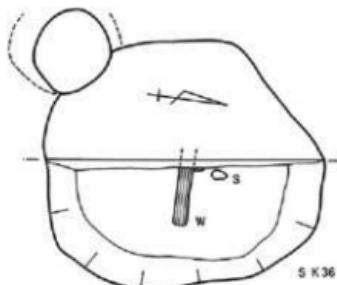
**B類:**径50~100cm、深さ45~80cmの領域にまとまる一群で、その周辺に径の小さな一群と掘



第10図 土壌跡(1)



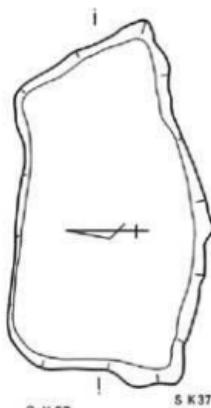
第11図 土壌跡(2)



SK 36  
1: 暗褐色砂質土  
2: 暗黃褐色砂質土  
3: 暗青灰色砂質土



SK 53  
1: 黒褐色粘質土  
2: 暗褐色砂質土  
3: 暗黃褐色砂質土  
4: 暗黃褐色シルト  
5: 暗綠灰色沙



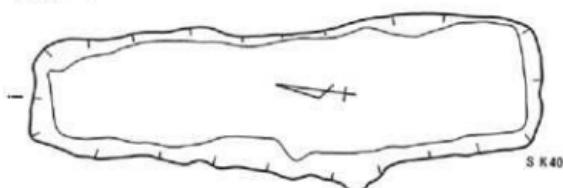
SK 37  
黒色シルト



SK 46  
1: 黑色灰層  
2: 暗褐色粘質土  
3: 明綠灰色シルト



SK 40  
1: 黑色灰層  
2: 黑褐色粘質土  
3: 黑色粘質土  
4: 黃褐色砂質土  
5: 黑褐色砂質土  
6: 黑灰色粘質土  
7: 黑褐色粘質土  
8: 綠灰色シルト



0 1m

り込みの深い一群とが存在する。ここでは便宜的に前者からB1、B2、B3類として類別するが、側壁の状態他から更に細分が可能と考えられる。

B1類:径と深さにそれほど差のない類型で、SK35・50・56a・56b・62・63・71・72・73・78・105が該当する。覆土は黒色の微砂や灰層の単純層で成るものが多く、板状木片や蓋石様の偏平疊が覆土中位から上位のレベルで散見される(SK71・72・63)。側壁の状態ではSK35・62がラスコ状あるいは袋状を呈す他は概ね円筒形を基調としている。

なお、SK78では土壙本体からやや東にずれた位置に口径・高さ共に約50cmを測る曲物が据えら、その上部に板の端材等で蓋をした様子が窺われた。また、基底面に刃を突き立てた状態で刀子一振りを検出している(第15図75)。本類は検出土壙での主体を占め、A区の北東域に分布的中心が認められる。

B2類:径が小さい割に掘り込みの深いもので、SK57・96が該当する。覆土はいずれも黒色の単一層で、B1類他に共通した在り方が窺えた。

B3類:径がやや大きくかつB類中では最も掘り込みの深い類型である。しいて言えば次に述べるC類に近いタイプでもありSK42・51等が該当する。覆土は他と同様に黒色土を主体とする単純な様相で、人為層と考えられる。遺物ではSK51の覆土3層から検出されたあかやき土器環と有台の土師器内黒环が注目され、土壙の性格や帰属年代を知る上で重要である。また、検出土壙中で唯一完形品が一次的在り方を残す例として特筆される。

C類:径55cm前後、深さ100cm内外の深い円筒状を呈すタイプで、SK42・54・59が該当する。但し、側壁の断面形態はそれぞれ袋状、ラスコ状、円筒状とまちまちである。

覆土は黒色シルトや粘質土のほぼ単純層でこれまでのA・B類に共通している。遺物は、厚さ3cm、長さ30~50cm内外の板状木片がSK42・59等で特徴的に認められ、土壙の性格にかかわりがあるかと注意されるが、土器類は殆ど認められない。

D類:径135cm前後、深さ120cm内外を測るやや大型の土壙で、SK52・65の二例が該当する。側壁の形状は一部ラスコ的なSK65と急傾で立ち上がるSK52で区別され、同等でない。覆土はA~C類と同様、黒色のシルトや粘質土を主体とする単純層でなり、自然堆積でないことが明白である。遺物は両土壙共にあかやき土器環類と土師器内黒环、須恵器環他の破片資料が覆土中から出土したに止まり、あかやき土器が主体であった。

E類:径200cm前後、深さ50~80cmを測り、円形規格の土壙では最大となる。SK36・53が該当し、覆土は暗褐色系の砂質土を基調とする。覆土的にはSE44等の状況に近い。

F類:長径200cm以上の長大で浅い土壙を一括して本類とする。平面形はSK47に見る長方形を基調とした様子を捉えられるが、橢円形状のSK46や台形状のSK37等があつて同一でない。覆土は黒色の灰層やシルトが主体で、土壙A~D類での様相に近似していた。

## 5 遺 物

遺物はA・BトレンチやA・B区の包含層および各検出遺構の覆土内等からあかやき土器・須恵器・土師器(黒色土器)等の土器類を主とした総数約6800点程が出土している。

土器類の種別内訳は本遺跡全体で須恵器37%、黒色土器5%、あかやき土器57%、その他1%であったが、調査区やトレンチ等の地点間に時期差他に起因すると考えられる様相違が認められた。一例を上げれば、A区の検出遺構で主体を占めた土壙での状況は須恵器26%、土師器8%、あかやき土器66%の各比率となり、あかやき土器の組成比がより高い等である。

土器以外の遺物では若干量の斎事他木製品、古鏡・刀子等の金属製品、土鍤等の土製品、砥石他の石製品等が出土している。以下では、全体に出土遺物の一括性に乏しく、また完形品も極めて少なかったこと等から、比較的状態の良い資料を取り上げて種別・器種毎の概略を記すに止める。なお、実測図の例示は種別の遺構単位毎に一括して掲載している。

### 1) 土師器

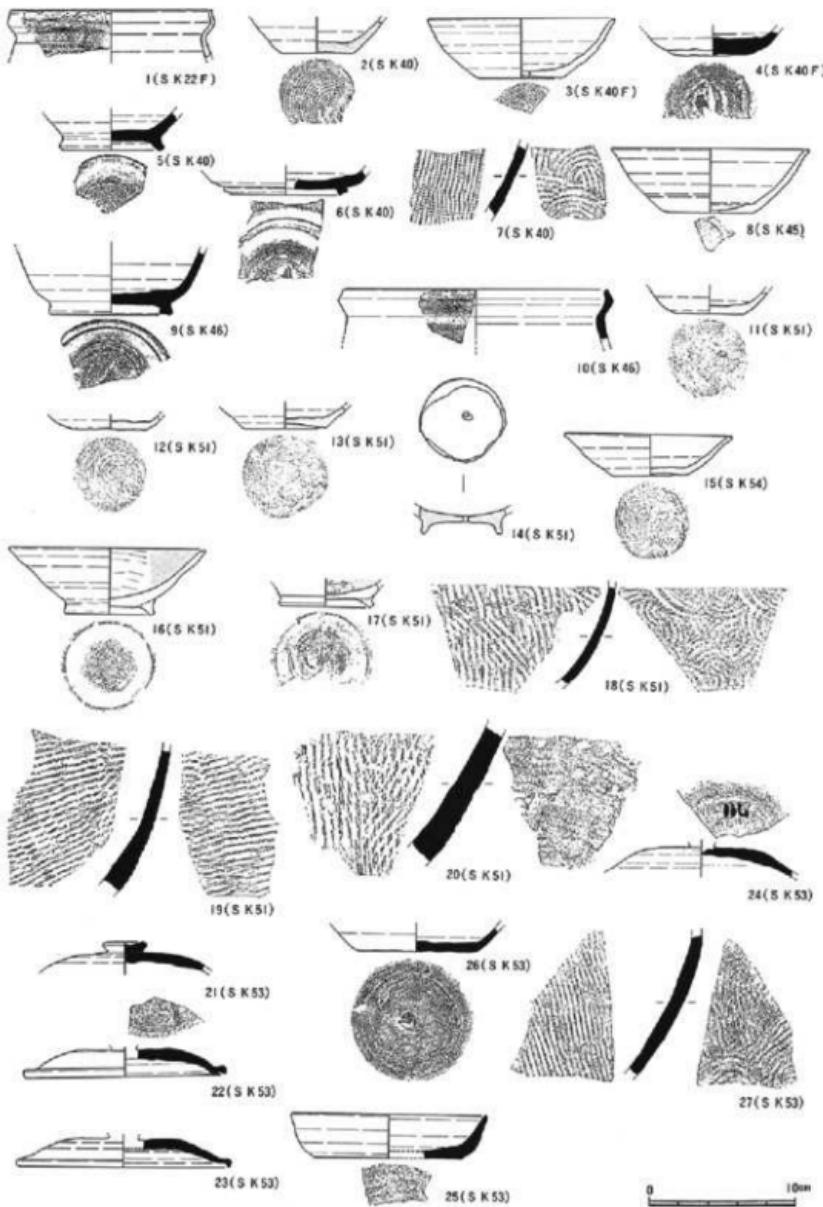
土師器はいわゆる「内黒・両黒」と呼ばれる坏類他の供膳形態と若干量の甕(非ロクロ)等煮沸形態があり、量的主体は供膳器の有台坏が占めている。その他の無台坏(第15図61)と両黒坏、および非ロクロの甕は僅少かつ小破片に限られて、形態その他を知ることのできる資料は殆どなく、ここに図化して例示するまでには至らなかった。

有台坏は法量的に見て概ね大型と小型の二種に区別でき、S E47井戸跡出土の第15図68・69例は前者、SK51土壙の第13図16等は後者である。形態的特徴では体部がやや内反の椀状で、口縁端を丸く收めるものと、体部外傾で直線的に開く坏形態のもの(第13図16)を認めたが、大半は前者であった。高台は貼り付け手法で成り、両則および底面を強く整形して稜線を明らかとする全体に角ばった仕上げを基調としている。一方、ミガキ手法・黒色処理等の技法面では、ミガキ手法で底部～体部が放射状・体部～口縁部で横方向が一般的と観察された。しかし、中にはSK51例のような全体に横方向でその仕様に粗雑化の傾向が窺えるものも散見できる。また、黒色処理を何等かの原因で製作時点に省略する例若干も認めたが(第15図68)、ここでは黒色土器の範中に含めて一括的に扱っている。

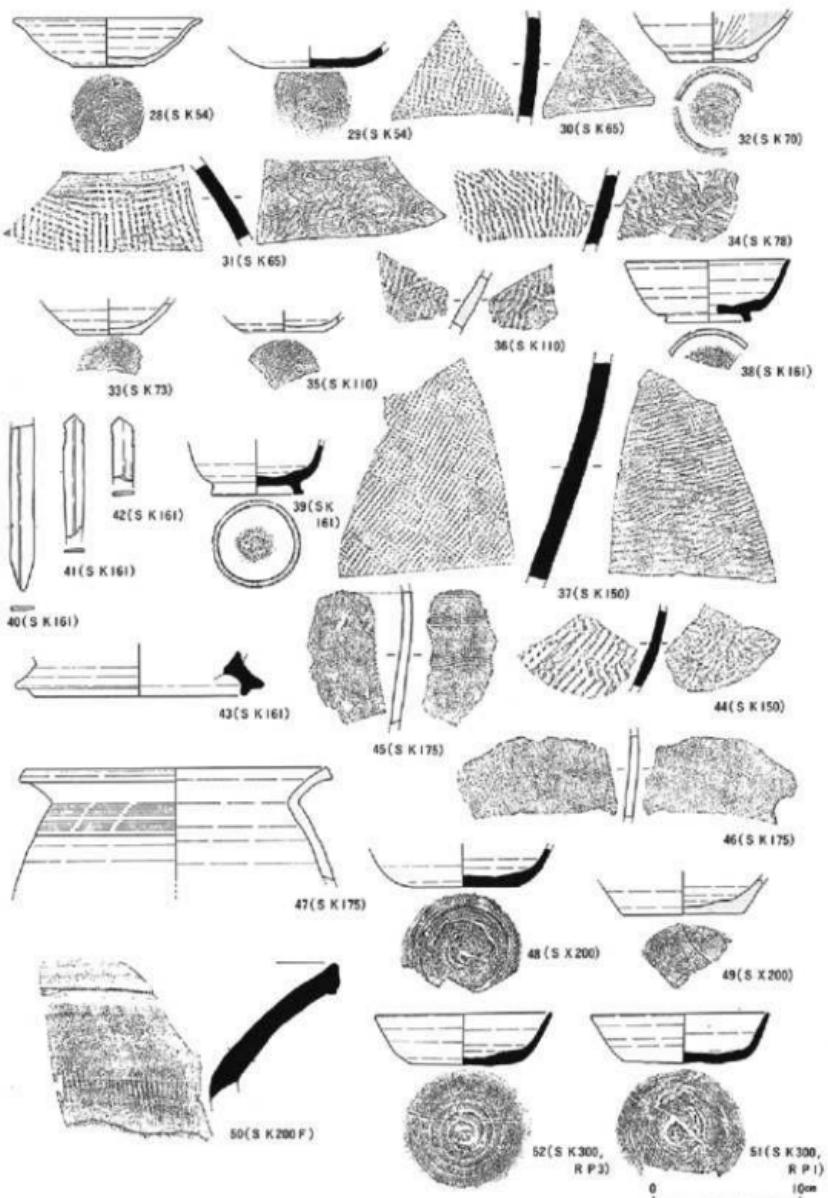
### 2) あかやき土器

あかやき土器では供膳・煮沸形態の二種が主であり、器種に坏・甕・堀等が認められた。量的には供膳形態の坏が圧倒的に多く、次いで煮沸形態の甕、堀等の順で組成される当該期としては一般的傾向が捉えられた。

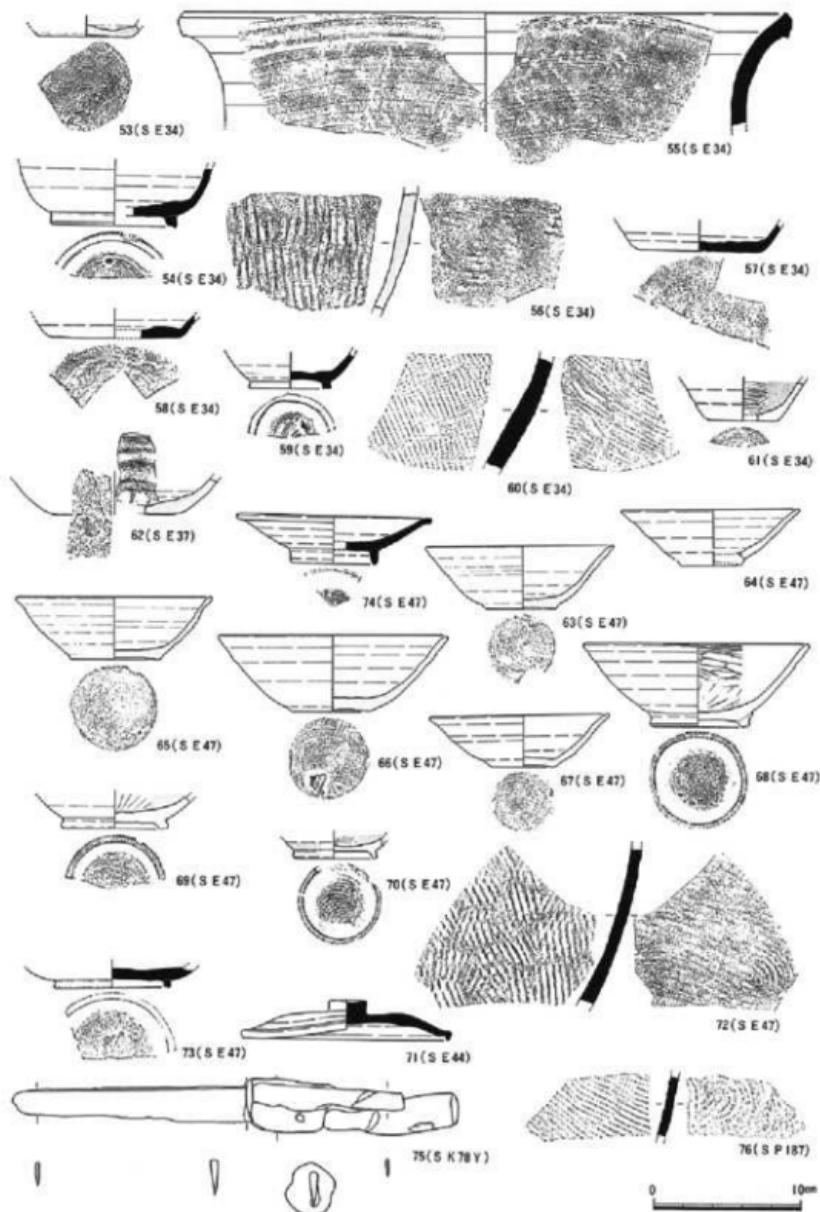
供膳形態では無台坏・有台坏の大別二種があり、無台坏が主体を占める。有台坏は底部に穿孔を持つSK51の破片例(第13図14)が唯一図化し得たものであり、全体的に見ても5



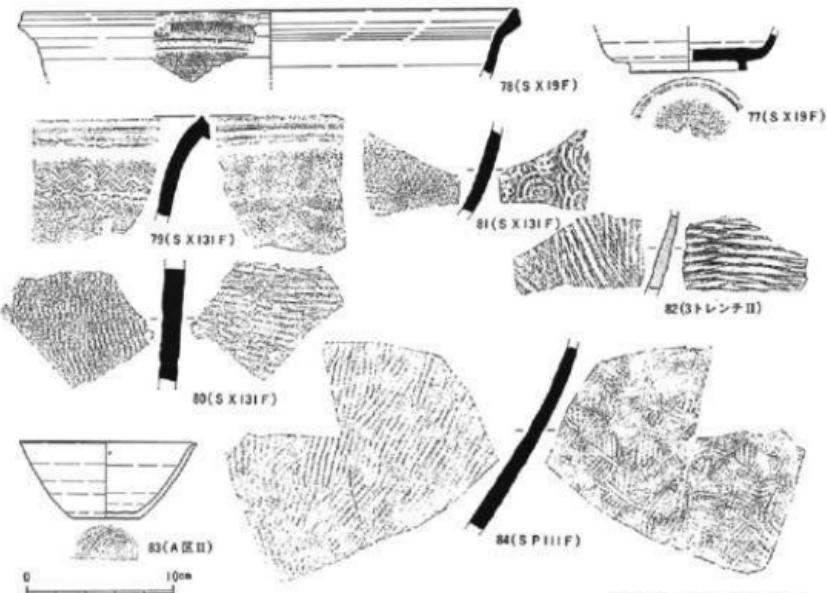
第13図 出土遺物(1)



第14図 出土遺物(2)



第15図 出土遺物(3)



第16図 出土遺物(4)

点と僅少のため内容が明らかでない。一方、無台坏はS E47・S K51に完形品があり前者が浅身で皿的、後者がいわゆる坏形で一般的な特徴を示していると考えられる。また、後者では法量的な大・小があり、第15図66等が大型、第15図67が小型例と識別できるが、その他にも体部の立ち上がりや器高と口径の割合等視点から細分できるもの(第16図3)がある。

すなわち、從来の成果から見ていくつかの異なった時期的混在が推測され、皿状の形態がより後出的な10世紀でも半ばから以降段階のものと考えられる。S K51ではあかやき土器の浅身の形態と有台坏および黒色土器で体部外傾の有台坏(第13図16)等が共伴しており、この段階での供膳器組成の在り方を表す一例と受け止められる。

煮沸形態では壠・甕の二器種の他、1点の破片ながら小型の鍔釜が見られた。量的には長胴の丸底甕や平底の小型甕が主体を占め、壠・鍔釜の組成比は本来的に極く少ないものと判断できる。甕では法量的な大小が認められ、第14図47に代表される口径20cm内外の大型丸底形態と、口径15cm前後で小型平底形態の推測できるものとが指摘できる。また、大型甕および壠では、体部中程から下半にかけてタクキやケズリの調整を見るのが一般的で、本遺跡でも体部に縦方向の平行タクキ、相対する内部に横方向で橢円形状を呈する平行タクキを持つ破片資料(第15図34・第16図82)が約1000点以上出土している。なお、壠の資料はいずれも小破片で、遺構内出土土器の中では例示できるまでのものを認めなかつた。

### 3) 須恵器

須恵器では供膳形態と貯蔵形態が認められた。供膳器の器種では有台・無台の壺と有台皿および蓋等が大半で、有台・無台壺の底部の切り離しはヘラ切り無調整が主体であった。また、貯蔵形態の器種では大型壺を中心と長頸壺等の破片と資料的に希な壺に似る鉢?やあかやき土器壺に同形でやや大型の壺が認められる。但し、これらの一次的地点は主にB地区とBトレンチ以北の近隣にあると推測でき、A地区では覆土内散発の二次的状況であった。以下に個別器種毎の概要を例示資料に下づいて記すが、全体に形態等が部分的で不明瞭な壺・壺他の幾つかについては資料の提示に止めて細部の説明を割愛する。

**無台壺** 底部の切り離しで回転糸切りとヘラ切りが認められるが、量的にはヘラ切りのものが目に付く。また、ヘラ切り、糸切り例共に量的まとまりを見ないが、器形・法量他から糸切りで1~2種、同じくヘラ切りで4~5種程のタイプが観えた。即ち、(A)浅身で箱形の器形を示す第13図25、(B)丸底風の平底でやや器高のある小振りな第14図51・52、(C)体部が直線的に外傾して立つ、法量的に大振りな第13図26、第15図48・57・58、(D)底径が小さく体部内反で立ち上がる第13図4等である。Dタイプのものは回転糸切無調整の壺形態に近似している。一方、糸切りのものは資料的に僅少で内容を明らかにできないが、底部と体部の境界が不分明で体部の湾曲が強い形態が認められる(第14図29)。

**有台壺・皿**、壺資料の類型にまとまりを欠くが、底部の切り離しでヘラ切りと糸切りの二種があり、量的にはヘラ切りのものが主体を占めた。ヘラ切りでは(A)法量的に口径15cm内外と推測できる深身で大振りな作りの大型品(第13図9・第15図54・第16図77)と、(B)口径10cm内外の小型品(第14図38・39、第15図59)を認めている。これらは高台の形態や底部・体部との位置的関係および体部の立ち上がり形態他から細分可能と考えられるが、一括性・類型的まとまりが乏したため割愛する。その他、器形や作風を施釉陶器のそれに模したと推測できるもの(第13図6・第15図73)があり、従来指摘される糸切り離しの有台皿(第15図74)以外の器種的広がりを示す一例と理解できる。

**蓋** A区のSK53・SE47から出土した資料5点があり、法量的に有台壺Aに対応している。資料の制約から詳細不明であるが、天井部の切り離しはヘラ切りで、肩部に回転ヘラケズリを施すものが認められる(第13図22)。

### 4) 木製品・金属製品

木製品はSK161から出土した幅1.8cm、長さ5~10cm内外の破損した斎串3点や、SE34井戸跡等から出土した箸状木製品若干に限られる。斎串は主頭・劍先形の形態で、頭部両側に切り込みが見られた(第14図40~42)。箸状木製品は削り出しにより製作され、断面円形や橢円形を呈す。金属製品は木製の柄を持つ刃渡り16cmの刀子があり注目される。

## 6 まとめ

本遺跡の調査は県営は場整備事業「平田地区」に伴う緊急発掘調査で、昨年度に引き続く第二次の調査である。調査対象地区は昭和62年度の第一次調査が遺跡域南西部分、本年度の第二次調査が同じく南東部から東辺に各当たり、時期他の内容で共通する様相を持つ。今次調査で検出された遺構は大小の土壙跡を中心に、礎板を持つ掘立柱建物4棟や矢板・横桟、矢板・横桟・曲物、井桁組等の各種構造を持つ井戸跡4基等が主要なものであった。以下に、検出遺構の特徴や帰属時期についての概略を記してまとめて代える。

土壙はその分布状況から占地・集中群としての把握ができ、A区北東域を中心とする一群に良好なまとまりを認めた。また、個々の形態や規模等の諸点から既に述べた幾つかに分類でき、B1類の在り方が主体的と判断された。B1類は円形プランを呈し、口径と深さの比でやや深さが勝る中型の類型である。側壁形態は直上ないしフ拉斯コ状を呈し、大方は側壁直上形態の円筒形が基調であった。また、覆土は黒色土の単純層より成り、遺物は板切れや偏平碟等にはば限られていた。なお、土器類の完形品が一次的な在り方を示す例はいずれもB3類のS K51・54に認めただけである。以上の状況と他遺跡の類例比較から土壙の大半は墓壙的性格を持つと考えられた。但し、時期的に先行するE類や形状の点で大きく異なるF類は墓壙とは考え難い。また、これらの帰属時期は判断材料が乏しいため明確でないがB2類のS K51・54等から出土したあかやき土器壺や内黒土師器碗等に限れば10世紀中～後葉段階頃と推定できる。

建物跡は4棟検出された。B区のSB4は柱間距離で桁、梁行き共に完数尺を示し7～10尺と他の建物より大振りである。また、掘り方の規模や形態および覆土の色調や質的面でA区SB1～3の建物跡とは一見して区別できる特徴を持つ。時期的にはSB4が他のものに大分先行することが間違いない、周辺の出土遺物から9世紀前半代の所産と推測できる。一方、SB1～3についても明確な論拠を求め難い状況であったが、一部土壙との重複関係等から少なくとも主体的な土壙B1類の構築時期より古いと判断された。しいて言えばSE47に近いかと窺え、10世紀前半～中頃に係る時期と考えられる。

井戸跡は構造を異にする4基が検出された。構造上では立板・横桟(曲物)の類型と井桁組の類型とが際だった差異として指摘できる。これらは覆土や出土遺物の様相からSE34が9世紀中頃、SE44が9世紀前半～中頃、SE47が10世紀前半～中頃、SE60が10世紀後半代?の各所産と捉えられ、SE44→34→47→60の構築順が考定される。

遺物は総数で約6800点程を数えたが内訳は須恵器・あかやき土器・黒色土器等が主体であった。しかし、一括性の高い遺物はごく限られ、僅かにSK51他の幾つかに認められただけである。なお、遺物の年代的根拠を述べる余裕が無いため次章他で補足して行く。

## IV 手蔵田3遺跡

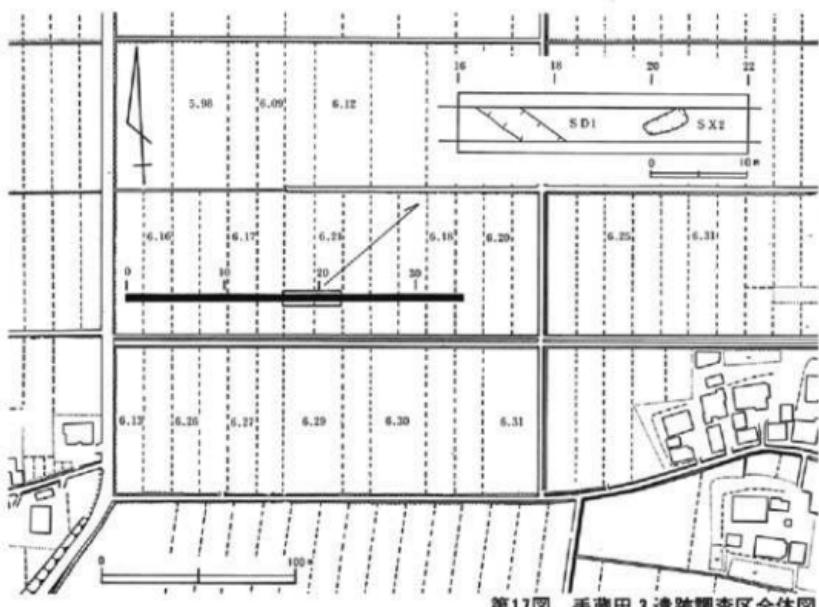
### 1 調査の概要

調査は前年度に実施した試掘調査の結果とほ場整備実施計画や施工方法などを検討して特に、面の削平が避けられない部分を限定的に主要な調査対象地域として実施した。

従って、本遺跡の場合は遺跡範囲の中央部分に計画された排水路予定地を中心に施工規模に準拠する幅3m、全長176.6mのトレンチを設けての限定的部分の記録保存を行なう運びとなったものである。

一方、その他の部分に付いては表土の移動や地盤の切盛が少なくて済むなどの事由から遺構面の方が現状のまま保存できる見込みのため、事業家側の慎重な工事に委ねることとしている。

トレンチ枠の設定後、重機による表土の除去、手作業による面整理、面精査と調査を進め、16~22区を中心として河跡・土壤などの遺構と須恵器・あかやき土器他の遺物を検出した。なお、調査区は幅3m、長さ5mを一区画とし、県道(酒田ー生石線)に隣接するトレンチ西端を起点としてその東側に1~36区までの基準区を設定している。従って、調査面積は約530m<sup>2</sup>となる。



第17図 手蔵田3遺跡調査区全体

## 2 遺跡の層序

調査トレンチでの基本的な層序は概ね右の第18図(土層柱状図)に示す通りで、I層:耕作土、II層:遺物包含層、III層:遺構検出層と大別できる。遺物は包含層のII層(黒褐色粘質土)中から検出されるが、全体に量が少なく、またその在り方も二次的と捉えられた。加えて、調査トレンチ内での検出遺構も少ないなどの状況が結果的に得られている。

以上の事から、調査域が本遺跡の主体的部分とは考え難く、別にその地点が求められると予想された。例えば、大槻新田部落に通じる道路を挟んで南側に位置する昭和62年度の調査区域(大槻新田遺跡第1次調査)から今次調査区域までの間など、より南側の一帯である。

一方、旧地形との相関が強いと考えられるIII層の分布状況は東側程粘性が強くなり、遺構が認められるトレンチ中程周辺で、ややシルト質となっていた。確認は無いものの南東から北西方向に延びる背の低い自然堤防などの存在を指摘できるものと考えている。

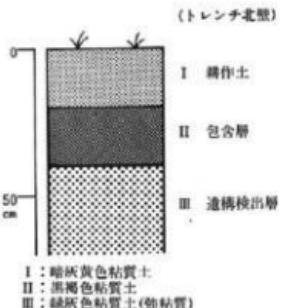
## 3 遺構

検出された遺構は以下に述べるSD1溝跡一条と、性格不明の土壙SX2の二基に限られ、建物跡や井戸跡他の直接的に集落跡にかかわりをもつ遺構を認めなかった。これは調査地点の性格が関与していると当然判断され、先に述べた遺跡の周辺部分にあたるなどの理由が考えられる。以下にSD1、SX2の各遺構についての概略を記す。

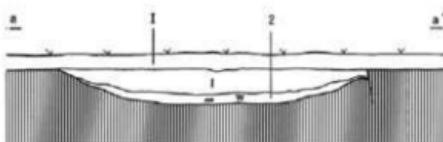
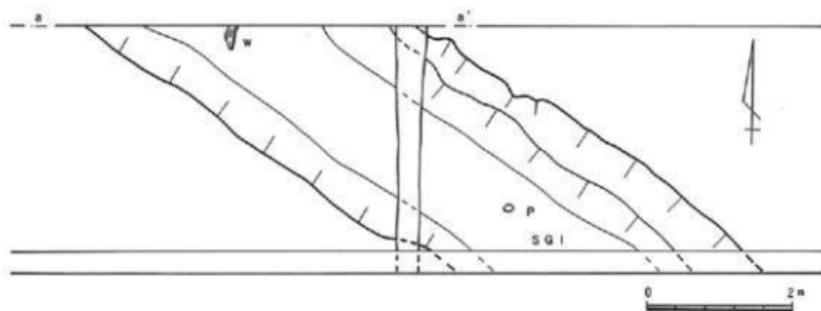
SD1トレンチ中程の17~19区に位置する人工的な水路跡と考えられるもので、幅272cm検出面からの深さ48cmの規模を持つ。左右の岸はほぼ平行して南東から西北方向で走り、規格的な様子が窺えるが、水路底から両岸への壁の立ち上がりはなだらかで、特段しがらみ等の護岸施設は認めなかった。また、水路を埋積する覆土は底面域に薄く認められる2層の黒色粘質土とその上部で主体的な1層の暗褐色粘質土よりなり、後者の1層は基本層序のII層にほぼ近い同質のものと捉えられる。

遺物は須恵器壺・壺・甕類の破片9点とあかやき土器の小破片若干、および陶器の椀・鉢などの破片7点、木製品の蓋他の残片数点が主に覆土2層中から出土し、もっとも新しいと思われる陶器類は近世(唐津焼他)から近代にかけてのものと判断できた。

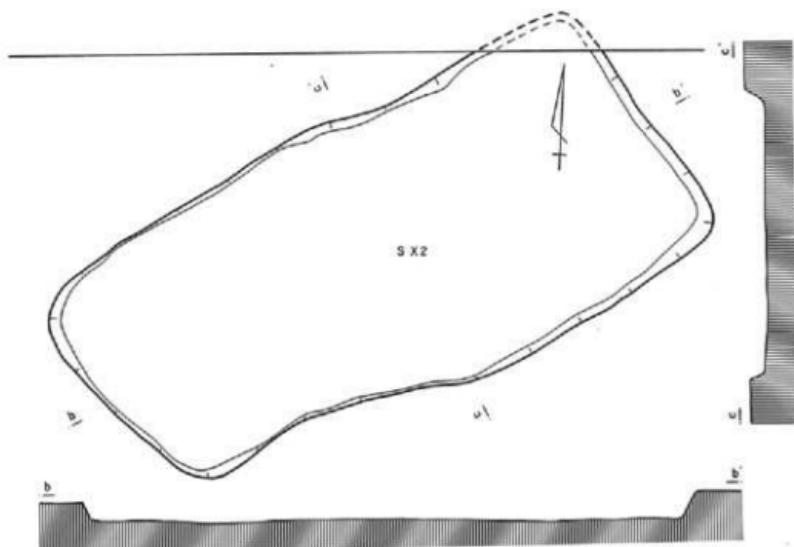
SX2 20~21区に位置する長方形を基調とするやや不整な土壙で、長径420cm、短径205cm、検出面からの深さ14~16cmの規模を持つ。遺物は二次的な須恵器破片若干であった。



第18図 土層柱状図



S G I  
 1:暗褐色粘質土(旦層と同等)  
 2:黑色粘質土(有機物・木片・遺物・貝殻等含む)      I:暗灰黄色粘質土(耕作土)  
 III:黒褐色粘質土(強粘質)  
 II:緑灰色粘質土-シルト



S X 2  
 1: 黒灰色粘質土  
 2: 青灰色砂質土(網砂質で粘土ブロック含む)

第19図 SK 32土壤跡

#### 4 遺 物

出土遺物は、総数にして約90点と僅少である。種別では須恵器・土師器・あかやき土器・中世陶器・近世陶器などの別を認めるが、いずれも破片資料若干であり、かつ出土状況その他でも二次的な在り方と捉えられた。従って、遺物組成他でのまとまりや有意性は求め難く、以下に種別・器種毎の概要を記す程度で止めざるを得ない。

##### 須恵器

器種には壺、壺、甕、蓋などが認められ、その量的主体は無台の壺(底部糸切りが主)や甕類の体部破片が占めていた。壺では底部の切り離し手法でヘラ切りと回転糸切りの二種が認められ(第20図1・2)、後者の回転糸切り例が多数である。しかし、資料が部分的に過ぎ、器形全体の窺えるものは皆無であった。甕は体部の破片資料に限られ、器厚や湾曲による法量的大小や内外面のタタキやアテの様相が窺えるのみである(第20図3~5)。外面のタタキでは平行タタキと格子目風タタキが、内面のアテでは青海波文と平行アテが各認められた。その他では、体部径24cm程が推定できる壺の上半部資料がある。

##### あかやき土器

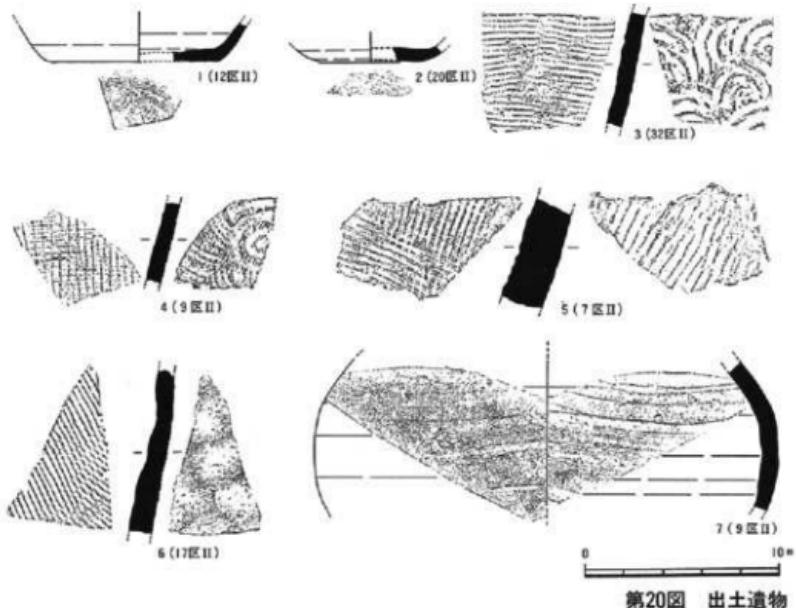
図示できるまでの資料がないため判然としないが、壺類の口縁部・体部・底部などの破片資料19点と、鉢・甕類の体部資料12点程が出土している。組成的に見て先に記した須恵器の無台壺に伴う時期のものと考えるのが自然であろう。

##### 土師器

土師器は23区のII層から出土した底部に回転糸切り痕を若干留める破片資料1点があるだけであり、それも細片のため図示不可能である。ただ、組成的には先のあかやき土器同様のことが考えられ、9世紀後半段階の時期に帰属するかと推定される。

##### 中世陶器

17区のII層中から珠洲系と考えられる壺の体部破片が1点出土している。器厚1cm内外で、外面に針状の目の細い右下がりとなるタタキが見られ、内面には長径3cm、短径2cm前後の窪みを呈する小石を用いたと判断できるアテ痕が認められる(第20図6)。これは吉岡氏の編年に照らせば壺T種で珠洲のIII~IV期頃のものと考えられるが、細片のため明確でない。その他ではSD1の底面近くや覆土2層中から近世の陶器13点、数点の木製品残片が出土している。陶器の器種的では碗・皿・鉢類が識別でき、資料の一部に九州の唐津焼と判別できるものが含まれている。その他は瀬戸や美濃、あるいは地元大宝寺焼などの近世~近代にかかる時期のものと考えられるが詳細は明らかでない。木製品ではひしゃくなどの曲物底と、桶類の残片などと考えられるものが散見でき、時期的に上記の陶器類に伴うものかと考えられた。



第20図 出土遺物

## 5 まとめ

今回の調査は昭和63年度の県営ほ場整備事業・平田地区に係る緊急発掘調査である。現地での調査期間は昭和63年7月4日～同7月15日までの延べ10日間であった。調査対象地区はほ場整備地区内の計画排水路内に限っており、その面積は約530m<sup>2</sup>である。調査結果は既に述べた通りであるが、以下に要点をまとめて記す。

遺構では集落跡などに直接かかわるもののが検出されず、SD1とした溝跡と性格不明の土壌SX2の各1基、計2基の遺構が認められたに止まる。即ち調査地点が近隣に存在する集落遺跡の主体的部分の周縁に位置するためと考えられた。また、検出の溝跡と土壌は出土遺物や覆土などの状況から見て古代までに遡るとは到底考えられず、せいぜい下っても江戸時代以降の時期のものと判断される。一方、出土遺物は以上の検出遺構に連動して極めて僅少であり、かつ一次的な在り方を認めなかった。出土総数にしても僅か90点足らずである。しかし、全体的に見れば須恵器で糸切りの無台壺とあかやき土器壺、同じくあかやき土器甕類や内黒土器壺などで組成される遺物群の主体的様相から、前章に述べた大槻新田遺跡第二次調査A地区や同第一次調査地点他との共通性を辿ることができると考えられ、それらの波及した縁辺域と把握できる。従って、幾時期かに亘る中でも、9世紀後半頃にそれら遺跡の広がりが拡大していた可能性が強いと捉えることができるであろう。

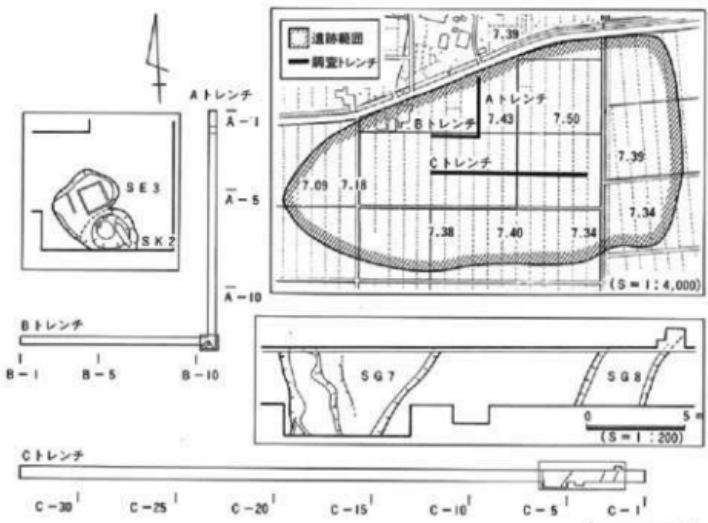
## V 横代遺跡

### 1 調査の概要

この調査は、昭和63年度県営ほ場整備事業(平田地区)との調整を計る目的で実施した、横代遺跡の緊急発掘調査である。調査期間は昭和63年7月18日から29日迄の2週間、調査面積は約700m<sup>2</sup>である。

ほ場整備工事の際に深い掘削が予定され、遺跡の現状での保存が不可能であると考えられるパイプライン及び排水路設置箇所を対象として調査を実施した。調査では、始めに、パイプライン・排水路計画線に沿ったA(2m×160m)・B(2m×50m)・C(3m×160m)計3本の調査トレンチを設定し、重機械による表土の除去を行った。次に、トレンチ内の表土除去が終了した地点から手作業による遺構検出面の整理を重ね、遺構の検出に努めた。検出した遺構については順次内部の堆積土を掘り下げ、並行して測図・写真撮影等の記録作業を実施した。また、調査トレンチ外部に広がりを持つ遺構を検出した部分については若干の拡張を行っている。

7月29日迄に調査の全工程を終了。器材を撤収し、ほ場整備事業者側へ調査区の引渡しを行った。



第21図 調査図全体図

## 2 遺跡の層序

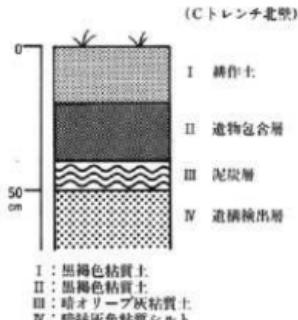
調査区の土層には、地点によって大きな差異が認められた。第22図はCトレンチ東半部・SG7河跡の検出地点付近を基本とした土層柱状図である。図中ではI・II層の耕作土及びその下位層とIV層との間に泥炭質の粘土層が存在する。これはCトレンチ東半部において特徴的な層位であり、A・BトレンチではI・II層直下がIV層上面となる。

Cトレンチの西端部と東端部とでは田面の標高差はほとんどないが、遺構検出面では30~40cmの差が存在する。これは比較的明瞭に残る自然堤防帯から低湿地へと移行する地帯に係る為と考えられ、トレンチ西半部分ではIV層上部がかなりの削平を受けていることが予想される。また、土色・土質の点でも若干の差異があり、西半部では東半部に比して砂質が強く、グライ化の程度の差違から、やや明色で黄色味を帯びる。東半部では低湿地帶的な要素が強く、恒的な居住区域として利用されていたとは考えにくい。

## 3 遺構・遺物の分布

検出された遺構は井戸跡1基、土壙跡1基、柱穴様のピット2基、溝跡1条、河跡2条、性格不明の落ち込み1箇所である。溝・河跡を除く5基の遺構は、A・Bトレンチの交叉する地点に集中している。前項で述べた様に、遺跡範囲とした部分は起伏が比較的明瞭に残る区域であり、中心部に近い高燥な部分と周辺部、特に東側の低湿地帯とでは、遺構の密度、性格の面で差異があると推定される。しかしながら今回の調査は、調査期間・調査対象区域共に極めて限定期的であり、調査結果から遺跡の全容を判断することは不可能である。

出土遺物は大別して土器と木製品がある。土器では須恵器とあかやき土器が出土しているが、量的には須恵器が卓越する。完形又はそれに近いものはSK2・SE3・SG7の各遺構から出土している。あかやき土器は量的には少ないが、SG7より出土した人面彫刻のある甕が注目に値する。木製品では、SG7、SG8河跡から、祭祀に関連すると推定される斎串が多数出土している。登録点数はSG7が173点、SG8が5点である。SG8では、細長い棒状木製品もまとまって出土している。遺物の分布密度は、遺構の密度や遺跡の中心・周辺といった概念から大きく外れるが、居住区域のみならず、周辺の低湿地までを含めたひとつの生活空間として把握する必要性を示唆するものと考えられる。



第22図 土層柱状図

#### 4 遺構

今回の発掘調査で検出した8基の遺構は、出土遺物から推定して概ね9世紀代の前半に位置付けられ、庄内地方の沖積地の遺跡としては比較的古い時期に帰属する。

8基の遺構の中で人為的な掘込みが認められるものはSD1溝跡・SK2土壤跡・SE3井戸跡・SP5、6ピットの5基である。対してSG7・SG8の2条は自然の河跡若しくは部分的に深い湿地跡と考えられ、自然地形を祭祀的な場として利用した例である。前者と後者の間には分布的・性格的にも差違が認められ、前者を居住区域、後者をそれ以外の生活空間として位置付けることが可能である。

以下に主要な遺構であるSK2・SE3・SG7・SG8を中心として、各遺構の概要を記す。

##### SK2土壤跡（第23図）

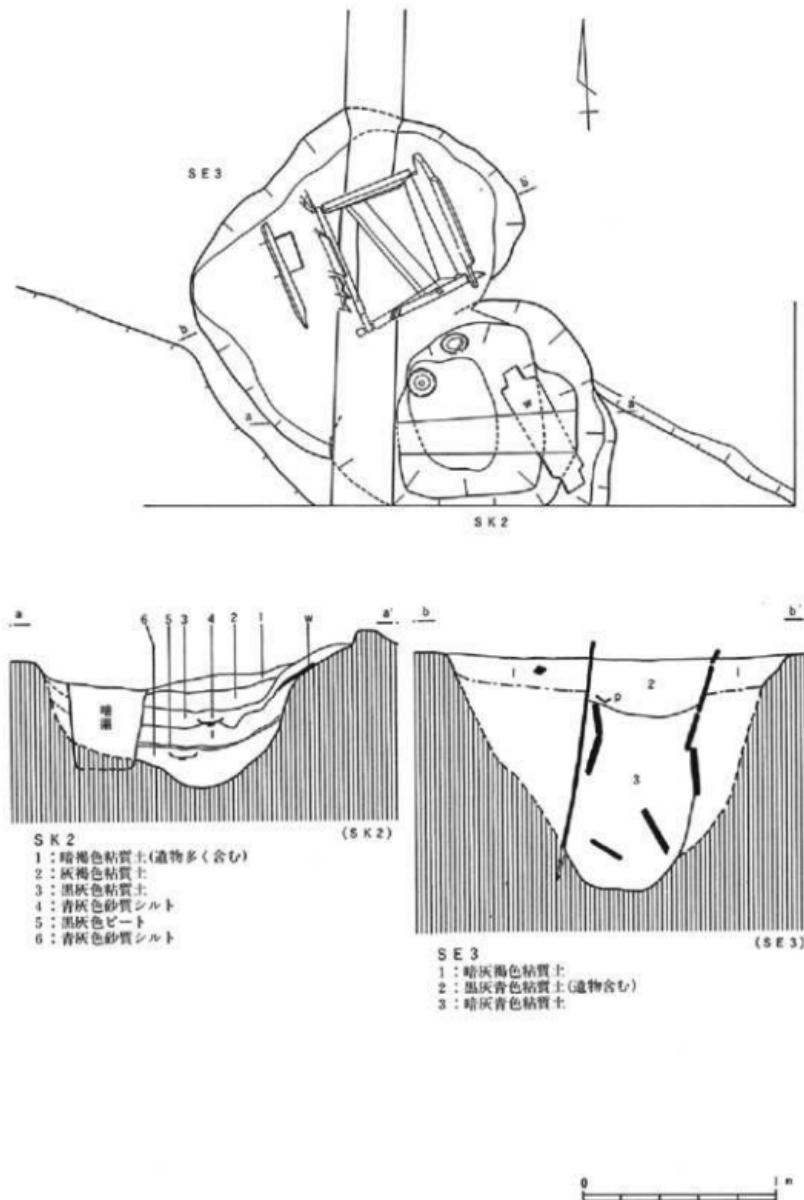
A・Bトレンチの交叉する地点に於いて検出した、ほぼ円形を呈する土壤跡である。南側が一部未検出であるが、全体の約8割を確認している。直径は東西で約1.5m、検出面からの深さは約80cmを測る。SE3井戸跡の掘り方と重複しており、SE3井戸跡構築以降に掘り込まれたと推定される。内部の堆積土は6層から構成され、第4層と第6層の間に泥炭質の粘土層を挟む。遺物片を多く含むのは第1層であるが、最下位の第6層より、墨書のある須恵器蓋2点が出土している。土層断面図に黒く表示しているが、上位のものも層位的には第6層に相当する。また、第3層と第4層の間から井戸の側板と考えられる板が1枚出土しているが、SE3井戸跡との関係は不明である。

##### SE3井戸跡（第23図）

A・Bトレンチの交叉する地点、SK2土壤跡の北西部に於いて検出した井戸跡である。SK2土壤跡と重複関係を持ち、土壤跡に掘り方の南側部分を切られている。また、以前の暗渠工事の際に井戸枠の上部を破壊されており、一部切断痕が残っていた。

掘り方は北東-南西方向に長い、やや形の崩れた橢円形を呈し、長軸方向で1.7m、短軸方向で1.2mを測る。本体は井桁組によって構成され、西側に立板の補強材が入る。井戸眼等の設備は認められない。井桁組は長さ70cm前後、幅20~25cm、厚さ2cm前後の板材を用い、内径約50cmの方形に組み上げている。井戸全体が西側から圧力を加えられた形で変形し、一部崩壊しているが、最高4段の井桁組を検出した。崩壊した板材が井戸の底面から検出されていることから、井桁内部の堆積土が堆積する以前、即ち井戸が実際に使用されていたか、若しくは廃棄された直後に変形→崩壊したと推定される。

堆積土はいずれも強グライ化した粘土で、砂質分はほとんど含まない。上位層より9世紀初頭の須恵器が出土している。下位層はグライ化の為識別困難であった。



第23図 SK2 土壌跡・SE 3 井戸跡

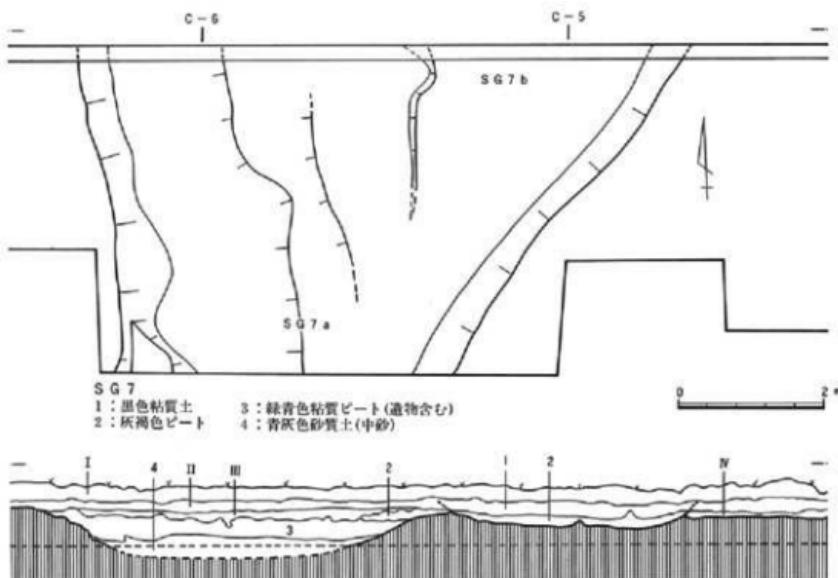
### S G 7 河跡 (第24・25図)

Cトレンチの東から約50m地点に於いて検出した河跡である。トレンチ北辺での上幅は8.3m、南辺では4.7mを測る。2条の溝跡の重複が考えられ、西側をS G 7 a、東側をS G 7 bとした。S G 7 bが7 aを切ると推定されるが、重複関係はやや不明瞭である。

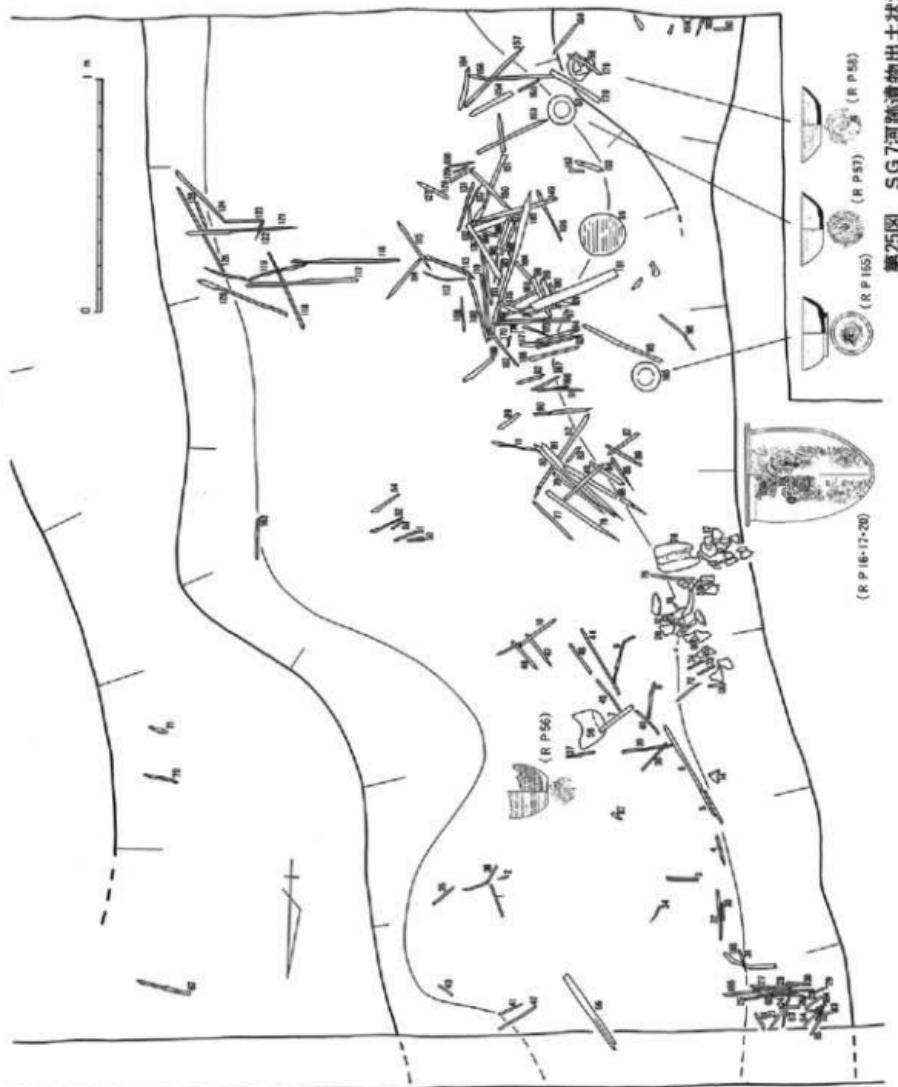
S G 7 bは極めて浅い皿状を呈し、深さは約10cmを測る。遺物の出土はほとんどない。

S G 7 aは南北方向に走る河跡で、検出面での上幅は北辺で約6m、南辺で約4m前後と推定される。深さは約30cmを測る。底面はほぼ水平に近いが、ごくわずか北に向って傾斜している。堆積土は最底部に砂層を有するものの、上位層がほとんど泥炭質粘土で構成されていることから、常に一定の流水を保つものではなく、むしろ、わずかな流れを持つ湿地帶的な様相を呈していたと推定される。

第25図はS G 7 河跡の遺物出土状況を呈している。東側を約1.6m拡幅し、全体でも4.6m幅を調査している。河跡の西岸から東に向かって手前中央に人面墨描のあるあかやき土器の甕(R P16他)、左奥にあかやき土器の鉢(R P56)、右側に須恵器の壺が3点(R P165、57、58)、間に、現形を止めていないが削り物(RW59)が1点配置されている。周囲には斎串が散乱し、北側手前の1ブロック、R P16・165間の1ブロック、R P165・58間の1ブロックに集中している。堆積土の状態から判断して、周囲からの流入によるものではなく、



第24図 SG7 河跡



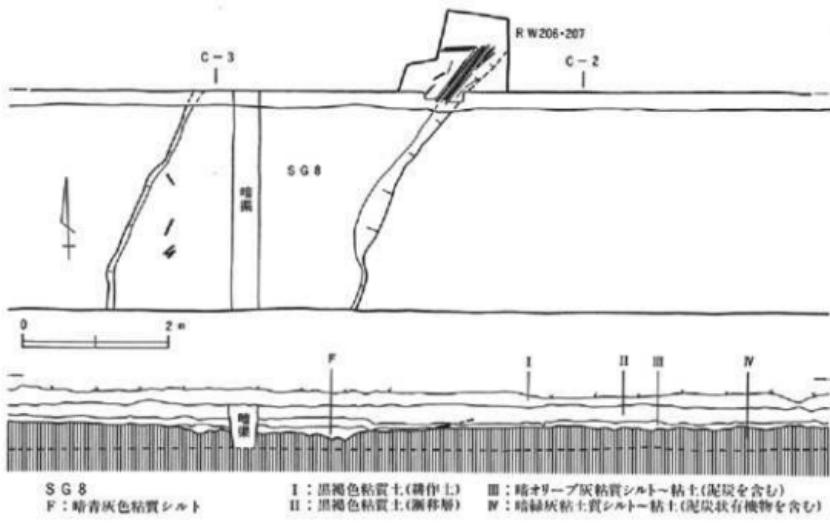
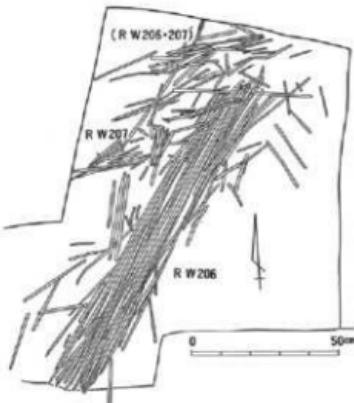
第25図 SG7河跡遺物出土状況

祭祀の行われた状況をある程度保っているものと考えられる。

#### S G 8 河跡（第26図）

S G 7 河跡の約10m東方で検出した、S G 7 bと平行する溝跡である。幅3m、深さは約10cmを測り、南から北に向ってごくわずか傾斜している。堆積土はグライ化した粘土質のシルトを主体とする単一層である。

調査区域にかかる溝跡北東部より、用途不明の細長い棒状木製品が多数、まとまって出土している。



第26図 SG 8 河跡

以下その他の遺構について登録番号順に概略を述べる。S D 1はAトレンチ北端部に於いて検出した溝跡である。トレンチとほぼ直交する東西方向に流路を持ち、溝幅約1m、深さ約50cmを測る。S X 4はSK 2・SE 3の西側に於いて検出した性格不明の落ち込みである。形は不定でその大部分がトレンチ外にかかるため全容は不明である。S P 5・S P 6はいずれもAトレンチ南側、SE 3の北側に於いて検出した柱穴様のビットである。検出したビットが2基のみであるため、建物の存否、広がり等は把握できない。

## 5 遺物

遺物はA・B・Cトレンチの包含層および、各検出遺構内から須恵器・あかやき土器・内黒土師器坏などの土器類約600点と斎串を中心とする123点におよぶ木製品が出土している。このうち、土器類での種別内訳は出土土器総体で須恵器43%、あかやき土器53%、内黒土師器2%、その他2%であり、数値的には外観的ながら須恵器とあかやき土器の相対的量比が高く、かつ内黒土師器が極端に少ないと認識できる。

なお、須恵器坏類での底部切り離し手法で回転ヘラ切りが同糸切りのものを倍以上越える様相や、土師器坏類でも無台のもの若干に限られるといった在り方から、時期的特徴を強く反映した結果と看取できる。ただし、地点間あるいは遺構単位毎の細かな差異については必ずしも検討に耐え得るだけの充分な資料がないこと、さらに付け加えるならば土器類の集計にも方法論的な問題が多く残されている点があること等を断っておく。

土器以外の遺物ではCトレンチ東辺に位置するSG7・8河跡からそれぞれまとまって出土した幾つかの類型からなる斎串群が注目される。中でもSG7河跡での人(神)面墨描土器など儀器と共に伴する斎串群の在り方は、祭礼跡の一端を良好に遺すものと考えられる。以下に種別・器種毎の概略を記し、その特徴を述べていく。

### 1) 土師器

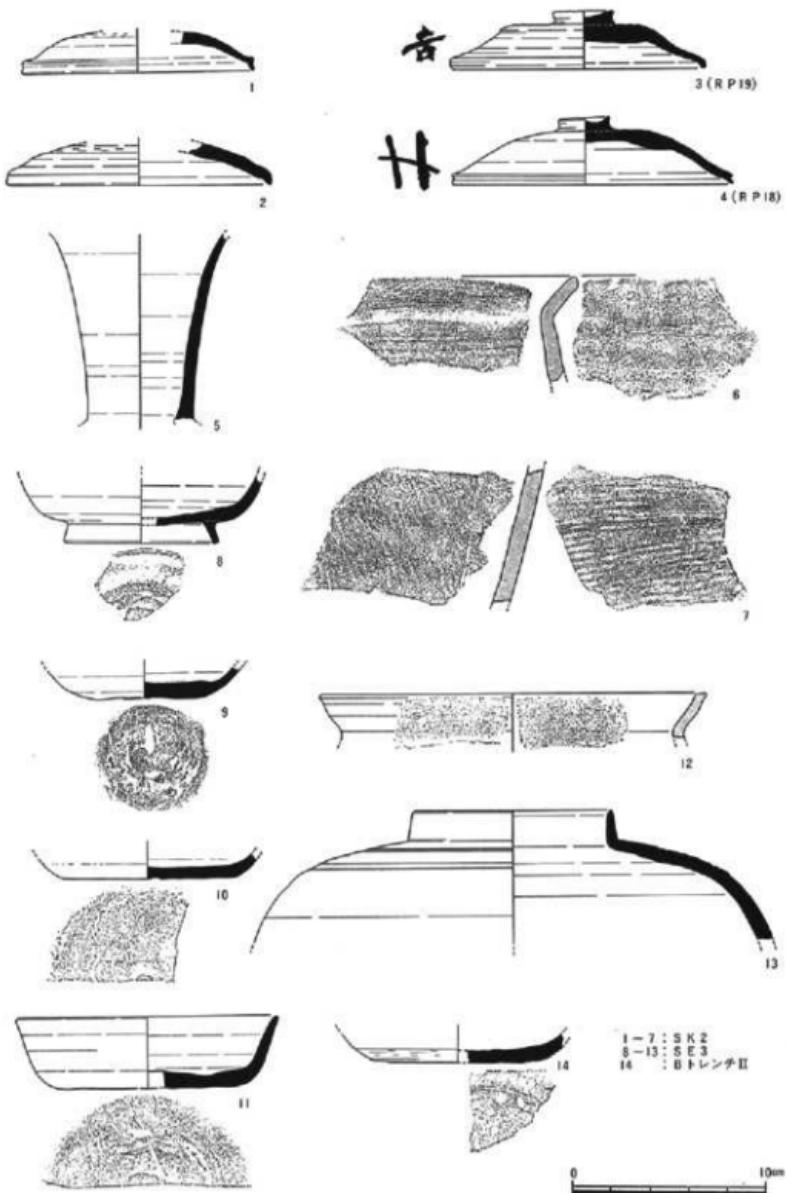
土師器はいわゆる内黒の坏等破片若干に限られ、内容的に明らかでない。ただし、底部資料幾つかの特徴は「回転糸切りで無台平底」を呈し、中に、切り離し後の回転ヘラ削り調整などから切り離し痕を止めない二次調整を受けたと考えられるものが認められる。

### 2) あかやき土器

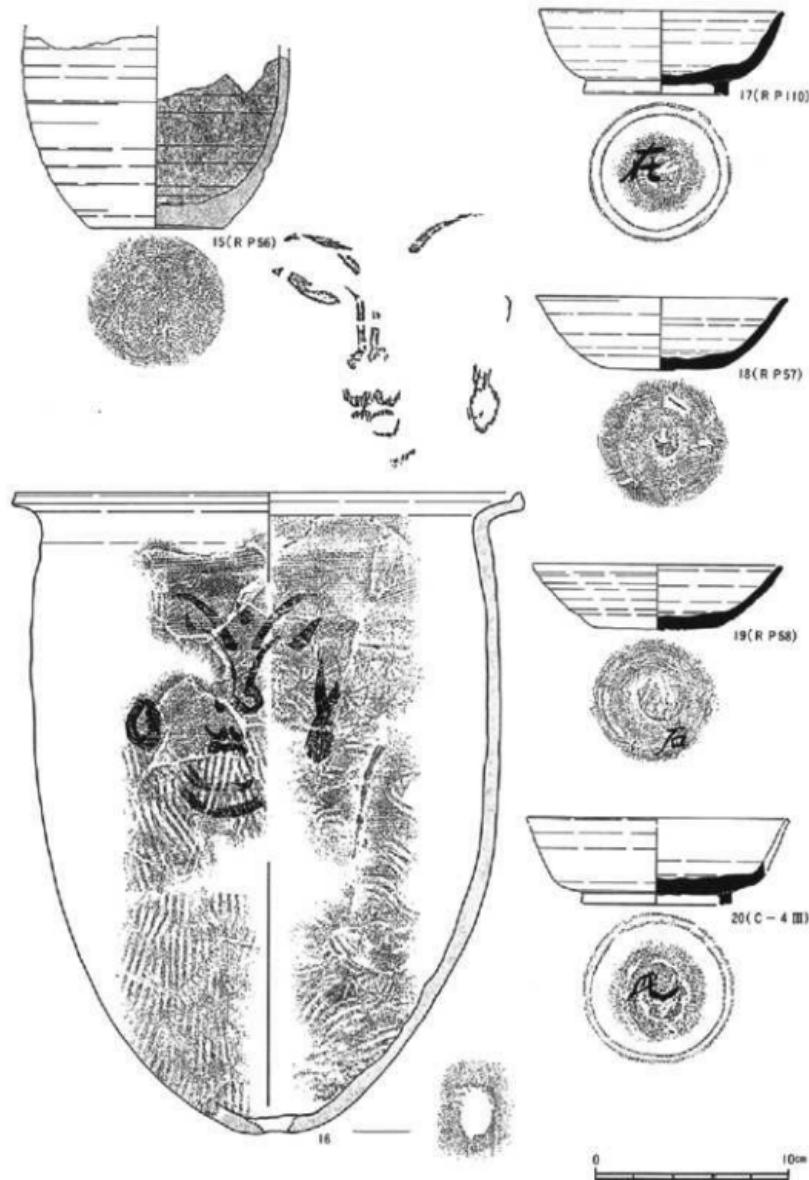
器種に坏・壺・鉢(小形壺)・壺などがある。資料の絶対量が少ないながら、器種的に坏類の体部破片や壺・壺・鉢の体部破片等でまとまりを持つ。しかし、これらの分布状況はA・Bトレンチに偏り、Cトレンチでは総数でも20数点と僅少であった。

図化・例示し得た資料はAトレンチ南端・Bトレンチ東端で検出されたSK1土壙・SE3井戸跡出土の壺口縁部資料と、DトレンチSG7河跡出土の壺、および小形平底壺など若干に限られる。なお、坏では図化できるまでのものが皆無であり、いずれも部分の小破片が主体を占めたが、底部の切り離しはいずれも回転糸切り無調整を示すものであった。以下に図化できた資料を下にその概略を述べる。

壺は口縁部の作り他特徴から口唇部に屈曲等変化の無い單純口縁を持つもの(第27図6・12)と、外反した口縁部からさらに口唇がほぼ垂直につまみ上げられる例(第28図16)が認められ、共伴する須恵器坏等との関係から前者が幾分先行し、後者が後続のものと考えられる。調整では、いずれも口縁部から体部上半がロクロ整形、体部中程から丸底の底部

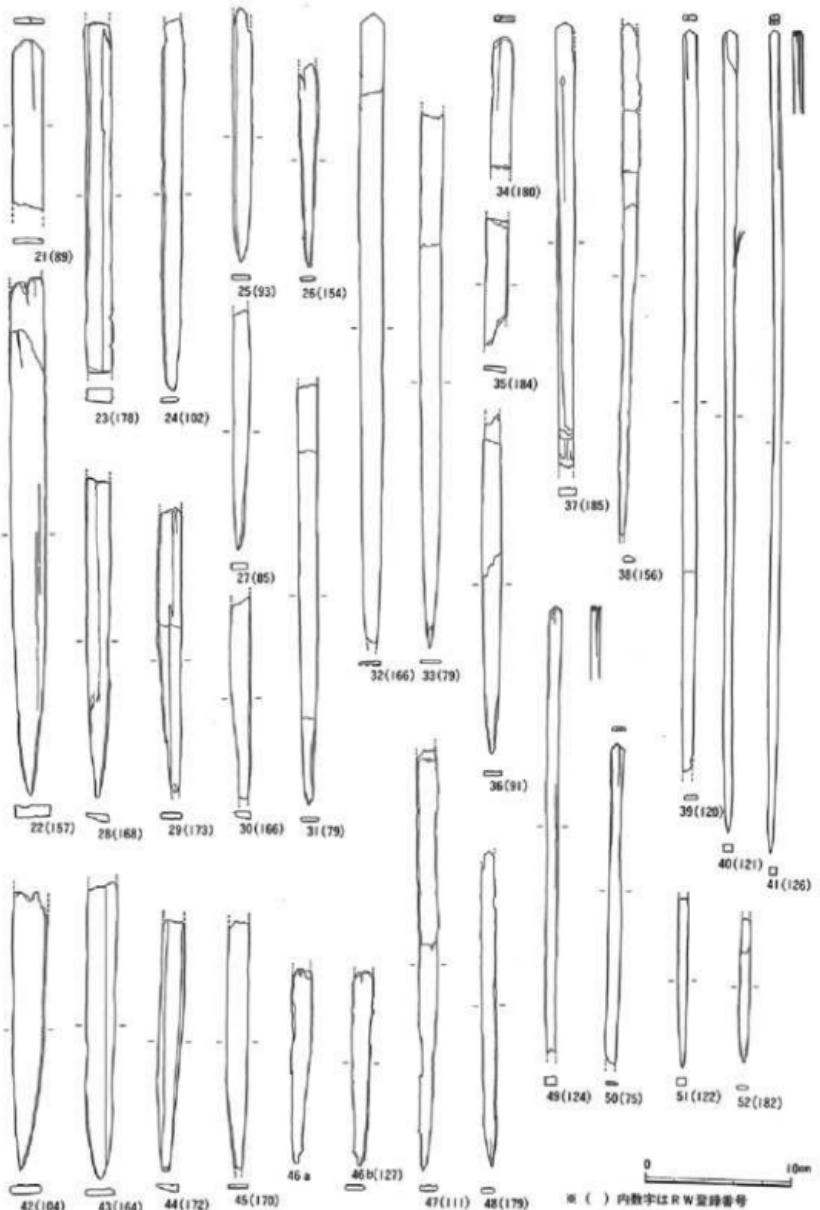


第27図 出土遺物(1)

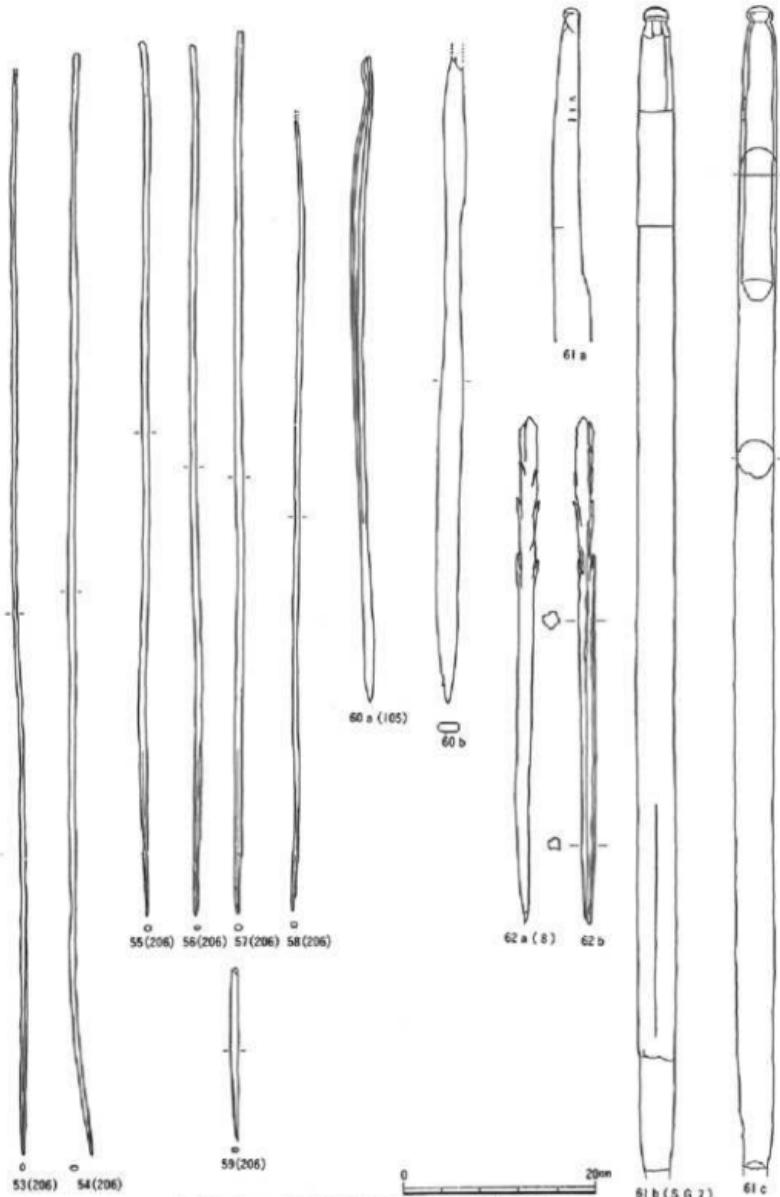


15-19: SG 7

第28図 出土遺物(2)



第29図 出土遺物(3)



\* ( )内数字は R.W.登録番号・出土遺物。62のみスケール1/3で収録

第30図 出土遺物(4)

までが叩き調整、およびその接合部で手持ちヘラケズリ調整と看取できるものであり、器面調整の手法がロクロ→タタキ→ケズリの順に推移したと識別できた。

なお、SG7河跡出土の壺(第28図16)は底部に径1.4×2.4cm程の楕円形状の穿孔があり、かつ頸部下へ体部上半部の相対する二面に人面が描かれていた。人面は菩薩的な面立ちをし、ふくよかである。また、その描き方は墨痕鮮やかで線に動きがあり、吊り上がる目、みずら風の耳、しっかりした鼻、小さく結んだ口、円みのある二重顎、太く長い跳ね上がる眉、短く左右に跳ねる鼻髣、眉間の点(髪?)等が明瞭に見て取れた。

これを正面とすれば、対面の墨痕は遺存状態の故か極めて不鮮明で、判別困難となっている。しかし、辛うじて観察できる部分から復元できた絵柄は、ほぼ正面に同様の人面であった(第28図16の上部)。

鉢は上記の壺に共伴と捉えられるRP56(第28図15)が唯一部分ながら器形・法量の窺い知れるものである。底部の切り離しは回転糸切り無調整で、内面に漆ないしなんらかの渋等樹液などをほぼ均一に塗布した様子を残しており(転用以前のものである可能性が大きい)、さらに外面の体部中程に不明確ながら人面を描いたと見なせなくもない形跡を止めている(ここでは一面だけに限られている)。

このことは「延喜式」の記事、および出土例の中に二個一対で用いられた例が多く認められることなどを勘案して、通例的に「人面土器は大小複数個の土器を組み合わせて使用された」と評されることに矛盾せず、須恵器とあかやき土器の違いこそあれ既に知られる本県での著名な酒田市「俵田遺跡」例に共通する様相と理解できる。

### 3) 須恵器

器種は供膳形態で蓋および有台・無台の壺があり、貯蔵形態に長頸壺、壺等がある。これらの分布ではSK2・SE3の検出されたA・Bトレンチの交点付近に幾つかのまとまりが認められるほか、CトレンチのSG7・8周辺には限定された状況と見てとれた。以下に図化できた資料を中心として器種毎の概略を説明する。

蓋はSK2から出土した第27図1~4が本遺跡での好例である。法量的には口径が13~14cm、器高で3~3.5cmの値に収まるものが大半で、口径は無台・有台の各壺身のそれにはほぼ一致している。このことは共伴例が無いものの相互のセット性を顧す一端と見える。

また、調整等技法では天井部を回転ヘラ切りで切り離した後、紐の取付を行い、さらに回転ヘラ削り調整を施す類型(第27図1~3)と、最終をナデ仕上げとして切り離し痕跡を止めない類型(第27図4)に区分できる。したがって、形態的特徴は前者がやや偏平な台形様、後者が背高で肩に丸みのある半球形と捉られる。なお、SK2出土のRP18・19には「吉」、「一」様の墨書が記されていた。

壺は有台(第27図8、第28図17・20)と無台(第27図9~11)のものがあり、無台壺に形態や手法的特徴を異にする幾つかの類型が識別できる。一方、有台壺は全体量が少ないながら、細部の差異を除いて法量・形態的特徴共に大差無いと判断でき、細分は無意味であろう。これらの特徴を上げれば、切り離しが回転ヘラ切りであること、無台壺より器高が幾分高いこと、高台の位置が底径の約6割方の所にあり、かなり内側に取付くこと等である。なお、第28図17と20には、それぞれ「在」・「瓦(?)」の墨書きが記されている。

無台壺は底径や体部の立ち上がり、および底部の切り離し手法等特徴から以下の三種に大別できる。すなわち、切り離しがヘラ切りで、所謂箱型を呈すもので、全体に小振りな法量のA類(第27図10・11)、A類に形態は近いながら、底部の切り離しが不明(静止糸切り?)で、体部下端にケズリ調整を施すB類(第27図14)、底径が小さく、口縁・体部の外傾度が大きいC類(第27図9、第28図18・19)の各類である。

これらの関係は、検出遺構内での在り方からA・C類との関係で不群となる。ただし、距離的に近い手藏田2遺跡(寺裏地区)での様相に近いものが認められることなどから、共伴の可能性が高いであろうと指摘しておく。

壺・甕類はいずれも各器種の部分片に限られ、その全体を窺うのが困難である。図化し得た資料は長頸壺の頸部(第27図5)、および短頸壺の肩~口縁部(第27図13)の二点であり、内容的に不詳な点が多い。第27図13の短頸壺は焼成の良い堅緻なもので、肩部の張りほか大振りな作りを示す。また、二本一対の筋が肩部に二条で巡り、所謂「筋壺」の形を成す。距離的に近い生石2遺跡のSD100溝跡などにまとまった類例が知られる。

甕は資料的に細破が殆どで、形状の窺えるものは無い。出土数的にも48点と僅少である。ただし、器面に黒色粒子を点々と吹き出す胎土の特性を持つ例が壺等の器種も含めて多い特徴は、同時代の周辺遺跡例に通有在り方と窺え、産地の共通性が推定される。

#### 4) 木製品

木製品ではSG7・8河跡を中心に検出された多量の斎串および細い丸棒ないし矢柄様木製品、あるいは天秤棒状の木柄、(取り上げ不能だったRW59)剣物などの器種がある。

斎串は第25図に示す状態でSG7の西岸から主に出土しており、登録数はSG7で173点、SG8で8点である。この内、全形を止めるものはごく僅かであり、大半は頭部・体部・先端部等の部分に折損していた。図化し得た例は比較的状態の良いものである。これらは、法量や形態的特徴から大きく三類に区分できるようである。即ち、全長50~60cmで断面方形の一群(第29図39~41他)、断面長方形で全長40cm内外の一群(第29図32・33他)、断面長方形で全長20cm前後の一群(第29図50・52他)となる。奈文研の型式分類に照らせば、いずれも主頭・劍先型のC型式で、頭部の刻みでII式に属する変形と言えるものである。

## 6 まとめ

本遺跡の調査は県営は場整備事業「平田地区」に伴う緊急発掘調査で、調査対象地区を現状保存の不可能な用・排水路計画部分に限定して実施している。すなわち、Aトレンチ(2×160m)、Bトレンチ(2×50m)、Cトレンチ(3×160m)の3トレンチ部分である。したがって、調査面積は770m<sup>2</sup>であった。

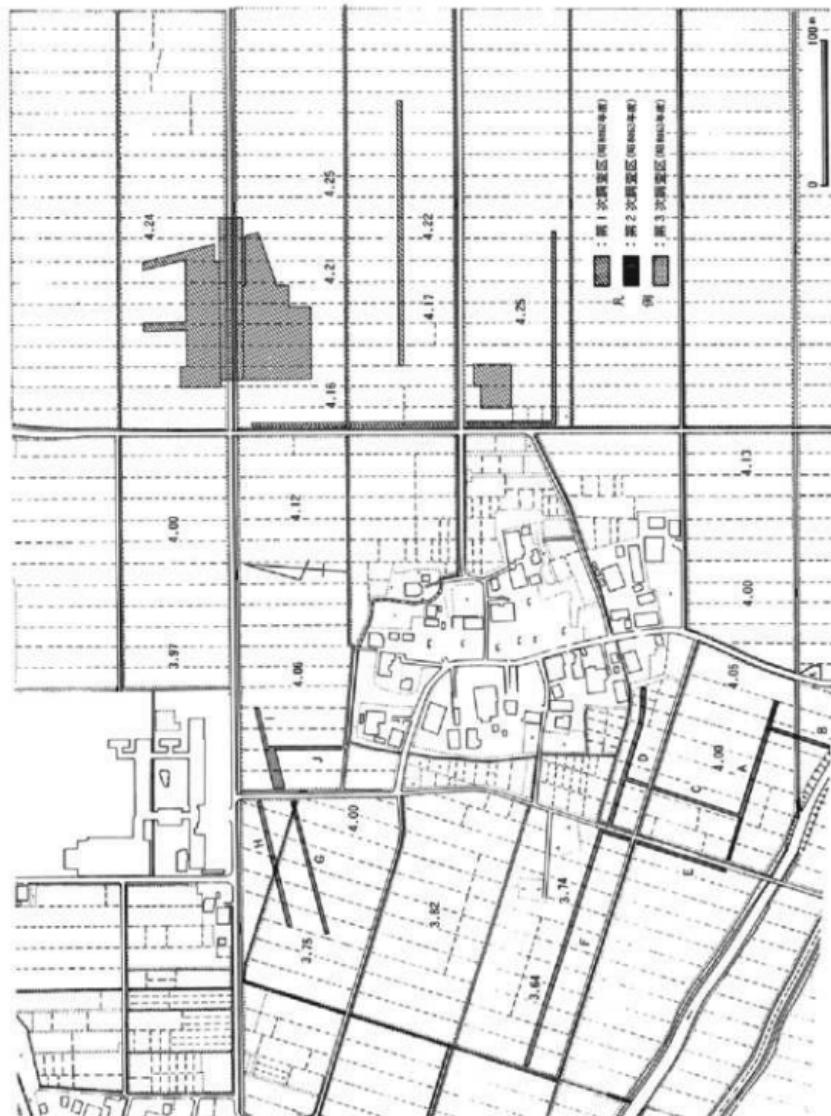
検出遺構はA・Bトレンチの交点付近(A-12・B-10区)で9世紀前半代に帰属すると考えられる井戸跡(S E 3)と土壙(S K 2)が各1基、Aトレンチの北端(A-1~2区)で東西方向に走る溝跡(S D 1)1条、その他柱穴若干等が検出された。また、Cトレンチでは東端のC-2・C-4~6区部分に河跡(S G 7・8)が見付かっている。以上の主要な遺構内からはそれぞれの時期や性格を現す良好な遺物群が部分的ながらも出土しており、特にS G 7河跡における斎串群と人面土器等の在り方は律令期祭祀の具体例を示すものとして注目できる。以下にS G 7での様相を補足的に述べ、最後に遺物群の帰属年代に触れてまとめて代える。

斎串群の出土状況は2節で既に述べた通りであるが、その展開は河跡西岸の浅瀬(緩斜面)にある。配置は完形の器を中心とする様なまとまりを持っており、以下の三群が明らかに識別できる。即ち、人面土器R P 16の南東部に10数本から成る一群、R P 165(有台坏)・R W 59(削物)・R P 57(無台坏)・R P 58(無台坏)の前面に約50本近く集中する一群、および小形の斎串が約20本程度まとまる調査区北辺の一群等である。さらに加えれば、あかやき土器鉢(R P 56)の西南面にもまばらながら一群があったやに考えられる。一方、群個々の構成内容は斎串の遺存が悪い事などもあって詳細を把握しきれていない。しかし、形・型式とその配置(並び)、および倒れ方などを含めた出土状況には規格(則)性が窺えた。

大きな特徴は、10本内外が単位的に配されたと見える点である。なお、各群は層位的に同一であり、相互の重複関係は見い出し難い。ただし、通例的に「2個1対」で用いられたとすれば、土器が5個、木器が1個の計6個として(その組合せは不明としても)、最低3回は祭祀が行われた可能性が考えられる。いずれにしろ、「祓の場」の雰囲気を如実に物語る資料と認識できよう。最後に土器群の所属時期について記すが、年代の根拠を今の所明確に成し得ないため予察程度に止めておく。なお、遺構内の切り合い関係ではS K 2がS E 3より古いことが確実である。しかし、時期的には両者共に9世紀前葉の中に収まると考えられ、これらにS G 7の人面土器および有台坏・無台坏等が一部併存するか、あるいはやや後続する時期の9世紀第2~第3四半期頃にかけての所産と推定される。

ちなみに、俵田遺跡の人面土器(長胴丸底形のあかやき土器型)に較べれば本遺跡例が明らかに後出のもので、俵田遺跡例が幾分先行すると判断できよう。

第31図 進跡概要図



## VI 熊野田遺跡

### 1 調査の概要

本次の調査は昭和63年度県営ほ場整備事業(平田地区)に関連する緊急発掘調査として、昭和63年5月23日から同年7月1日迄、延40日間に亘って実施した熊野田遺跡第2次調査である。遺跡範囲中事業区にかかる熊野田地区西半区域の水田部分を対象とし、深い掘削の予定される水路及びパイプライン計画線に沿った約2300m<sup>2</sup>について調査を行った。

調査では、最初に排水路3m、パイプライン2m幅のトレンチ10本を設定し、A～Jトレンチとした。各トレンチでは重機械を使用して表土を除去し、表土除去の終了した部分から手作業による面整理を重ね、遺構の検出に努めた。検出した遺構については順次掘り下げを行い、並行して測図・写真撮影等の記録作業を行った。調査中、Aトレンチに於いて検出した建物跡の規模確認の為、一部トレンチ外部で試掘調査を行っている。

トレンチ調査の制約上遺跡の全容を把握するには至らなかったが、先述した大型の建物跡や土壙、溝跡等を検出し、土壙内部から一括性の高い良好な資料も多々得られている。

以下に昨年度の第1次調査及び本年度の第3次調査の概要を記す。

**第1次調査** 県営ほ場整備事業との関連から、昭和62年5月7日から同年9月30日迄の98日間、熊野田地区東半区域を対象として実施された緊急発掘調査である。

遺跡北東部に設定した約6000m<sup>2</sup>の調査区域より、東西98.5m、南北(東辺)45mの板材列による囲み施設と、その内部に付随する建物跡・井戸跡・土壙等が検出された。遺物は須恵器・あかやき土器を主とし、時期的には10世紀前葉から中葉を想定している。他にも石蒂・硯等の石製品、瓦・土錘等の土製品も出土している。また、囲み施設の存在する区域から南方約100mの調査地点において検出された土壙及び溝跡より、7世紀から8世紀初頭とされる土師器が出土していることから、集落範囲・位置の時期的な変遷が窺える。

**第3次調査** 第2次調査終了直後の昭和63年7月1日から同年8月31日迄、県道生石・浜田線改良事業との関連から実施された。第1次調査区を南北に二分し、未調査となっていた農道部分が調査の対象となっている。この区域は板材列によって囲まれた中央に相当する部分を含み、第1次調査との関連に於いて注目された。

調査の結果、板材列の一部・建物跡・井戸跡・土壙・溝跡等が検出され、第1次調査の結果と併せ、囲み施設内部からは建物跡12棟・井戸跡2基・土壙68基の存在が確認された。囲み施設との直接の関係や遺構相互の関連については、今後の検討によって明らかになっていくものと期待される。遺物は須恵器・あかやき土器を主とし、文字の書かれた漆紙の付着した土器、「贋人」の記載のある文書木簡等、極めて貴重な資料も得られている。

## 2 遺跡の層序

遺跡の立地する区域の土層は基本的に3層より構成される。I層は細砂の混入する黒褐色粘土。II層は炭化物片を含む黒に近い灰色粘土。III層は明るい灰色の粘土又は粘土質の細砂・シルトである。II層及びI層の一部に遺物が混入する。III層上面が遺構検出面となるが、Cトレンチの一部ではII層が薄失し、10~15cmの耕作土直下がIII層上面に相当する。

遺跡は新井田川左岸、旧平田川右岸に位置するが、第2次調査区については旧平田川右岸に形成された微高地として位置付けるのが妥当であろう。しかしながら先述の様に微粒の粘土・シルトが卓越し、明確な自然堤防状の形態は呈していない。Fトレンチでは西側に向かってIII層が下降して行く様子が明確に認められ、相対的な地下水位も上昇していくことから、集落範囲を外れていくものと推定される。

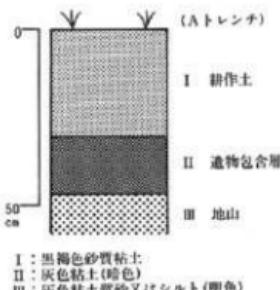
沖積低地では、地山とする砂層が洪水等によって成長し、生活面が変化していく可能性が高いが、今回は下位層まで調査の手を広げることはできなかった。

## 3 遺構・遺物の分布

今次の調査対象区域はA~Fトレンチに相当する現集落南西部と、G~Jトレンチに相当する集落北西部の2つのブロックに大別できる。

北西部のブロックでは遺構は検出できず、遺物の出土もほとんどなかった。本次の調査に先行して行われた遺跡確認の為の分布調査では、Jトレンチ南端部付近やGトレンチ南側の地点より遺物が出土しており、本調査区近辺が丁度集落の沿辺部に相当すると推定される。同地区では南西部の調査区に比してグライ化の程度は強いものの、地盤は比較的安定している。

南西部のブロックではA~Cトレンチに於いて遺構・遺物の集中区域が確認できた。中でもBトレンチ北からAトレンチ、Cトレンチ中央部にかけては遺構・遺物共に密度が高く、この区域の中核を成すと考えられる。反面、E・Fトレンチでは2本のトレンチが交叉する地点に於いて若干の遺構を検出したに止まった。遺構内部からの遺物の出土がほとんどなく時期を確認する要素に乏しいが、覆土の状態からは比較的新しいものと推定される。これらの遺構はA~Cトレンチに於いて検出された平安時代9~10世紀とされる遺構群とは、時期的・性格的にも同列に論することはできないものと考える。またFトレンチ西側は低湿地の様相を呈しており、少なくとも居住地として利用されたとは考えにくい。



第32図 土層柱状図

## 4 遺構

### Aトレンチ

現集落南部にかかる計画排水路に沿って設定した東西延長110m、幅3mのトレンチ。20mを一単位とする6区に区分し、東側からA-1、A-2...と呼称した。A-5・6区は、Cトレンチ部分に接続するパイプライン計画線に相当する為、幅2mとなるが、トレンチの連続性を考慮しAトレンチとして分類した。

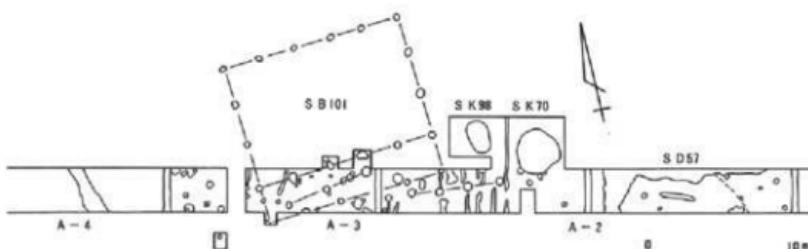
Aトレンチ内で検出した遺構はピット74基・土壌1基・溝跡19条・その他性格不明の落ち込み等である。そのほとんどはA-2~4区に集中し、その東西両側では遺構・遺物共に極端な減少傾向を示す。

検出されたピット中、4列・16基が組合せ可能で、その内平行する2列については同一建物の構成要素と判断し、SB101とした。SB101に関しては規模確認の為の試掘調査を行い、建物跡であることを確認したが、他の2列については未確認である。トレンチ内にかかる土壌はSK70とした1基のみであるが、先述の試掘調査中に新たに1基を検出し、SK98とした。溝跡については詳細を言及する要素に乏しいが、A-3区に於いて検出された細い溝跡群は、幅・間隔・覆土の点で共通性があり、同時期と判断できる。

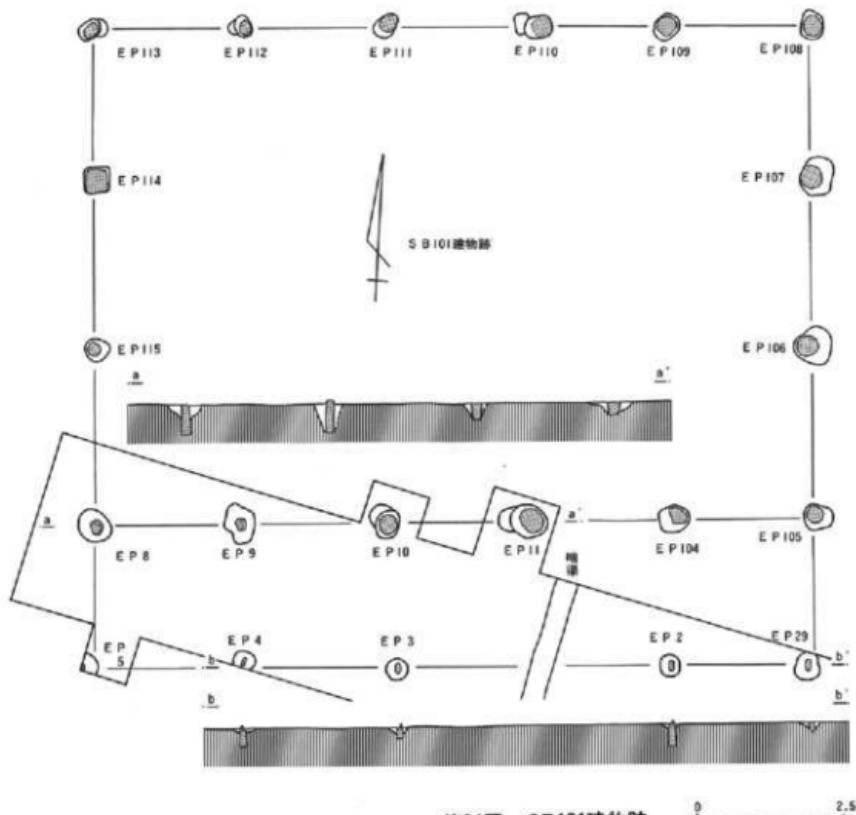
以下にSB101建物跡とSK70土壌跡について記す。

#### SB101建物跡(第34図)

A-3区に於いて検出された、南側に1間分の廊の付く桁行5間・梁行3間の東西棟の建物跡である。柱間距離は桁行で約2.4m、梁行で2.6~2.9m、全体では約12×11mに達する。南北主軸方向はN-4°-Wとほぼ真北に近い。トレンチ内では平行する2列の柱穴列(E P 8・9・10・11とE P 5・4・3・2・29)として確認された。北側へ展開することを相定して位置した試掘坑から、新たに12基の柱穴を確認、先の9基と合わせ、合計21本(E P 2・3間の1本は暗渠工事の際に抜き取られている可能性が高く、本来は22本か?)の柱により構成されている。トレンチ外の柱穴については基本的には場整備による破壊は



第33図 Aトレンチ概要図

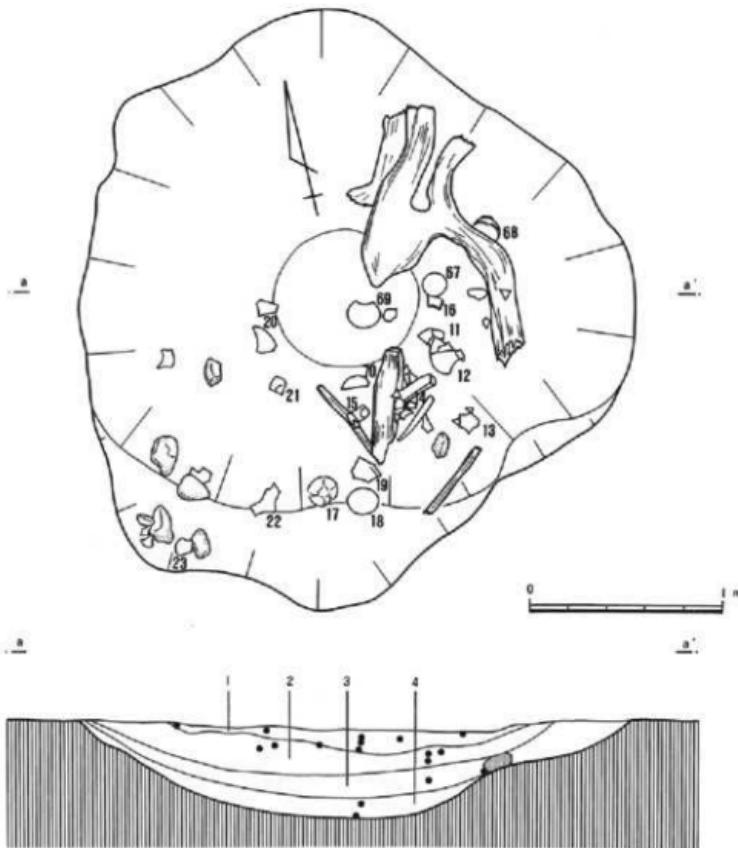


第34図 SB101建物跡

免れると判断し、平面的なプランの検出のみに止めたが、掘り方の埋土・アトリの状態等から同一建物の柱穴とみて差し支えないものと考える。掘り方・アトリ共に四角形の E P 114を除き、掘り方は概ね円形又は円に近い橢円形を程するが、アトリは廻部分では南北に長い長方形、他は全て円形である。E P 2・3・4・8・9の5本は柱根が残存し、比較的浅いE P 3を除けば、他は検出面から40~50cmの深さに達する。

#### S K 70土壤跡(第35図)

A-2区に於いて検出された、ほぼ円形を程する土壤跡である。トレンチにかかる部分はごくわずかで、トレンチを拡幅することにより全容を把握した。直系約3m、検出面からの深さは45cmを測り、浅い椀状を程している。土壤内部の堆積土は4層に区分できるが、



1. 黒色粘土質シルト(有機物を含む)  
2. 黒色粘土(多量の有機物・遺物を含む)

3. 暗灰黄色粘土質シルト(遺物を含む)  
4. 黒褐色粘土質シルト(有機物・遺物を含む)

第35図 SK70土壤跡

第3層については他と多分に異なる堆積状況を呈している。1・2・4層では有機物・炭化物片等の混入が多く、全体に黒色で穏やかな堆積を示すのに対し、第3層は地山に近い暗灰黄色でまとまった遺物の出土も認められない。以上から、土壤の埋積過程に於いて第3層を堆積させる小規模な洪水等があったことが予想されるが、第3層を挟む上下の出土遺物間に明確な時期差は認められず、比較的短期間で埋積を終了したと理解できる。

**B トレンチ(第36図)**

バイオライン計画線にかかる南北45m、幅2mのトレンチ。A-1・2間から南側に延びる。北側20mをB-2、南側をB-1区とした。

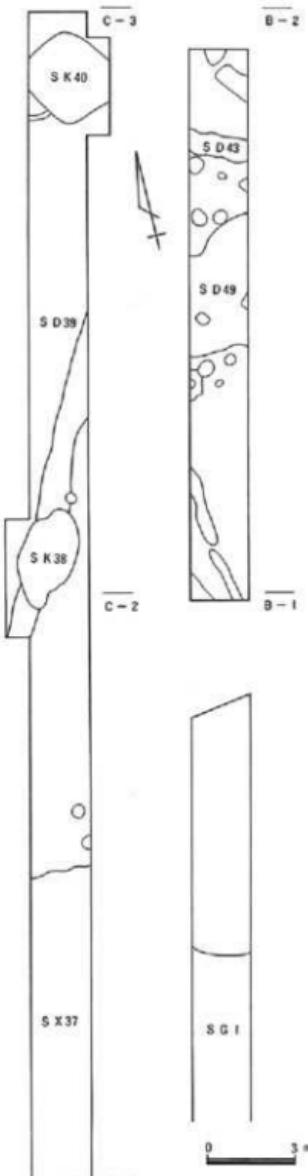
B-2区では柱穴様のピット11基、溝跡4条、他性格不明の落ち込み等を検出した。検出したピットの内組み合わせ可能なものはなく、アタリ、掘り方共に不明瞭なものが多い。SD43・49は東西方向に延びる溝跡で、A-3区等に比してやや古手の須恵器が出土している。他の2条の溝跡は南北方向の細長いもので、遺物の出土はほとんどない。B-1区では旧平田川河道と考えられるSG1を検出下に止まった。

**C トレンチ(第36図)**

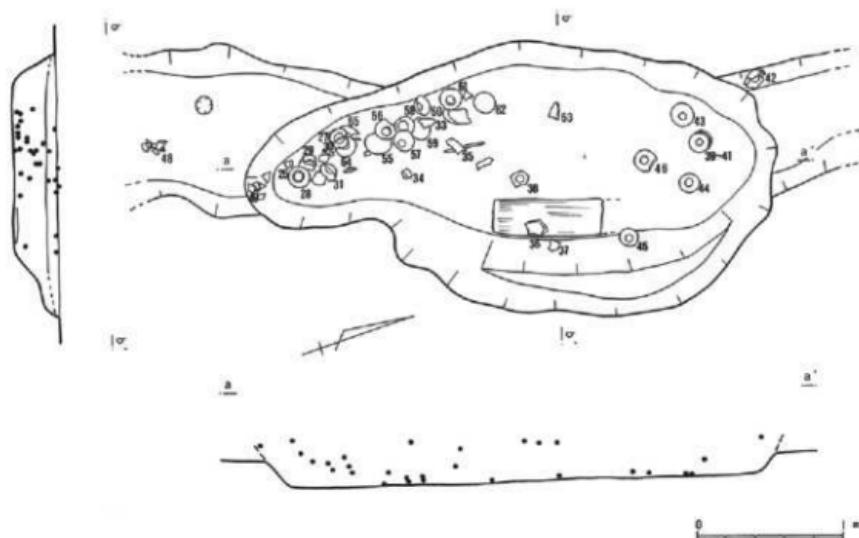
バイオライン計画線にかかる南北80m、幅2mのトレンチ。A-4・5間から北側に延びる。20mを一単位とし、南側からC-1～4区とした。C-2・3区ではIII層上部が耕作によって削平を受けた形跡があり、II層が薄失している。

検出された遺構は柱穴様のピット3基、土壙2基(SK38・40)、溝跡1条(SD39)、性格不明の落ち込み(SX37)1箇所と、分布密度的には低い。まとまった遺物の出土があるのはSK38のみであるが、包含層からの出土量も多く、トレンチ周辺に広がる遺構の存在を示唆している。SK38については後述することとし、他の遺構の概略を下に記す。

SK40は深さ約1m、一辺約3mの隅丸方形を程する大型の土壙跡である。出土遺物はいずれも破片で、量的にも少ない。墨書き器が1点出土している。SX37はC-1区のほぼ全域とC-2区の南半を占める広大な落ち込みである。覆土は10～20cmの擾乱層で性格は不明。年代不明の砥石等が出土している。



第36図・B・Cトレンチ概要図



第37図 SK 38土壤

#### S K 38土壤跡(第37図)

C-3区に於いて検出された、ややくずれた橢円形を程する土壤跡である。N-15°-E方向に長軸を持ち、長軸長3.7m、短軸長1.9m、深さ30cmを測る。底面ほぼ水平で、壁面は約45°の角度を持って立ち上がる。S D39溝跡を切る。

覆土は上下2層に分類できるが、上位層と下位層では遺物の出土状況・時期等の面で様相を異にしている。即ち下位層中の遺物が多数の完形品を含むまとまりある出土状況を市住めのに対し、上位層の遺物はいずれも破片で、下位の遺物よりも時期的に古い傾向があるということである。以上の点から、下位層中の遺物は土壤そのものに付隨し、上位層中の遺物は埋積の最終課程に於ける他からの流入に由来すると理解できる。明らかに上位層に含まれる遺物はR P33~38の6点で、R P50についてはS D39との関係が微妙であるが、S K38上位層中の遺物として位置付けたい。検出面に於けるS K38覆土が後の二次堆積と判断したことにより、S D39との重複関係が問題となるが、S K38断面b-b'i切り合いか確認できないことから、S K38が若干新しいと考えられる。

S K38上位層暗灰黄色粘土質シルト(微粒・強粘土質。下位層に比して暗色)

S K38下位層:にぶい黄褐色粘土質シルト(微粒・強粘土質。土壤底面まで单一)

S D39堆積土:黄褐色粘土質細砂(S K38堆積土に比してやや粗粒でざらつきがある)

**Dトレンチ**

排水路計画線にかかる東西約95m、幅3mのトレンチ。Cトレンチと直交する。東側からD-1～6区とした。東側が北にカーブしていることから、D-3・4・5区のみ20m単位とし、他は不規則となる。D-1区は相対的な地下水位が高く、II層下に粗砂が堆積している為、旧河道跡と考えられる。D-6区西側で近世以降と考えられる溝状の落ち込みを検出した以外、遺構は確認できず、包含層からの遺物の出土数も少ない。

**Eトレンチ(第38・39図)**

パイプライン計画線にかかる南北約90m、幅2mのトレンチ。北端でFトレンチと接続する。南側からE-1～5区とした。E-1区のみ10m、残りは20mを一単位としている。遺構が検出されたのはE-5区の一部に限られ、他では検出できなかった。包含層からの出土遺物はいずれも破片で、量的にも少ない。

E-5区に於いて検出された遺構は土壙4基である。2基は暗渠、残りは農道にかかり、いずれも全容を確認していない。遺構内からの出土遺物はほとんど皆無に近く、時期決定の要素に欠けるが、覆土中に腐植質のものが多く、比較的新しい時期が想定される。SK92覆土(4層)より、ほとんど原形を止めない小型の曲物が1点出土している。

**Fトレンチ(第38・39図)**

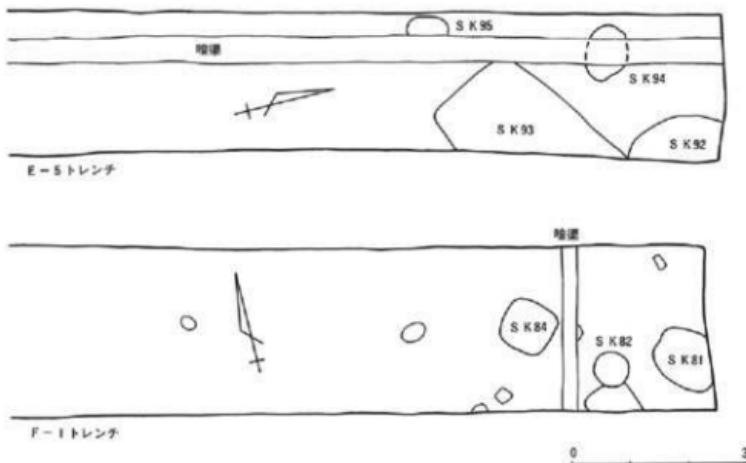
排水路計画線にかかる東西170m、幅3mのトレンチ。墓地南側から西方に延びる。20mを一単位とし、東側からF-1・2...区とした。

検出された遺構はF-1区東半に集中し、柱穴様ピット6基、土壙4基を数える。ピット3基は一列に並び、円形のアクリと隅丸方形の掘り方を有する。4基の土壙はいずれも時期的に新しいと推定され、SK82はE-5区で検出されたSK94・95と形態的に共通性を持つ。SK81より木材片及び漆器片1点が出土している。

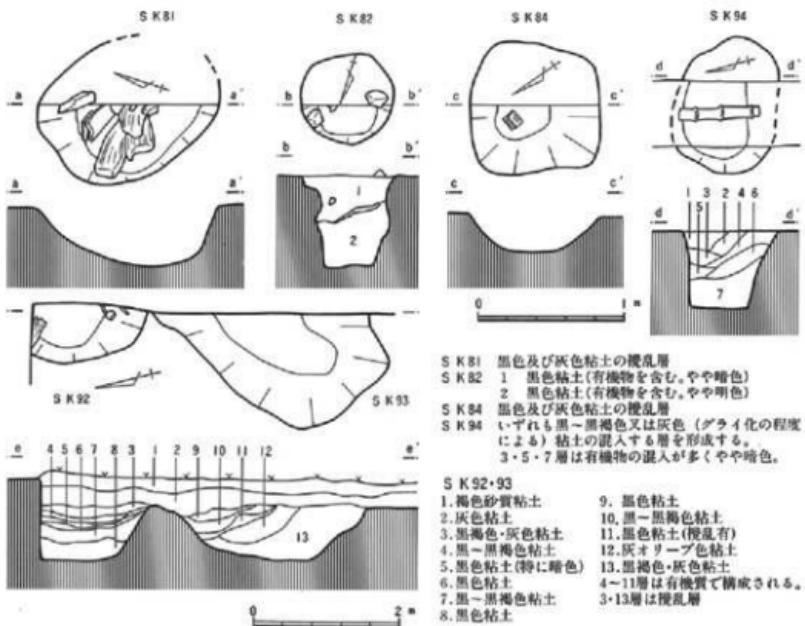
遺構の検出されなかったF-2区以西については、トレンチ南壁の土層観察を行った。その結果、III層が西方へ緩やかに傾斜していく様子が確認でき、特にF-4・5区以西では低湿地の様相が強く、相対的な地下水位も高いことから、集落区域から外れていくものと推定される。少なくとも居住地としてりようされた可能性は低い。

**G～Jトレンチ**

現集落北西部にかかる排水路及びパイプライン計画線に沿って設定した4本のトレンチ。いずれのトレンチからも遺構は検出できず、遺物もごく断片的に数点が出土したのみである。III層の状態は比較的安定しているもののグライ化の程度は高く、現集落南西部、特にA・B・Cトレンチ周辺の区域とは様相が異なっている。集落沿辺部に相当し、居住区域からは外れていると推定される。



第38図 E・F トレンチ概要図



第39図 E・F トレンチ検出土壌跡

## 5 遺物

遺物は各トレンチの包含層や検出遺構内の覆土あるいは底面等から出土した。種別的には、あかやき土器、須恵器、土師器、中世陶器・瓦器、近世陶磁器、土製品、石製品、鉄滓を含めた金属製品、および曲物等木製品がある。これら種別毎の遺物では、あかやき土器、須恵器、土師器等の平安時代の土器群が圧倒的量であり、その他の割合は僅少であった。遺物の出土総計は約5,000点弱であり、この内、須恵器約1,700点(34%)、あかやき土器約2,500点(50%)、土師器約400点(8%)、その他が400点(8%)の内訳となる。

以下では、主として遺構内から出土した遺物の概略を遺構単位で述べ、その特徴を記して行く。なお、まとまりある遺物群を認めた遺構はSK38・SK70・SK98土壌等の二三に限られ、その他は部分的、断片的なものであったことを付記して置く。

### SK38出土遺物(第40図・第41図31~34)

種別的に須恵器、土師器、あかやき土器、石製品があり、須恵器の壺・皿類が主体を占める。これらはプラン検出段階の最上層部分で認めた若干(RP29・RP34・RP36・RP38)を除けば大方は完形品であり、一括的に廃棄されたと考えて良いものである。以下に種別・器種毎の概略を述べて行く。

#### 須恵器(第40図1~29、第41図32)

器種に壺(22点)、有台皿(4点)、蓋(1点)、横瓶の頸部~肩部破片(1点)がある。

壺は破片資料で覆土上層から出土した切り離しが回転ヘラ切り無調整のRP34を除いて、形態・法量・切り離し手法等でほぼ同一型式と見做せるものであり、底部の切り離しが回転糸切りで、口径13~14cm、器高4cm内外、底径5~6cmの法量を測るものが大半である。以下に形態的特徴を列記する。

- 1) 底径が口径の1/2以下、体部の外傾が直線的か幾らか内弯気味、口唇がやや膨らんで弱く外反する。
- 2) 胎土・焼成は若干のものを除けば純じて細砂を含むもの多く、緻密・堅牢な焼き上がりとなっている。色調は青灰色が基調である。

なお、底部や体部側面に幾分小さめな文字「十」が墨書きされたもの6点(RP26・41・55a・55c・59・63)、文字不明のRP39、1点が含まれていた。

有台壺は2点出土したが、底部の切り離しが回転ヘラ切りで、法量的に大きいRP50は他との共伴関係が考へ難い覆土最上部から出土した破片資料である。一方、口径11.1cm、器高46cmと小振りで深身のRP44は土壌底面から出土しており、主体を占める壺類他との共伴関係が明らかなものである。色調は灰白で、胎土緻密、焼成良好であった。

有台皿は4点で、形態的に口反りが強く浅身のもの(RP28他)、体部の外傾が直線的

で、口反りもそれほど顕著でないもの(R P56)の二つがある。法量的にはR P61で口径13.7cm、器高3.6cm、台部径6.3cmを各測り、胎土・色調・焼成他の諸点で坏のそれに共通する。なお、R P28・61の2点は内底面や底部に墨痕・磨痕を認める転用坏であった。

蓋はR P29の破片資料1点に限られる。しかし、出土状況からは紛れ込み的な性格が考えられるものであり、坏類との共伴は考え難い。すなわち、17.4cmを測る口径はここで主体を占める坏のそれとは大きく異なり、どう見てもセットと言えるものではないだろう。横瓶は既に述べた上記の蓋・有台坏(R P50)等と共に覆土最上部から出土した頸部から体部上半にかけての破片資料である。性格的には二次的な混入品と理解されるが、胎土・焼成共に良好で、堅い焼き上がりを示し、外面に黒緑色の自然釉が観察される。調整では外面に平行タタキとカキメ、内面にアテ痕の青海波文を各認めた。

#### あかやき土器(第41図31・34)

器種に坏と大形甕があるが、両者共に各1点の部分資料であり、ここでの出土状況に限れば他の主体的な須恵器坏類との共伴関係は認め難い。口縁部を欠く坏(R P38)は底径6.2cmで、底部の切り離しは回転糸切り無調整である。胎土・焼成共にやや不良で、時期的に後出のものが混入したと判断される。甕は頸部が締まり、口縁が「く」の字に開く形態で、口縁端部の屈曲的変化を見ない。調整では内外面のロクロ痕を知るに止まる。

#### 土師器(第41図30)

器種はロクロ使用の内黒坏に限られており、非ロクロでハケメ調整を施す甕類は殆どない。例示の内黒坏(R P32)は口径13.3cm、器高5.7cm、底径4.8cmを測り、体部下半から底面全域に回転ヘラケズリが行われて、底部の切り離し痕を止めていない。また、内面および外面の口縁端部にアタリ単位が小さく、丁寧な仕様のヘラミガキ調整が施される。

#### 石製品(第40図33・40)

断面略方形を示す砥(R Q30)が2点出土している。砥面は上下左右の四面に認められ、R Q30の正面に示した部分では、尖頭の刃先を研いだと考えられる溝・線状の使用痕跡が遺存している。また、第41図40では砥面の中央が凹状となる使用例が覗えた。

#### S K 40出土遺物(第41図35~40)

須恵器、あかやき土器の破片類が中心となって出土したが、いずれも二次的な性格のものと考えられる。このうち図化できたものは須恵器の蓋2点(35・36)、坏底部1点(37)、土錘破片1点(38)、あかやき土器甕の体部破片(39)1点等に限られる。蓋(35)は偏平な宝珠様鋲を持つ小振りな形態を持ち、肩部に回転ヘラケズリ調整が施される。また、40は薄手に作られた短頸壺の蓋であり、天井部を35同様に回転ヘラケズリで調整している。これらは全体に古相を呈すと思われるが、組成他の様相は不明である。坏は切り離しが回転ヘラ切

りで、底径7.2cmと小さめの形態を示し、器形的には椀形基調と言えるものである。この底面には「独」様の墨書文字が大きく記されていた。土鍾は小片のため大きさその他、不明な部分が多く割愛する。あかやき土器甕は小片の体部資料であるが、外面に平行タタキ、内面に小判形を1単位とする平行アテが斜位連続で認められた。

#### S K 70出土土器(第41図41~55、第42図56~63)

遺物の出土状況は第35図に示す通りで、若干(R P69)のものを除けば大半が覆土1・2層から一括的に出土している。種別的にはあかやき土器が主体を占め、次いで須恵器、土師器の順であった。供膳形態器種の底部資料数比較では、須恵器を1とすれば、土器(内黒坏)1、あかやき土器約7の割合となる。また、土器以外の遺物では自然木や板材が多く見られたほか、風字硯の大形破片(60)が注目できる。

#### 須恵器(第42図57)

器種に坏、有台坏、壺、甕、蓋等の破片資料を認めたが、いずれも二次的な混入品と見られるものであり、量的主体となるあかやき土器との共伴関係は認め難い。例示できた資料(57)は甕類の体部破片で、外面に平行タタキの手法を知る他は不明である。

#### あかやき土器(第41図41~55、第42図56~52、61)

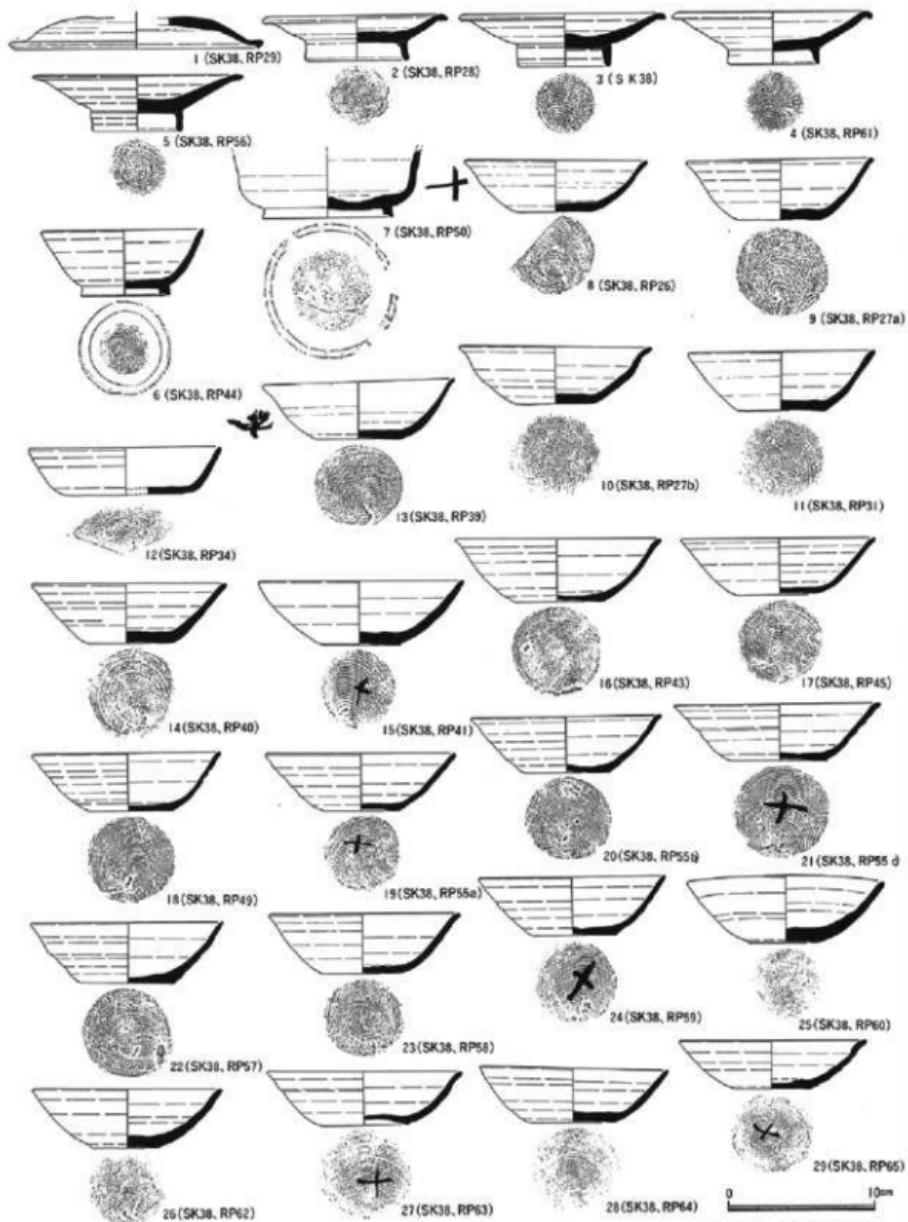
器種に坏・有台坏・甕(大形丸底甕)・鉢(小形甕)・壠があるが、有台坏は若干の破片資料に限られ、組成の一端に加えて良いかどうか迷う所がある。一方、壠や甕、鉢類でも全形の復元出来るまでのものが無かったが、これらは量的なまとまりが認められ、出土状況他からも主体を占めた坏類との共伴は確實と捉えられよう。

坏は口径が12~14cm、器高が4~5cm、底径が5cm内外の法量枠に収まり、一部を除いて規格性が強いと捉えられる。形態的特徴を上げれば、以下のように列記できる。

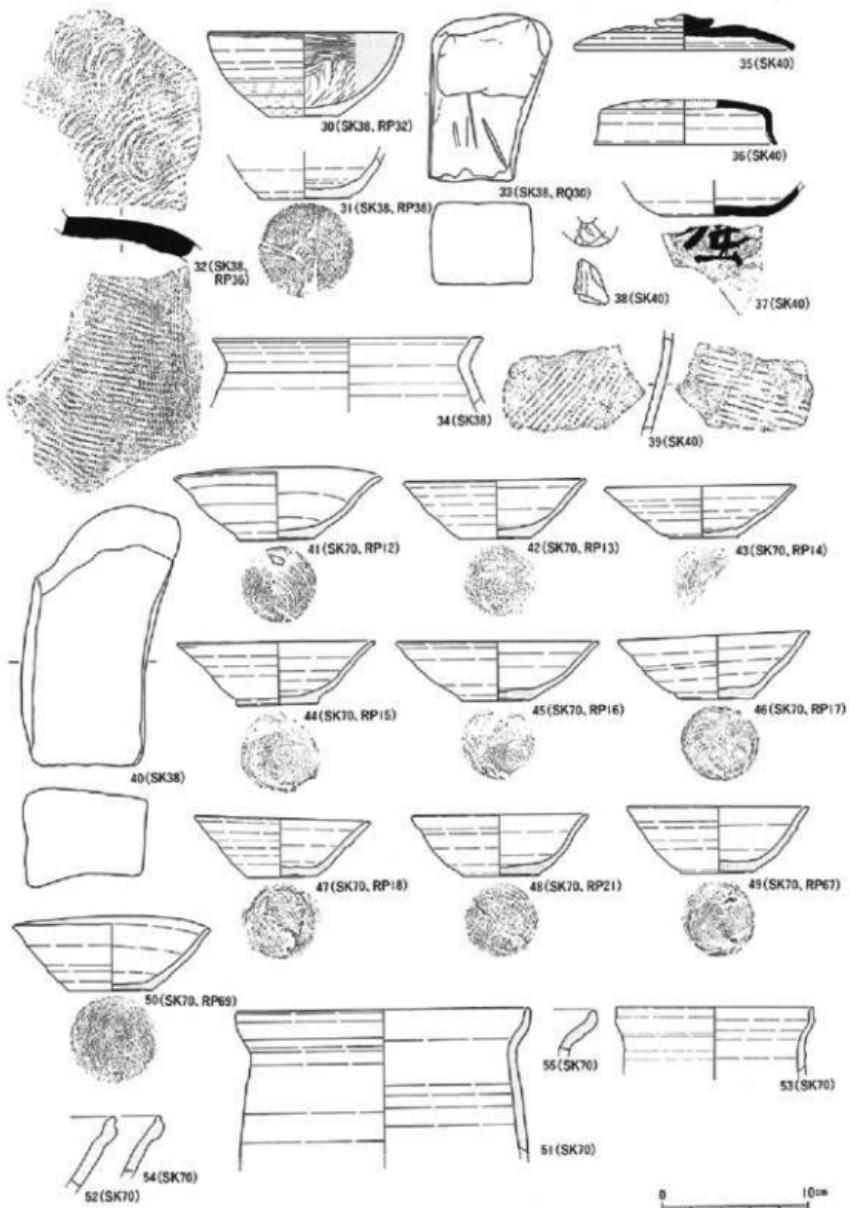
- 1) 底径と口径の比率が約1:0.8:2.5前後の値を示し、口径と器高の相関で得られる指數(口径/器高×100)値では300代にピークが来る。
- 2) 体部の立上りは外傾ないしやや内弯傾向となる。
- 3) 底部の切り離しは回転糸切り無調整である。
- 4) 胎土・焼成的には一部に粗雑なものが見られるものの、全体的には未だ良好な部類に属すと考えられる。すなわち後出的な焼歪みの著しい一群は殆ど組成されない。
- 5) 色調は黄橙系で、黒斑を持つものは皆無である。

甕は全形の判断する資料はないが、部分片の内容から体部上半部がロクロ整形、下半部がタタキ(ケズリも加わる)整形される大形丸底形態を呈するものと考えられる。

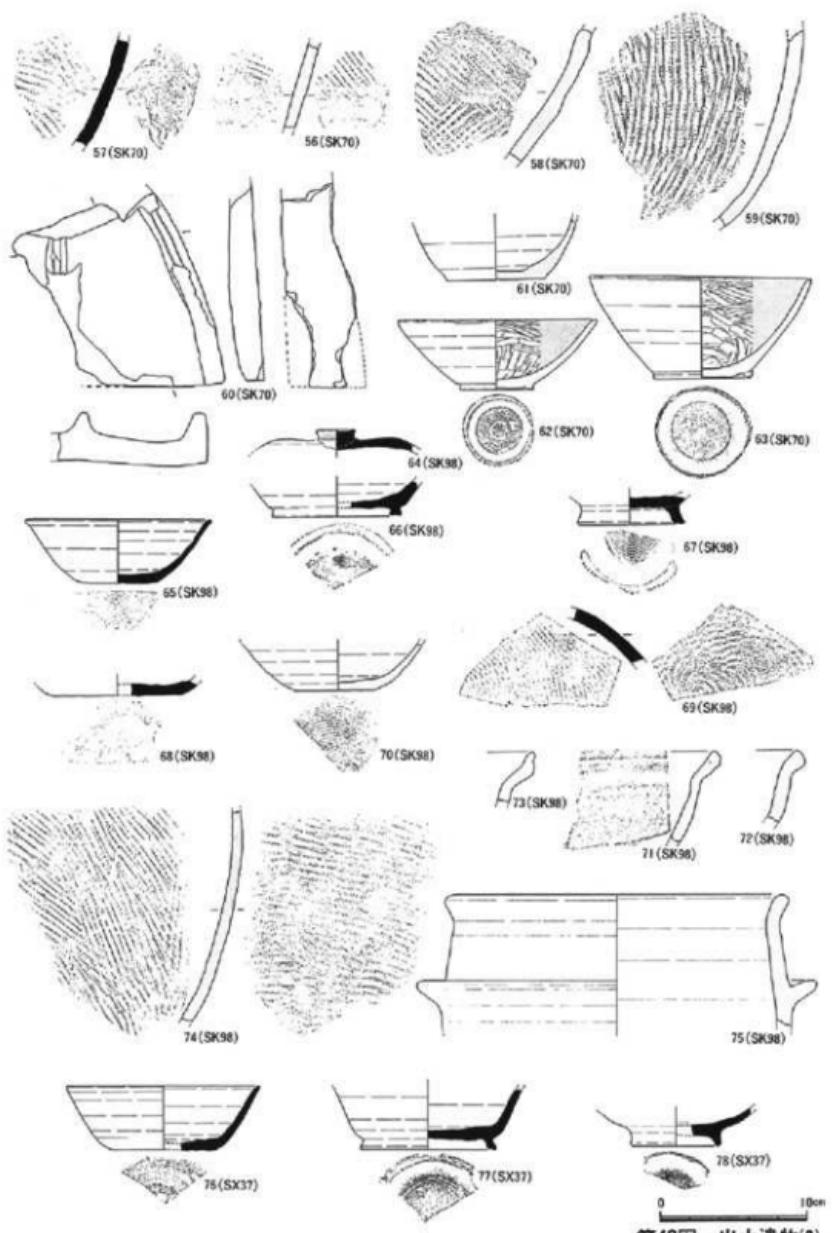
すなわち、51・55は上半部の前者であり、56・59は後者のタタキ・アテの見られる体部下半から底部域にかけての資料である。



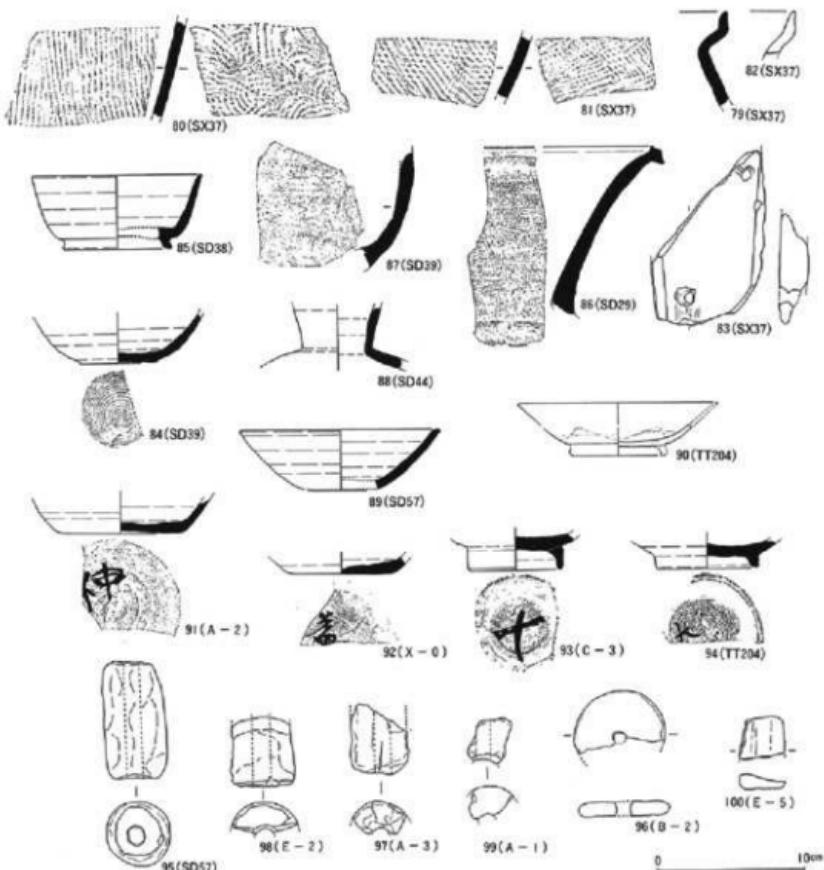
第40図 出土遺物(1)



第41図 出土遺物(2)



第42図 出土遺物(3)



鉢(小形甕)は大形丸底甕の上半を小形化(53)して平底(61)形態にしたと見えるもので、調整は全面ロクロ、底部の切り離しは回転糸切り無調整のものである。これは内外面に炭化物を付着する例が認められ、本来的に煮沸形態の器種であった可能性が強い。その意味では「鉢」の呼称より「小形甕」として認識するのが妥当であろう。

壺は破片資料が大半で、器形の窺えるものは無い。図化し得た資料は口縁部資料の2点(52・54)、体部下半部の1点(58)である。口縁部はやや肥厚して丸みを持ち、そこから更につまみ上げられた短い口唇部等に特徴が窺える。体部(58)の在り方は甕のそれと基本的に同一と見なせるが、外面に煤等炭化物を遺す割合がより顕著な点は注意される。

#### 土師器(第42図62・63)

器種は内黒坏一種であるが、タイプ的に無台と有台(62・63)の二形態に区別される。また、前・後者の割合は底部資料で見る限りほぼ半々である。図化・例示できた二例は法量的に異なるが、いずれも有台の内黒坏であり、底部外周端に背の低い台部を作出している。手法的には貼り付けと言うより、削り出し風の仕様と見え、こうした特徴から器形的粗形を施釉陶器に迫ることができると考えられる。

調整手法は内外面ロクロ整形の後、内面全域と口唇部にアタリ単位のやや大きめなヘラ状工具でミガキ調整(ヘラナデ風)を加えるものである。ミガキ方向は上部で横方向、下部で斜位・縱位方向である。なお、底部の切り離しは無台・有台共に回転糸切りであった。

石製品(第42図60)

「二面円頭」風字甕の大形破片が1点出土している。形態は漢字の「風」の字に似るもので、中央部に覗面を縦に二分する堤が特徴となる。外縁堤・覗面は覗尻で高さを増し、全体に覗頭に向かう緩やかな傾斜を見る。遺存部分は頭部を欠く右半分の部分であった。胎土・焼成では、細砂を含み堅牢な焼き上がりを示しており質的に須恵器に同等と言えるものである。色調は青灰色を呈し、残存長14cm、厚さ2cm、覗尻の外縁高5cmを各測る。その他の冒頭に述べた自然木・板材等については整理検討未了のため割愛する。

#### S K 98出土遺物(第42図64~75)

上述S K70の西側に近接して検出された掘り込みの浅い土壙から須恵器の蓋・坏・有台坏・甕(第42図64~69)、あかやき土器の坏・甕・壺・羽釜(第42図70~75)の他、内黒坏(無台1点・有台2点)の底部若干が出土している。資料的には新旧の混在と捉えられ、須恵器の蓋(64)・坏(66・68)等の幾つかで時期的に古いと判断できた。しかし、主体はあかやき土器の顕著なS K70に近い時期か、やや先行する時期のものと考えられる。

その他、S X37でヘラ切り主体の須恵器坏類、トレンチ・包含層等からK90相当と考えられる綠釉陶器皿、土鍤、墨書き土器、砥石などが出土している(第43図)。

## 6 まとめ

本遺跡の調査は昨年度に引き継ぐ県営は場整備事業「平田地区」に係る第2次の緊急発掘調査である。調査の結果、遺構・遺物の集中地点は主にA～Cトレンチを設定した現集落の南西部分に認められた。検出遺構は掘立柱建物跡、土壙、溝跡等他であり、主屋的な建物跡のSB101、一括遺物の得られたSK38・70土壙などが注目できるものである。

遺物では平安時代の9世紀後葉を中心とする土器類他が約5,000点が出土し、この中に僅かながら縁釉陶器や二面円頭風字硯といったやや格式の高い遺物が含まれていた。

なお、昨年度実施された第1次調査では約6,000m<sup>2</sup>の調査区内から東西98.5m、南北45mの規模で巡る板塀列の囲み施設が検出され、内部に建物跡・井戸跡・溝跡他からなる東西二群(単位)の遺構群が検出された。時期的には今次調査の結果にはば重複する9世紀中葉以降に主体があり、今回の調査で検出されたSB101建物跡を始めとする遺構群との関係が当然のことながら問題として上げられる。しかし、昨年度の囲み施設を含めた遺構群の性格が何であるかは今の所不鮮明で、希少品として見いだされた石帶(鳥油腰帶)、硯、木簡、漆紙文書、縁釉陶器、および多量の墨書き土器等出土遺物の在り方に僅かな手掛かりがあるかと推測できる程度に留どまっている。

一方、今次調査は限られたトレンチ調査であったため面的な遺構配置の様子までは把握しきれなかった。従って、SB101その他の遺構群を区画する囲み施設が存在したかどうかは不明である。但し、SB101建物跡は第1次調査で検出された建物跡以上に柱痕(根)径、片庇付他の諸点で格式を持ち、規模的にも3間×5間(12×13m)と大きなものである点は注目される。建物跡の帰属時期は必ずしも明確でないが、いずれにしろSK70かSK38の時期に相当すると考えられ、9世紀後葉以降、10世紀前半代までの時期幅に取まるものと捉えられた。すなわち、上記第1次調査地点でのそれと時期的には一致することは既に述べた通りである。次に、出土遺物について述べるが、充分なスペースが無いため、主な対象を資料的まとまりの認められたSK38・70等での一括遺物とし、その類例および年代について若干例を上げながら触れる程度とする。

SK38出土遺物は器種的に环・皿類の供膳器に限られ、その他の組成内容は今一つ明確でない。但し、同様の供膳器を持つ例は手藏田12遺跡でIII期とされたSK41土壙他にあり、通例ではあかやき土器環の占める割合が半数以上程度はあると考えられるものである。

また、SK70出土遺物は供膳器の主体があかやき土器の环にあり、須恵器のそれは殆ど組成されなくなる段階と判断されるのが通例であろう。類例として手藏田2遺跡SK142出土例等を上げることができるが、本例はこれらより先行し、手藏田12遺跡IIIa期よりやや後出的様相を備えると捉えられる。年代的には10世紀前半代に位置付けられよう。

## VII 総 括

今回の大槻新田遺跡、手藏田3遺跡、横代遺跡、熊野田遺跡の四遺跡の調査はいずれも昭和63年度県営ほ場整備事業(平田地区)にかかることから県教育委員会が実施した緊急発掘調査である。各遺跡の調査成果については既にIII~VI章に述べた通りであり、それぞれに時期や性格を異にした在り方が窺えて興味深い内容となっていた。

また、今回調査対象となった各遺跡はその周辺遺跡群と共に、城輪跡を取り巻く南縁の飛鳥・手藏田遺跡群を構成する一画を占めており、性格や時期的問題を含めた意味でも以前から注目されていた経緯があった。以下に今次調査のまとめを各遺跡毎、箇条書的に行って報告を終えることとする。

大槻新田遺跡はA・B区として設定した2,000m<sup>2</sup>の調査区内から、主に9世紀前半代と10世紀中頃に係る時期の建物跡・井戸跡・土壙他の遺構と遺物が検出された。遺構の特色はA区とした狭い範囲内で集中的に検出された幾つかの形態を違える井戸跡である。

手藏田3遺跡は面積530m<sup>2</sup>程のトレンチ調査から、溝跡と土壙各1基、古代の土器等遺物約100点弱が検出されたに留どまつた。そこでの遺物の在り方他からは第1次調査地点からの広がりに関連する遺跡周辺部と捉えられ、溝跡等は近世以降の所産と判断される。

横代遺跡は700m<sup>2</sup>程の限られたトレンチ調査であったが、遺構・遺物のまとめはA・Bトレンチの交点付近およびCトレンチ東端部分にあった。前者では井戸跡・土壙が各1基あり、集落との係わりが求められる。また、後者は河跡に関連して人面土器と斎串からなる祭祀跡が良好な状態で検出され、俵田遺跡に継ぐ2例目として注目される。時期的に本例は俵田遺跡例より後続のものと捉えられ、年代にして9世紀第2~第3四半期頃の所産と推定できる。

熊野田遺跡は合計で2,300m<sup>2</sup>程のトレンチ調査で、集落に関連する建物跡・土壙他の遺構が検出された。しかし、面的状況の把握は不可能であり、第1次調査地点等との同等な比較を成し得るまでには至っていない。但し、部分的ながら遺構の様相や遺物群の在り方は、内容的にさほど遜色がないと判断でき、何等かの単位群が隣接して散在する様子と窺えた。しかし、その単位が一般村落の一部であるのどうかの問題は課題として残っており、地域内部における個別的・総合的な比較検討が必要である。

### 引用・参考文献

- 1 山形県教育委員会1984 「俵田遺跡発掘調査報告書(2)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第77集
- 2 山形県教育委員会1985 「手藏田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第87集
- 3 山形県教育委員会1986 「手藏田遺跡発掘調査報告書(2)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第98集
- 4 山形県教育委員会1987 「南興野遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第114集
- 5 山形県教育委員会1987 「生石2遺跡発掘調査報告書(3)」 山形県埋蔵文化財調査報告書第117集
- 6 山形県教育委員会1987 「生石4遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第118集
- 7 山形県教育委員会1988 「大槻新田遺跡発掘調査報告書」 山形県埋蔵文化財調査報告書第129集
- 8 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター-1983 「陶器関係文献目録」『埋蔵文化財ニュース』41
- 9 金子格之編1988 「律令祭祀遺物集成」
- 10 斎藤孝正1981 「第五章考察」『桃花台ニュータウン遺跡調査報告書Ⅲ』 愛知県建設部・小牧市教育委員会

# 図 版



遺跡周辺の空中写真 (TO-72-4 X C-10-6)

図版2 遺跡遠景



平田地区遺跡群遠景（東から）



大槻新田遺跡遠景（南から）



熊野田遺跡遠景（南から）



遺跡近景（南から）



A区調査風景（東から）



B区調査風景（東から）



B区調査風景（南から）

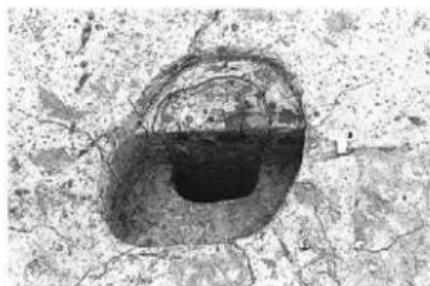


A区調査風景（南西から）

図版4 大槻新田遺跡



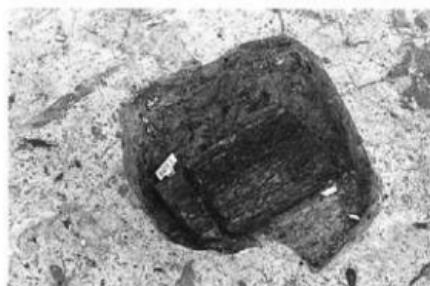
SB1 摺立柱建物跡 (北西から)



SB1・EB3柱穴跡



SB1・EB6柱穴跡



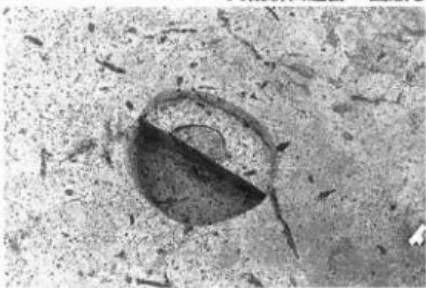
SB1・EB11柱穴跡



SB1・EB12柱穴跡



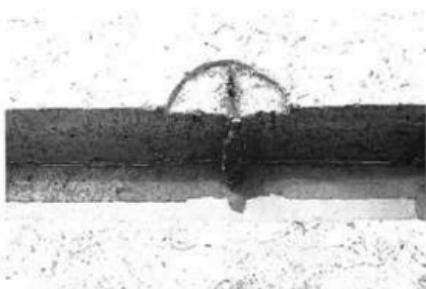
SB 1・EB 5柱穴跡



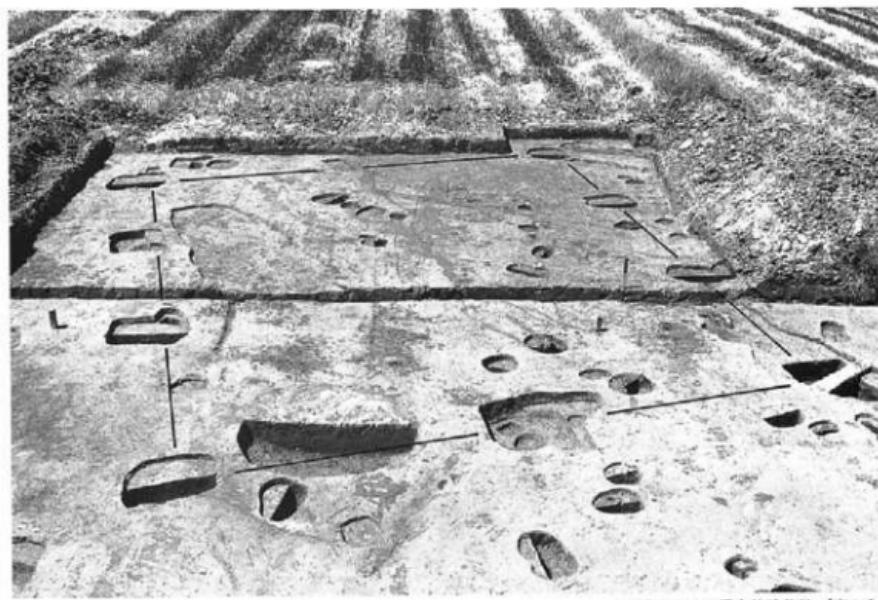
SB 1・EB 13柱穴跡



SA 5柱列・EA 156



SA 5柱列・EA 156



B区 SB 4据立柱跡（南から）

図版6 大槻新田遺跡



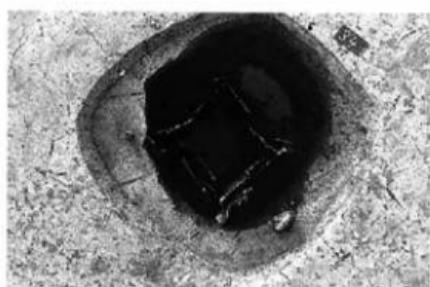
S E 34井戸跡（北から）



S E 34調査状況(1)



S E 34調査状況(2)



S E 34調査状況(3)



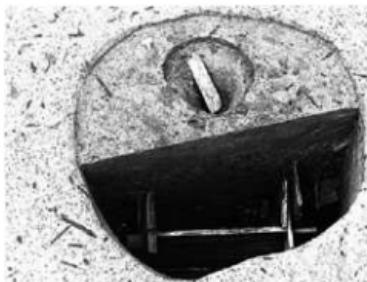
S E 34調査状況(4)



SE 44井戸跡（東から）



SE 44調査状況(1)



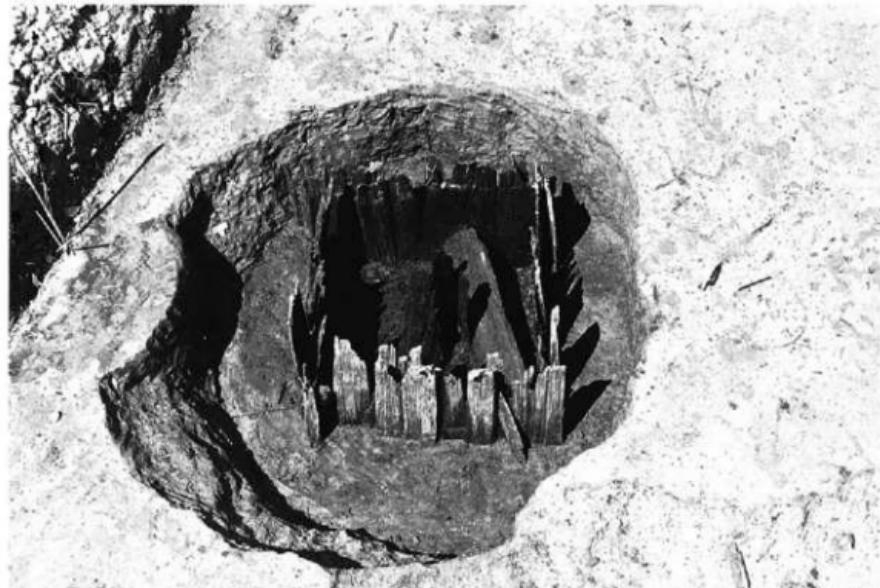
SE 44調査状況(2)



SE 44調査状況(3)



SE 44調査状況(4)



SE47井戸跡（南から）



SE47調査状況(1)



SE47調査状況(2)



SE47調査状況(3)



SE47調査状況(4)



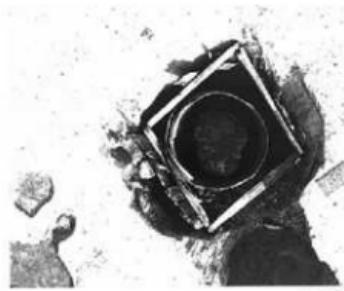
SE60井戸跡（南から）



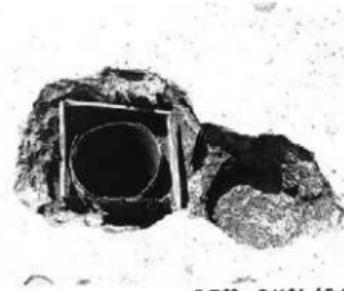
SE60調査状況(1)



SE60調査状況(2)



SE60調査状況(3)



SE60・SK61（北から）

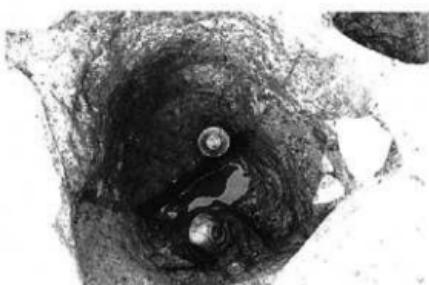
図版10 大槻新田跡



SK40 (南から)



SK46 (西南から)



SK51全景 (南から)



SK51遺物出土状況



SK53全景 (南から)



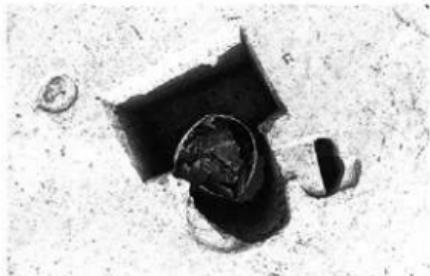
SK53遺物出土状況



SK53全景 (東から)



SK65土層断面 (西から)



SK 78全景（東から）



SK 78検出状況



SK 78埋置物（東から）



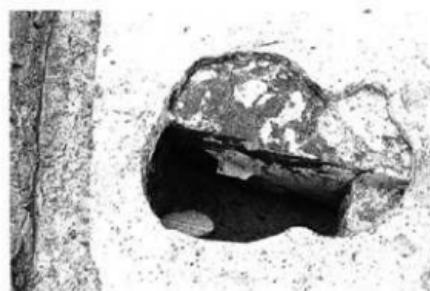
SK 78完掘状況



SK 110完掘状況（西から）



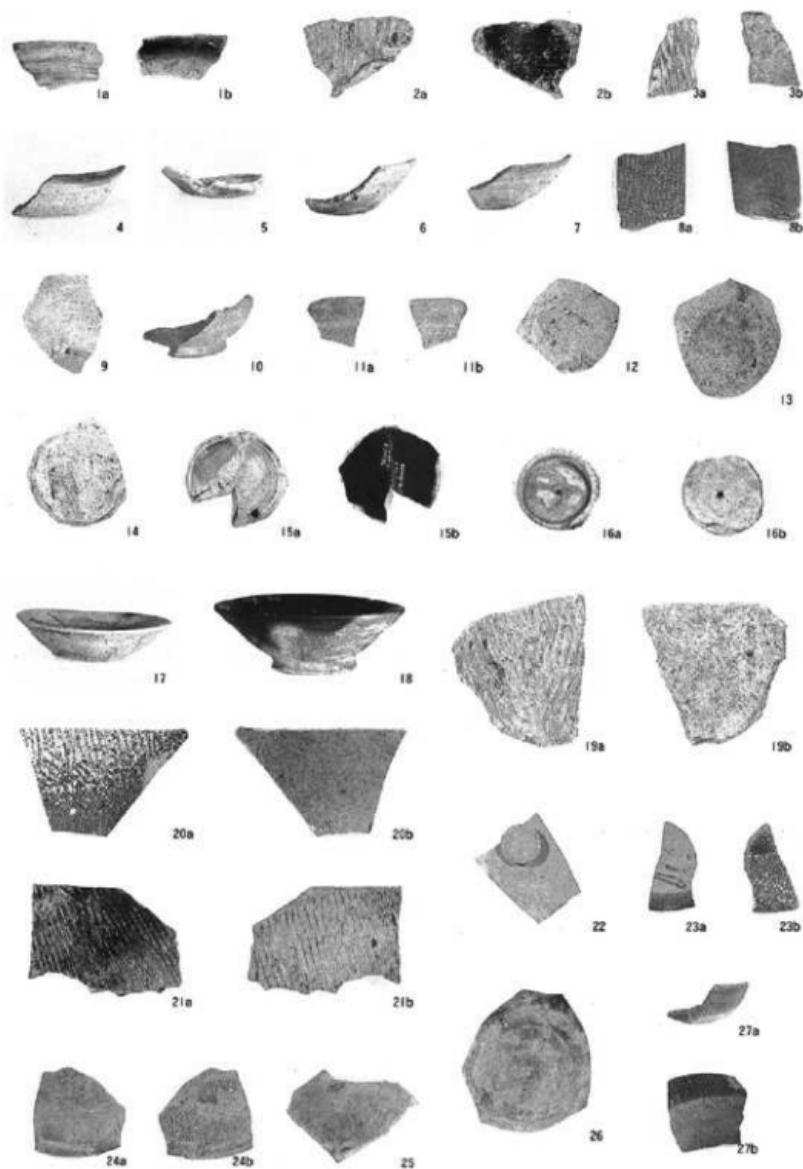
SK 271土層断面



SK 275土層断面

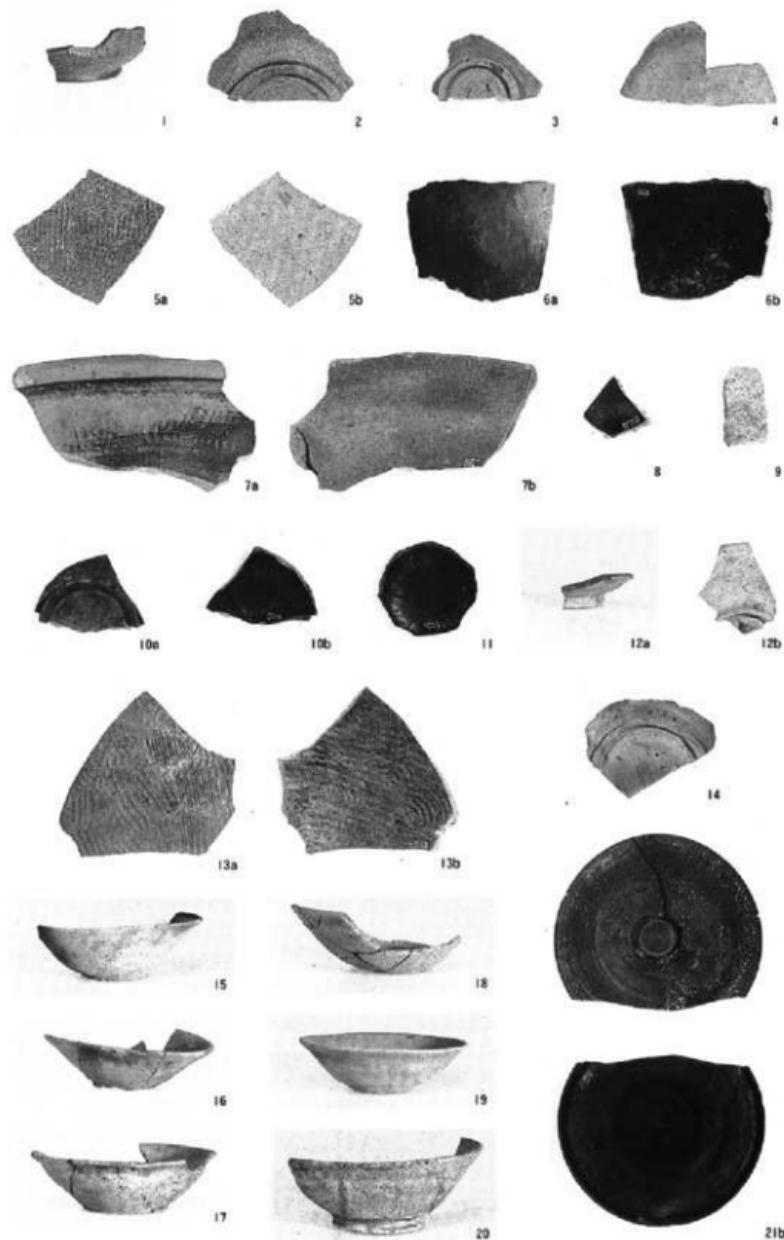


A トレンチ東端部土壤



出土遺物(1)

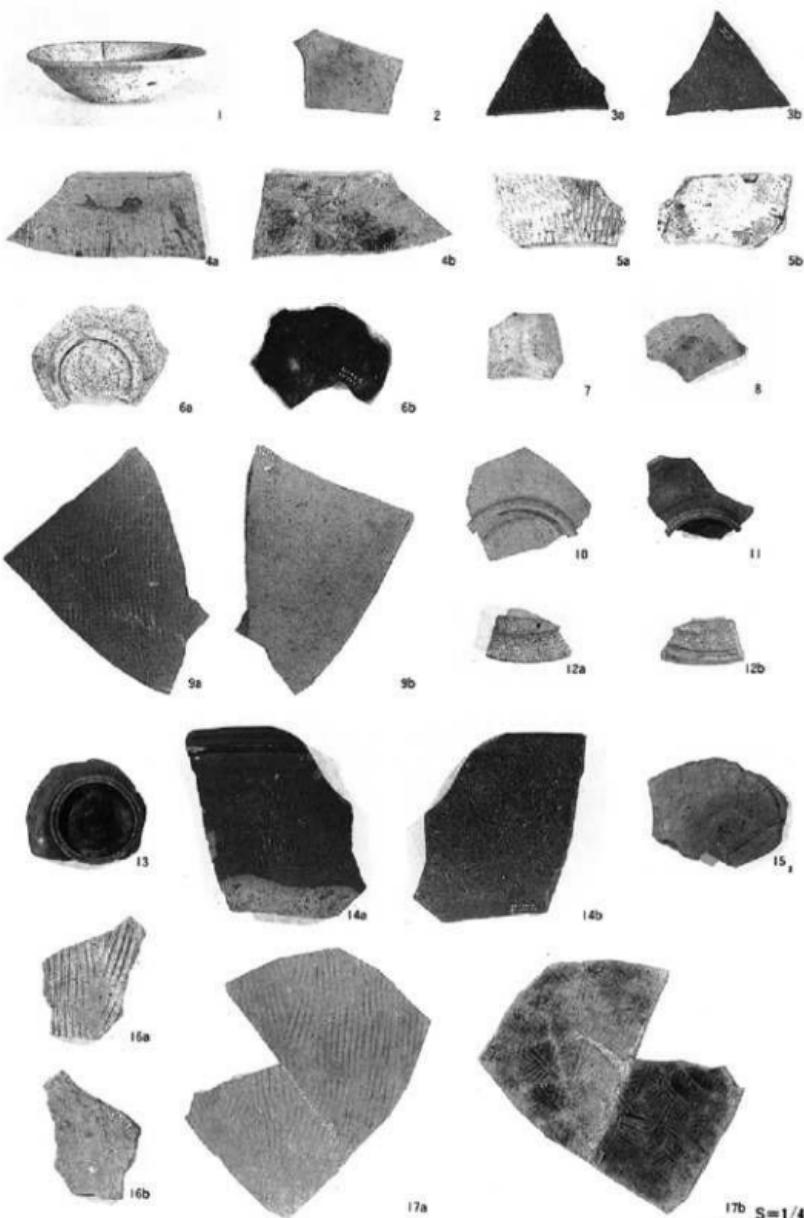
1~3 : SK22, 4~8 : SK40, 9 : SK45, 10~11 : SK46, 12~21 : SK51, 22~27 : SK53



1~9 : SE34, 10~20 : SE47, 21 : SE44 S=1/4

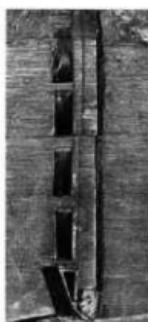
出上遺物(2)

図版14 大槻新田遺跡



1・2 : SK54, 3・4 : SK65, 5 : SK70, 6 : SK70, 7 : SK73, 8 : SK110, 9 : SK15010~12 : SK161,  
13 : SK162, 14・15 : SK200, 16 : EP129, 17 : EP111

出土遺物(3)



図版16 手藏田3遺跡



調査トレンチ（西から）



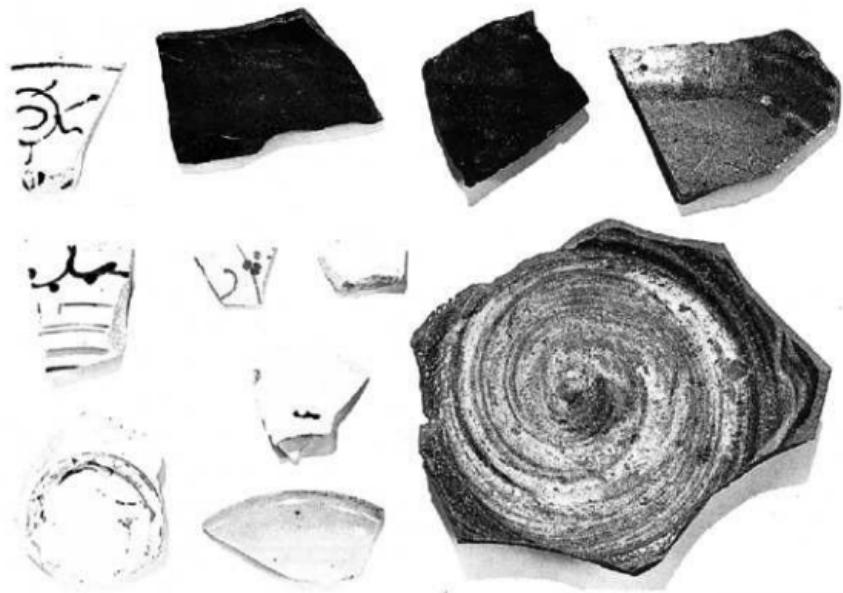
SD1 溝跡（東から）



SK2 土被跡（東から）



出土遺物（須恵器）



出土遺物（陶磁器）



A トレンチ（北から）



B トレンチ（西から）



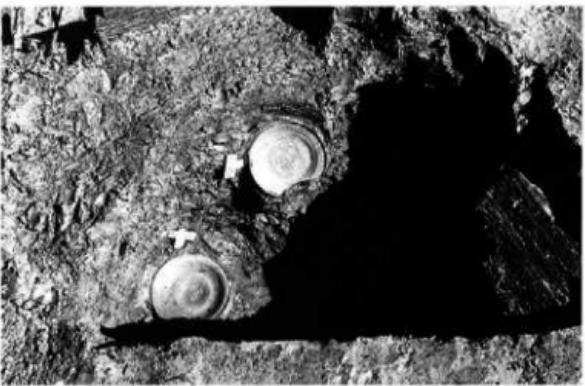
C トレンチ（西から）



SK2土壤跡  
SE3井戸跡検出状況  
(北から)



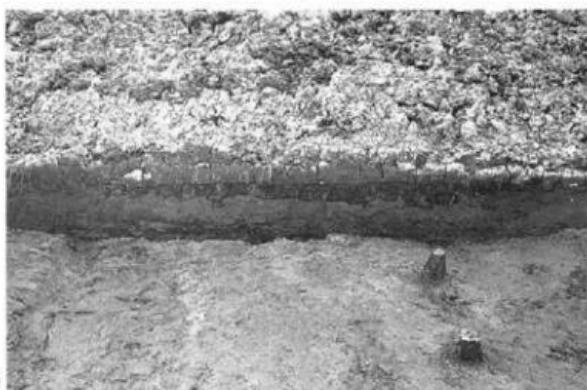
SK2土壤跡  
SE3井戸跡完掘状況  
(北から)



SK2土壤跡  
遺物出土状況



S G 7 河跡 (東から)



S G 7 河跡  
土層断面 (南から)



S G 7 河跡  
調査状況



S G 7 河跡  
遺物出土状況(1)  
(RP16他人面墨推土器)



S G 7 河跡  
遺物出土状況(2)



S G 7 河跡  
遺物出土状況(3)





1 (RP19)



2 (RP18)



3 (RP58)



4 (RP57)



3 b



5 (RP165)



5 b



6 (RP16-17-20)

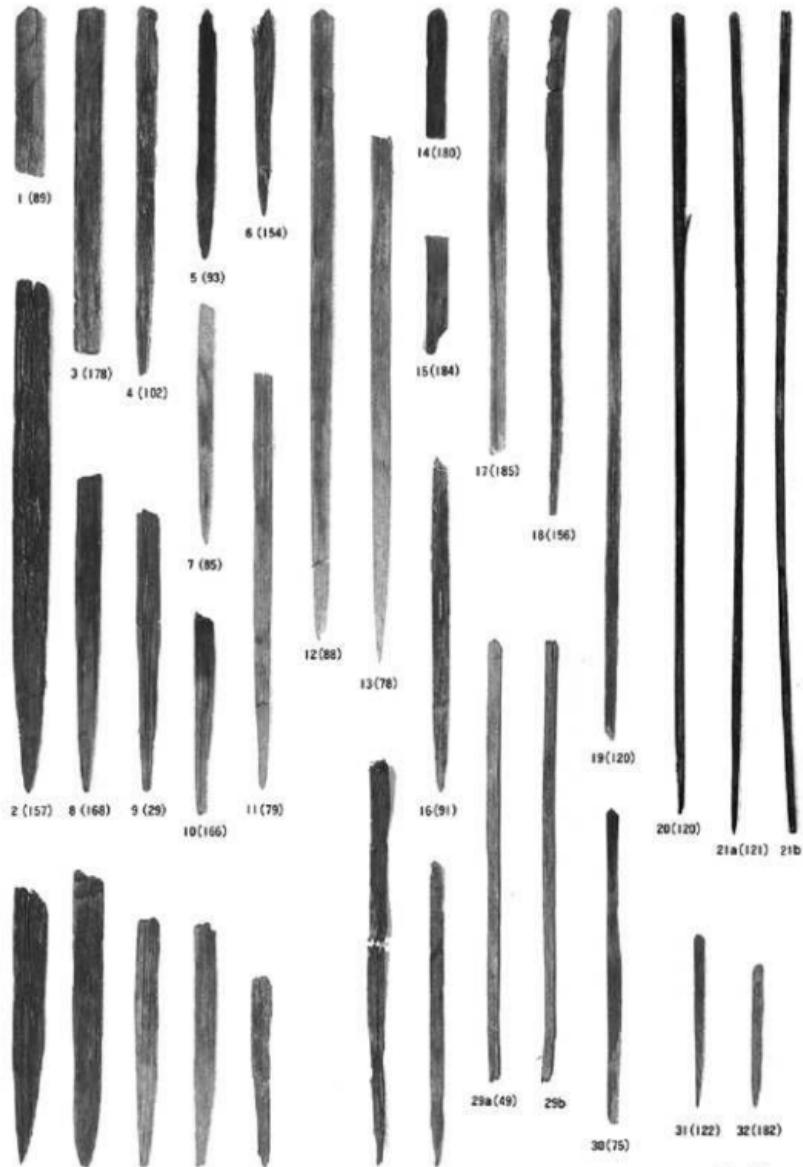


7 (RP56)

1・2 : SK2, 3~7 : SG7

S=1/3  
出土遺物(1)

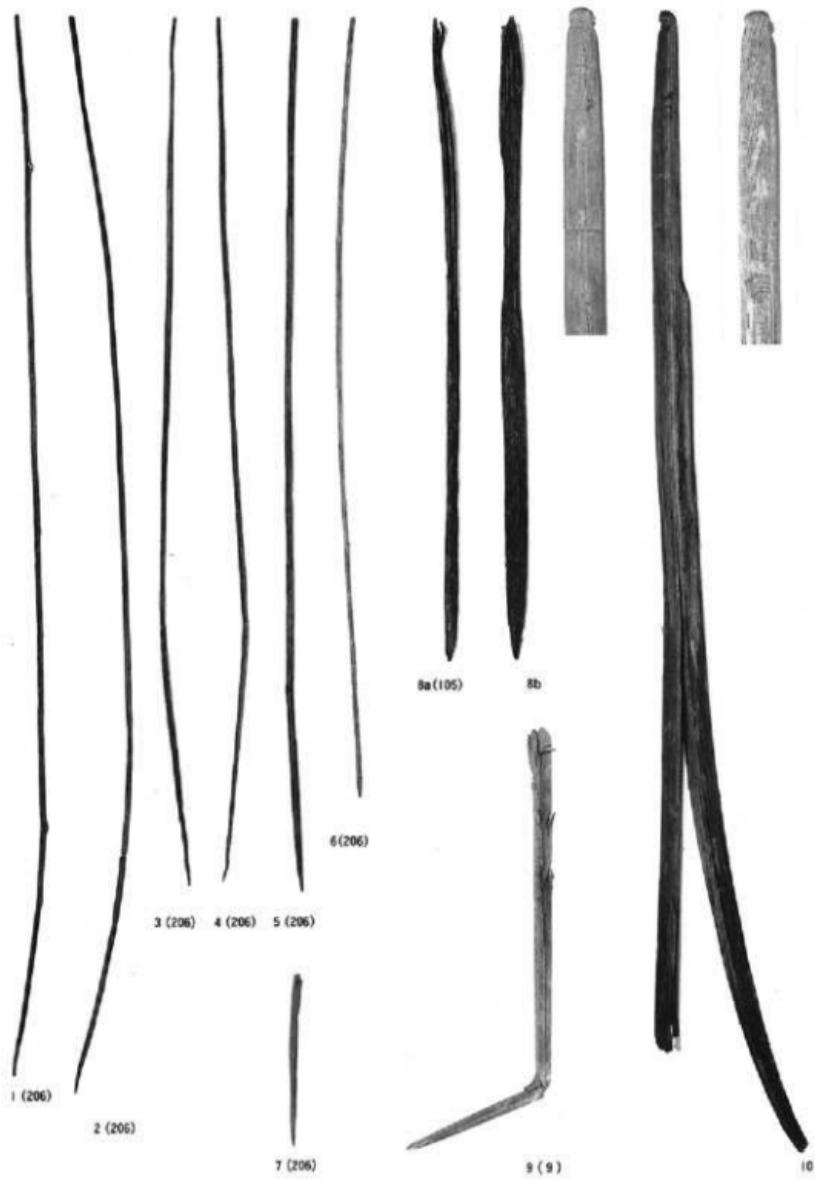
図版24 横代遺跡



\*( )内数字はRW遺物番号

S=1/4

出土遺物(2)



1~7 : SG 8, 8~10 : SG 7 (S=1/6 : 1~8 + 10 S=1/3 : 9)



熊野田遺跡第2次調査区近景（南から）



熊野田遺跡第1・3次調査区近景（北から）



調査風景



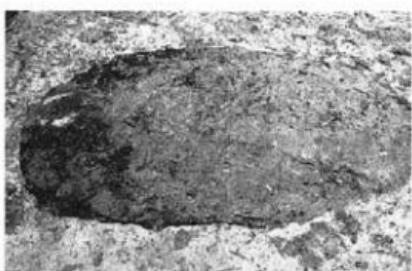
調査説明会風景



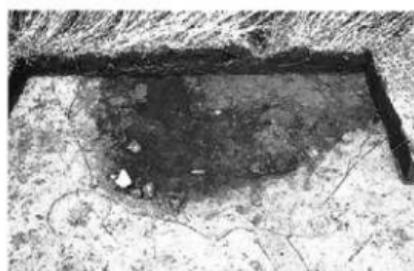
A トレンチ（西から）



SB101建物跡（南から）



SK98土壤跡（西から）



SK70土壤跡検出状況（南から）



SK70土壤跡完掘状況（南から）



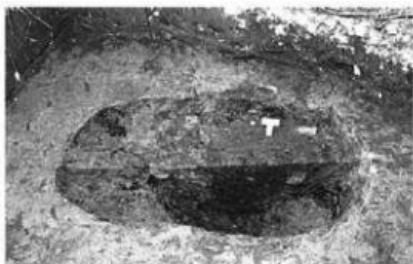
SB101 EP1 (東から)



SB101 EP2 (西から)



SB101 EP3 (西から)



SB101 EP4 (南から)



SB101 EP18 (北から)



SB101 EP19 (南から)



SB101 EP20 (南から)



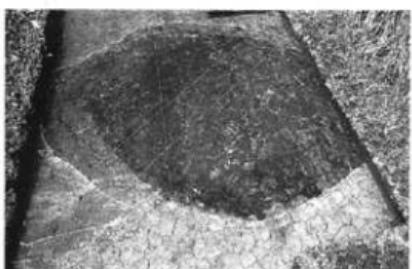
SB101 EP21 (南から)



C トレンチ（南から）



SK 38土壙跡（南から）



SK 40土壙跡（南から）



D トレンチ（北から）



D トレンチ（西から）



E トレンチ（北から）



S K95土壇跡（東から）



S K92土壇跡（南から）



S K93土壇跡（西から）



F トレンチ（東から）



F トレンチ主要部（東から）



S K81土壇跡（西から）



S K82土壇跡（北から）



学校前調査区近景（南から）



G レンチ（東から）



H レンチ（東から）



I レンチ（西から）



J レンチ（北から）



S K38土壤跡  
遺物出土状況

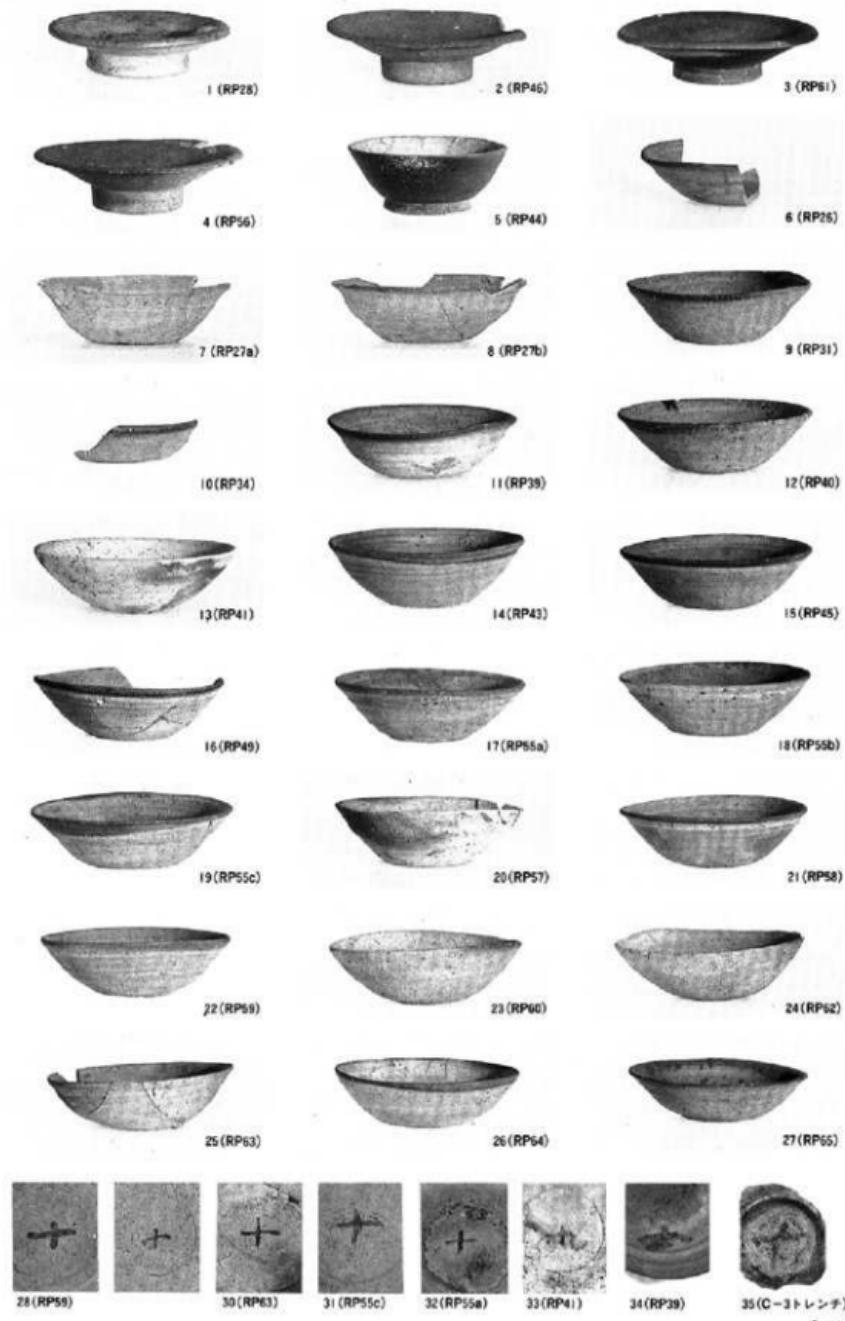


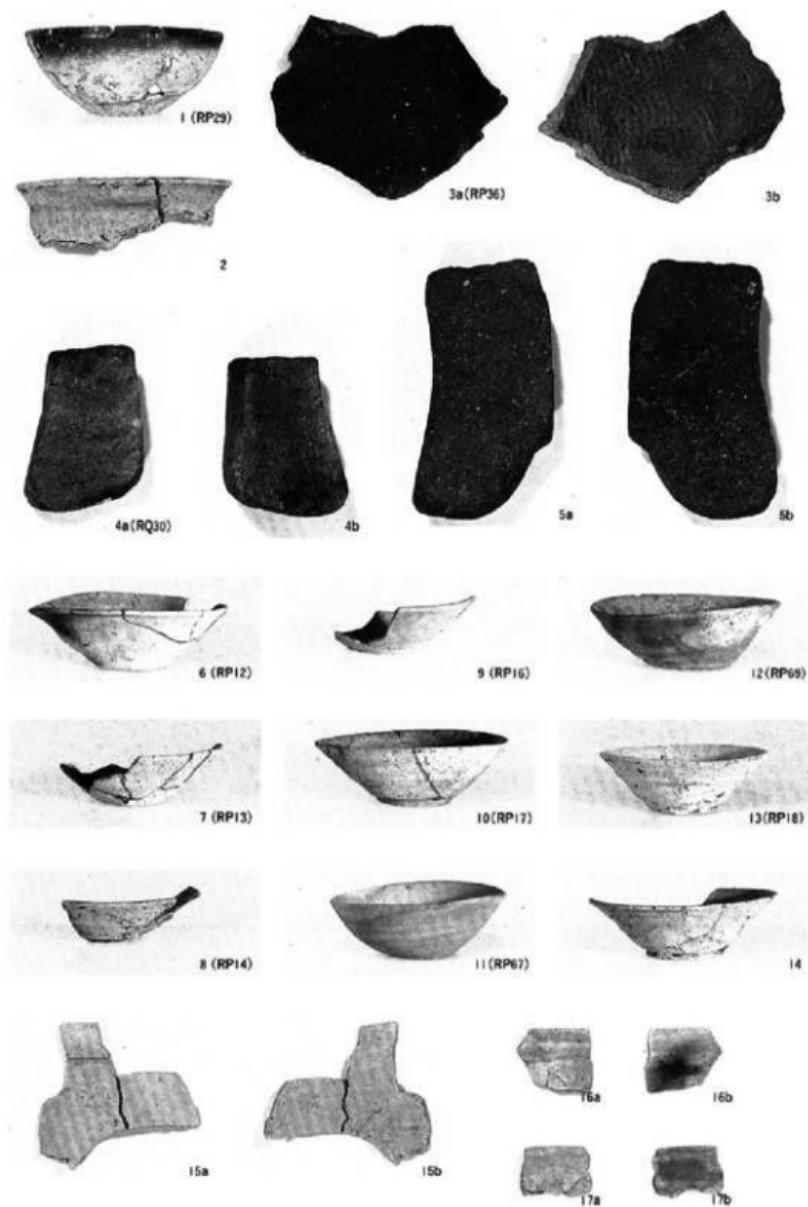
S K70土壤跡  
遺物出土状況(1)



S K70土壤跡  
遺物出土状況(2)

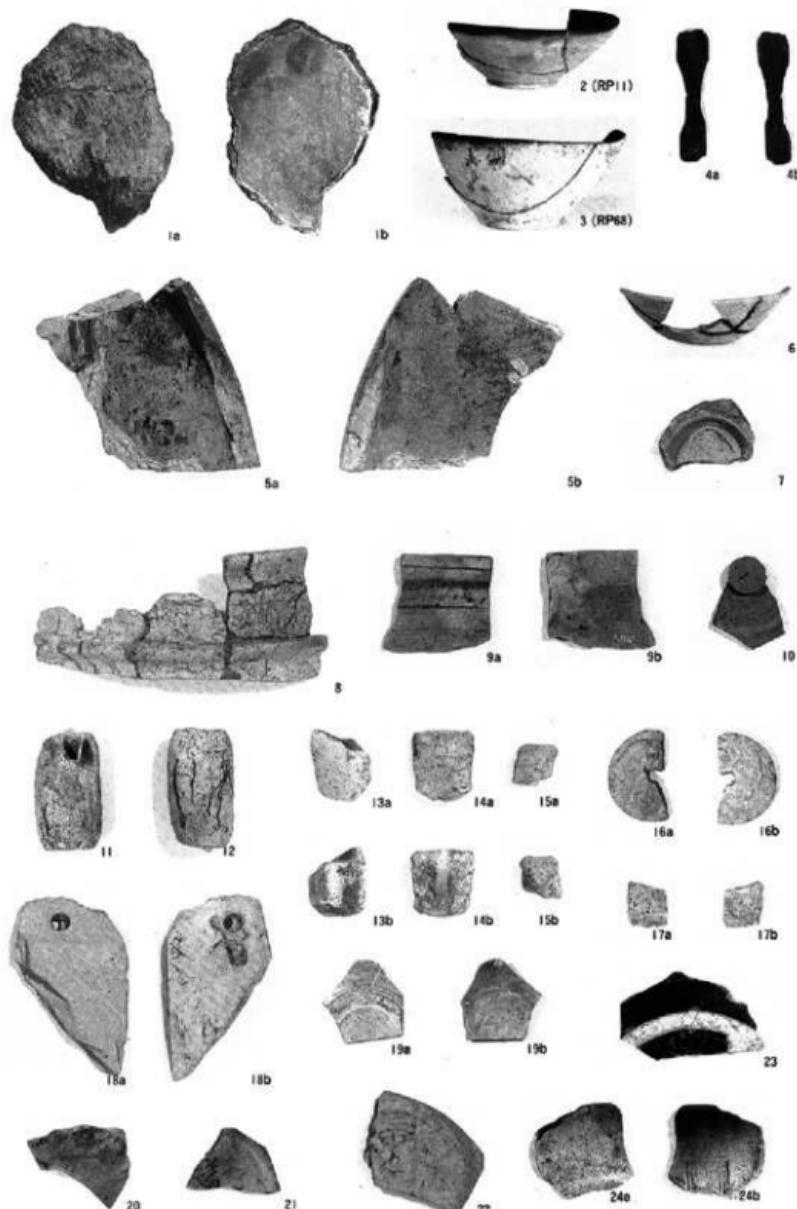
図版34 熊野田遺跡





1~5 : SK38, 6~17 : SK70

S=1/4



S=1/4

1~5 : SK70, 6~10 : SK90, 11 : SD59, 12 : SD57, 13 : A-3 トレンチ, 14 : E-2 トレンチ, 15 : A-1 トレンチ,  
 16 : B-2 トレンチ, 17 : E-5 トレンチ, 18 : SX31, 19 : TT204, 20~24 : SK40, 21 : X-8, 22 : A-2 トレンチ,  
 23 : E-5 トレンチ

山形県埋蔵文化財調査報告書第137集

平田地区遺跡群

おおひら つき しろくでん  
**大槻新田 遺跡**

て ひら だ  
**手蔵田3 遺跡**

よこ だい  
**横代 遺跡**

くま の だ  
**熊野田 遺跡**

発掘調査報告書

平成元年3月25日 印刷

平成元年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 田宮印刷株式会社